

小松発 ↓

北陸新幹線ルートの

弥生文化を探る

平成 27 年

11月29日 (SUN)

会場 サイエンスヒルズこまつ
小松市こまつの間 (JR 小松駅東口正面)

◆特別講演会 9:50 ~ 10:50

弥生時代の「小松文化」

石川日出志 (明治大学教授)

◆基調報告 11:00 ~ 12:30

笹澤 正史 (株式会社 吉田建設)

吉田 広 (愛媛大学ミュージアム)

馬場伸一郎 (下呂市教育委員会)

◆パネルディスカッション 13:30 ~ 15:30

・コーディネーター：石川日出志

・パネリスト：基調報告者

・ゲストコメンテーター：樋上 昇
(愛知県埋蔵文化財センター)

小松市
埋蔵文化財センター

Komatsu City Archaeological Research Center

石川県小松市原町1-77-8 電話 (0761)47-5713 e-mail: maibun@city.komatsu.lg.jp

主催：小松市・小松市教育委員会

掲載地図出典：川だけ地形地図 (承認番号 平 26 情使、第 964 号)
<http://www.gridscapes.net/#AllRiversAllLakesTopography>

特別展「北陸新幹線ルートの弥生文化を探る」開催中 12/6 まで

会場：小松市埋蔵文化財センター 開館時間：9:00 ~ 17:00 観覧料：100 円 (高校生以下無料)
会期中休館日：水曜日

●重要文化財八日市地方遺跡出土品とともに、石川県・富山県・新潟県・長野県の重要遺跡出土品を公開中

開催趣旨

北陸新幹線は、北陸と信州・関東を短時間で結び、今後、人々の往来がますます活発になることでしょう。実は、今から約二千年前をさらにさかのぼる弥生時代中期にも、このルートは文化交流に大きな役割を果たしていたと考えられています。JR小松駅東側の約15ヘクタールに及ぶ広大な八日市地方遺跡で生み出された独自の小松式土器は、南関東にまで到達しており、小松は、東に向かって開かれた扇の要であったといわれています。本フォーラムでは、小松発信の弥生文化の交流ルートとその原動力を検証していきます。

フォーラム日程

平成27年11月28日（土）会場：小松市埋蔵文化財センター

13:30～15:00 公開遺物検討会

・フォーラム講演会講師・パネリスト・ゲストコメンテーター及び当日参加研究者

平成27年11月29日（日）会場：サイエンスヒルズこまつひとものづくり科学館

9:50～10:50 特別講演会「弥生時代の『小松文化』」 石川 日出志（明治大学教授）

11:00～12:30 基調報告【90分（各30分）】

①「海の道、山の道、玉の道—玉がつなぐ地域間の交流—」

笹澤 正史（株式会社吉田建設）

②「青銅器の足跡—信州に至る北陸ルート—」 吉田 広（愛媛大学ミュージアム）

③「小松集団と交流する信州栗林集団」 馬場 伸一郎（下呂市教育委員会）

13:30～15:30 パネルディスカッション

「小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る」

・コーディネーター：石川日出志

・パネリスト：笹澤正史・吉田広・馬場伸一郎・下濱貴子

・ゲストコメンテーター：樋上 昇（愛知県埋蔵文化財センター）

- ・質問用紙はパネルディスカッションが始まる前に回収いたします。発表内容についてご意見・ご質問等ございましたら、ご記入ください。
- ・アンケート用紙はフォーラム終了後に回収いたします。ご協力よろしくようお願い申し上げます。



1 遺跡遠景



2 出土品集合

YOSHISAKI・SUBA site
吉崎・次場遺跡

石川県羽咋市



3 遺跡遠景



4 玉作工程品



5 銅鐸形土製品



6 朝鮮式磨製石剣



7 銅剣模倣石剣



8 遺跡遠景



9 出土土器集合



10 SX07 出土 玉作工程品



11 遺跡遠景



12 出土品集合



13 勾玉製作工程品



14 管玉製作工程品



15 遺跡遠景



16 出土品集合



17



18



19



20

- 17 柳沢遺跡と千曲川（手前から合流するのが夜間瀬川）
- 18 礫床木棺墓（中央が1号）
- 19 シカ絵土器
- 20 銅鐃と銅戈（上から三番目が九州型）

IKEGAMI site • KOSHIKIDA site • KOMIYA site
埼玉県熊谷市 行田市 池上遺跡・小敷田遺跡・古宮遺跡



21 遺跡遠景



22 小敷田遺跡第1号方形周溝墓 出土品集合

目次

開催趣旨・フォーラム日程

巻頭図版（所蔵・提供先は巻末に記載）

目次

講師紹介

【Ⅰ 特別講演】

弥生時代の「小松文化」

石川日出志

【Ⅱ 基調報告】

海の道、山の道、玉の道—玉がつなぐ地域間交流—

笹澤 正史…………… 1

青銅器の足跡—信州に至る北陸ルート—

吉田 広……………13

小松集団と交流する信州栗林集団

馬場伸一郎……………25

【Ⅲ 特別寄稿】

「北陸型」木製品の出現と展開

樋上 昇……………39

【Ⅳ 紙上報告 各地の遺跡概要】……………45

吉崎・次場遺跡

久田 正弘（公財）石川県埋蔵文化財センター

石塚遺跡

杉山 大晋 高岡市教育委員会文化財課

石名瀬 A 遺跡

杉山 大晋 高岡市教育委員会文化財課

吹上遺跡

湯尾 和広 上越市教育委員会

小泉遺跡

丑山 直美 飯山市教育委員会

柳沢遺跡

土屋 積 中野市立博物館

小敷田遺跡・池上遺跡・古宮遺跡

吉田 稔（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

講師紹介（発表順）

石川 日出志（いしかわ ひでし）

1954年新潟県に生まれる。明治大学大学院文学研究科博士課程 中退

現在、明治大学文学部 教授

主著・論文：『農耕社会の成立』岩波新書 2010

「卑弥呼時代の北陸」『北陸から見た日本史』洋泉社 2015

『「弥生時代」の発見・弥生町遺跡』新泉社 2008

笹澤 正史（ささざわ ただし）

1969年長野県に生まれる。駒沢大学文学部 卒業

現在、株式会社 吉田建設見附支店 埋蔵文化財調査部 調査課長

主著・論文：「分布圏北縁の動向—新潟県内の高地性環濠集落の素描—」『《論集》環濠集落の諸問題 2015』2015

「新潟県・吹上遺跡における土器様式の推移」『弥生土器研究フォーラム 13 資料集』2013

「越後頸城郡内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究第6号』1997

吉田 広（よしだ ひろし）

1967年愛媛県に生まれる。京都大学文学研究科博士後期課程 中退

現在、愛媛大学ミュージアム 准教授

主著・論文：「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 2014

「青銅器模倣研究の可能性」『青銅器の模倣 I』（第63回埋蔵文化財研究集会）2014

「柳沢遺跡出土銅戈の位置づけ」『中野市柳沢遺跡』2012

馬場 伸一郎（ばば しんいちろう）

1974年群馬県に生まれる。明治大学文学部 卒業

現在、下呂市教育委員会 生涯学習課 学芸員

主著・論文：「南関東弥生中期の地域社会—石器石材の流通と石器製作技術を中心に—」『古代文化』第53巻第5号・第6号 2001

「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』第54巻第1号 2007

「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究—弥生交易論の可能性を視野に入れて—」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集 2008

樋上 昇（ひがみ のぼる）

1964年奈良県に生まれる。関西大学文学部史学地理学科 卒業

現在、公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
調査研究専門員

主著・論文：『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣 2010

『出土木製品の保存と対応』考古学研究調査ハンドブック④ 同成社 2012

弥生時代の「小松文化」

明治大学文学部
石川 日出志

1. 導入：弥生時代とは

北陸の弥生時代「小松文化」を考えるに先立って、導入として「弥生時代・文化」とはどのような特色をもつのか、その主たる構成要素と特徴とをまず整理しておこう。弥生時代・文化は次のような特徴がある。

- ①. 灌漑稲作を主とする食料生産が始まった（第1図A）。稲作は朝鮮半島から導入された技術体系で、雑穀類（アワ・キビ）や果実類（ウリ・モモ・ヒョウタン）なども栽培された。ただし、雑穀の利用は地域ごとに大きな差異がある。
- ②. 金属器の利用が始まる。生産用具の利器として、旧石器時代以来利用されてきた石器類に替わって主に鉄器（青銅利器はきわめて希薄）が普及し始め、遅くとも弥生後期には鉄器が利器の中心的役割を担うに至る。青銅器は主に祭器や威信財・装身具として用いられた。
- ③. 稲作に伴う開墾などの共同作業や水利の問題などから、集団内外の軋轢や組織化が進行する。社会的緊張も意識されたようで、防御的意図をもつ環濠集落（第1図B）や高地性集落が現れる。社会の階層化が進行し、一集落内の限られた単位のみが収穫物を管理するなど優位な立場に立つ状況（第1図C）や、特定の個人が漢王朝系文物を集中保有するなど著しく優位な立場のグループや個人が現出した。
- ④. 社会的に優位な集団や個人は、初め朝鮮半島、のちに漢王朝など大陸の強大な政治勢力と交渉を重ねるようになる。「漢委奴國王」金印や『後漢書』は、それを知る格好の資料であり、やがて『魏志倭人伝』に記されるように倭国と魏の政治交渉が繰り返された。
- ⑤. 弥生時代に九州・四国・本州で農耕社会が形成され、次第に政治的社会が形成されていくのに対して、北海道や沖縄方面は農耕を受容せず、異なる歴史の道をたどるようになる。弥生時代は、日本列島を舞台とする歴史の上で重要な分岐点となった（第2図B・C）。
- ⑥. 弥生時代・文化の領域と理解するものの、そのなかでの地域的差異が明瞭で、前後の縄文・古墳時代と比べても文化・社会の地域的変異が大きい。かつて、西高東低の弥生文化観が主流であった（第2図A）が、こうした著しい地域差を理解するには、それぞれの地域の文化的特徴の形成過程やその変遷、隣接地域どうしの相関関係を読み解くことが重要である（第2図D）。そして、それこそが各地域で生きた人々の歴史を描くのである。

2. 小松式土器理解の歩み

北陸の「小松文化」を考えるには、まず小松式土器を理解する必要がある。

八日市地方遺跡は戦前の1930年に後藤長兵衛氏によって発見され、1937・38年に後藤長平氏と上野与一氏が小発掘を行った。戦後1949年に小松高校、翌50年に明治大学と石川考古学研究会が発掘調査し、1952年に杉原荘介氏が小松式土器を提唱した。1955年に刊行さ

れた『日本考古学講座 4』で図示され（第 3 図 A）、広く知られるようになるが、資料は著しく断片的である。1957 年には羽咋市次場遺跡の調査成果が浜岡賢太郎氏によって公表された。そこで次場下層式と分類された一群は小松式とほぼ同じ内容をもつが、分類に問題があるものであった（第 3 図 B）。また、1952 年に佐渡の千種遺跡が調査された際に、佐渡に櫛描文土器が存在することが注目されて「竹ノ花式」土器と命名され、1964 年には新穂遺跡群の発掘調査成果が公表されて小松式と酷似することが明らかになる（第 3 図 D）。1966 年に、橋本澄夫氏が北陸の弥生土器編年を整理して、それまで杉原氏が後期としてきた小松式を中期後半と改め、畿内を主として中国方面とも関連をもつ櫛描文土器とみなすとともに、稲作の本格的普及期と評価した（第 3 図 C）。今日の理解の基本が提出されたと評価できる。しかし、いまだこの時点では石川県内の資料はかなり限られていた。むしろ富山・新潟両県でこのあと資料が蓄積されていく。1967・68 年に調査された高岡市石塚遺跡の資料が 72 年に公表され（第 3 図 E）、上野章氏が中期でも古い特徴を持つ資料を含むことを指摘する。1978 年には柏崎市下谷地遺跡が調査され、小松式土器が多数出土した（第 4 図）。

私たちが下谷地遺跡で注目したのは、瀬戸内など中国地方に顕著な口縁内面貼付突帯片口壺（1）の存在と、濃尾飛地方の条痕文土器の属性を持つ壺（14・17）が中期前半と接点を持ち得る点、さらに直線文と簾状文・短斜線文を重ねる櫛描文手法はその構成から見て簾状文と短斜線文は波状文の省略形とみるべき点であった。これによって、それまで簾状文を、小松式と分布域に接点のない畿内Ⅲ様式と関係づけてきた無理から解き放たれ、中国地方と東海地方の 2 方面から小松式の形成過程を考えることが可能となった。平地住居と掘立柱建物が混在する居住域の中に方形周溝墓が点在し、しかも方形周溝墓は東海系の四隅土橋形であることも重要であった。しかし、石塚遺跡でも、下谷地遺跡でも、また 1975 年から始まった次場遺跡の調査でも、小松式土器の形成過程を具体的に復元することは困難であった。

ようやく 1993～2000 年に行われた八日市地方遺跡の継続的調査によって初めてそれが可能となった。もっとも注目すべきは濃尾飛系条痕文土器で、特にそれと組成する大地タイプが小松式土器の形成に著しく重要な位置を占めることであった。この点は、私ほうかつにもそれまでまったく想定していなかった。

3. 小松式土器の形成過程と拡散

小松式土器の基本的特徴とその形成過程について、器種および器形と装飾に主眼を置いて簡潔に整理する。八日市地方 6 期を形成期、7～8 期を全盛期、4・5 期を形成前段階とする。

小松式土器は、完成された櫛描文土器の 1 型式であり、周辺諸型式から独立した位置を占める。櫛描文は、直線文と波状文や簾状文を間隔を空けずに密に施す複帯構成が徹底しており（第 5 図 188・616・320 など）、甕外面の施文率が目立つ点（383）、さらに櫛描文帯の下端に点列状の短斜線（383）を置く点、頸部突帯（510）、無頸壺（320）や鉢が組成する点は、いずれも丹後以西の中国地方の中期前葉の櫛描文土器（133・163・231）の特徴を継承している。一方、受口口縁（616）・口縁下押捺突帯（385）横羽状文の盛用（385・510・383）は濃尾飛系条痕文土器の特徴を継承し、口縁部が大きく外反して内面に広い施文帯を設ける点（385・

510・383)は大地タイプの特徴を継承する。つまり、中国系櫛描文土器と濃尾飛系条痕文土器の2系統が統合されているのである。濃尾の貝田町式に由来する腰部屈折壺や丁子文、近江系の疑似流水文(510)もみられるが、腰部屈折だけが小松式に少量定着するにすぎない。したがって、基本的には東西2系統の土器型式が4・5期に定着し、それが6期になって一体として構造化する状況が確立する。これをもって小松式土器の成立とみなす。

福井平野の状況がまだ不明確である点は注意を要するものの、こうした形成過程を追跡できるのは石川県域では八日市地方遺跡しかなく、小松式土器は当遺跡で形成されたとみなせる。そして6期以後、富山・新潟両県内の平野部に広く拡散し、小松式土器分布圏が形成される。その分布圏は中期末まで大きな変化はみられず、小松式土器の形成・拡散・定着が明瞭である。

4. 「小松文化」とは

「小松文化」という用語法に違和感をもつ方もあろうから、説明が必要であろう。もっとも明瞭な指標は、上記のような過程を経て形成された小松式土器である。しかし、それ以外の特徴も合わせて「小松文化」設定する。

集落形態は、八日市地方遺跡(第6図)のように環濠集落が採用されていることは明らかであるが、下谷地遺跡のように、地域の中核でありながら大規模でない集落では環濠を設けない場合があり、そこでは居住域と墓域の分離が明確ではない(第4図)。環濠の採用は必ずしも徹底されてはいない。また、新潟平野では中核的な大規模集落は存在しない可能性が高い。住居構造は、能登の細口源田山遺跡のように台地上の遺跡では竪穴住居を採用するものの、低地部の遺跡では外周溝をもつ平地住居が明瞭である。この平地住居は、東海地方で縄文晩期から弥生中期に継承された構造で、濃尾の貝田町式土器や濃尾飛系条痕文土器の波及とともに北陸に導入されたものであり、古墳時代前期まで北陸の主要住居構造となる。

墓地は方形周溝墓が採用される。しかし、下谷地遺跡(第4図)や細口源田山遺跡など四隅土橋形が主流だが、八日市地方遺跡(第6図)では周溝が全周する長方形傾向の実例が見られ、濃尾系ばかりとは言い難い点に注意が必要である。

「小松文化」のもう一つの特徴は、緑色凝灰岩製管玉を盛んに製作する点で、これは弥生前期の山陰で定着した技術の発展形として北陸に定着したものである。施溝分割法を伴う管玉製作は、小松式土器を出土する集落ではどこでも行われており、新潟平野の小規模集落でも実施される。新穂遺跡群や吹上遺跡のように遠隔地を含む他地域への供給を行う生産もあれば、小規模な自家生産・自家消費の集落もある。

以上が「小松文化」の基本的特徴であるが、八日市地方遺跡では、小松文化の中核集落とし

「小松文化」の特徴として、周辺土器型式圏との連携が明瞭な点も挙げておくべきであろう。第一に長野県北部の栗林式土器との連携で、まず栗林式土器が形成される契機のもっとも重要なのは小松式土器の関与である。栗林式土器は、塩崎遺跡群松節地点など前段階の土器群から単系的に成立するのではなく、ハケメ調整、口縁部の強いナデという製作技術および無頸壺という新器種の採用に小松式土器および丹後以西の土器型式からの影響の強さを伺うことができる。中野市柳沢遺跡の青銅器群と埋納行為も、小松式土器分布圏の中核集落との連携なくして

もたらされることはなかったはずである。さらに、新潟平野では会津盆地の南御山2式土器、秋田方面の横長根A式土器との連携を見ることができる（第5図右下）。

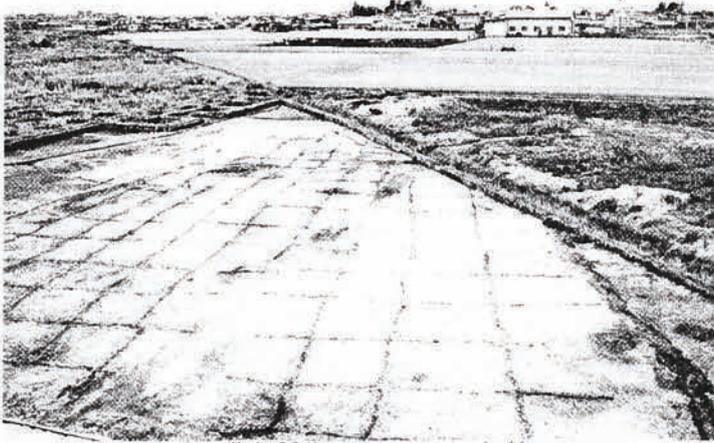
そもそも、西日本と異なって、東日本では弥生土器型式の分布領域とその境界が明瞭で、他の考古学的属性も土器型式と一定程度対応する傾向が明瞭である。さらに、その形成過程に複数の土器型式が関与する場合があります、これも「小松文化」を採用する理由の一つであり、長野県北部域から関東北西部や新潟県魚沼郡域などに広がる「栗林文化」など各地に見出せる。

5. 「小松文化」と八日市地方遺跡

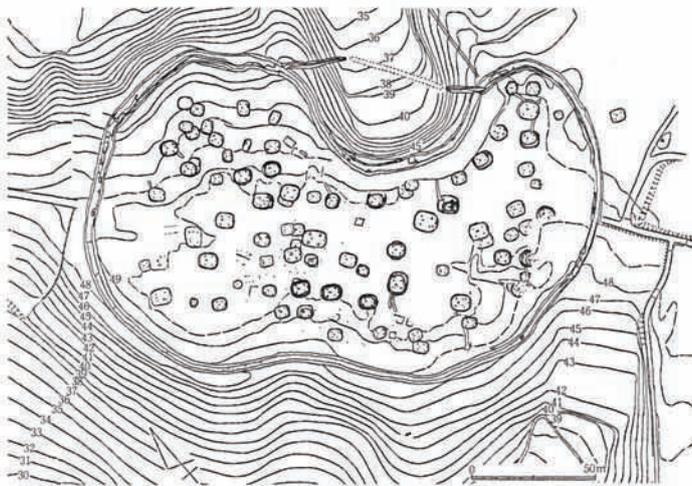
東西2系統の隣接地域の土器型式が統合・再編されて小松式土器が形成されたこと、およびその中核が八日市地方遺跡であることは異論なからう。ただし、小松式土器の形成に福井平野の遺跡群がどう関わったかは今後の資料の蓄積と検討を待たねばならない。それでは、それ以外に、「小松文化」圏のなかで八日市地方遺跡はどのような位置を占める存在なのであろうか？

「小松文化」を代表する遺跡としては、口能登の次場遺跡、砺波平野の石塚遺跡、高田平野の吹上遺跡、佐渡国中平野の新穂遺跡群（ただし小松式後半期）などがあげられる。もちろん、河北潟や放生津潟の各南方一帯にも同種の遺跡が存在する可能性があるものの、なお不明である。これら石川・富山・新潟3県域の「小松文化」圏内の集落遺跡の中で、八日市地方遺跡はまずその規模が際立っている（第6図）。弥生前期に小規模集落として出現し、中期初頭から前葉にかけて飛躍的に規模が拡大する。まさしく小松式土器の形成過程と連動している。調査区北方を河川が蛇行して西に流れ下るが、さらにその北方にも一部遺跡が広がるようである。そして、分銅形土製品や人物像彫刻や舟の表現のある箱板や琴板、優れた造形の木製容器は山陰方面との交流の濃さを表し、銅剣・銅戈形木製品も北近畿以西との関わりを示す資料である。また、銅鐸形土製品の存在は、最初期銅鐸である菱環鈕式銅鐸が近畿周辺に広く分布することや、菱環鈕1式とみられる銅鐸鑄型未成品が出土した福井県坂井市下屋敷遺跡の土器群内容を併せ考えると、初期銅鐸が「小松文化」圏においても存在した可能性があることを示すものである。長野県北部の柳沢遺跡で発見された銅鐸5点・銅戈8点の一括埋納も、「小松文化」圏、とりわけ八日市地方遺跡の仲介なくして理解することはできない。栗林式土器や長野盆地製の榎田型磨製石斧が広く「小松文化」圏で出土し、八日市地方遺跡でも資料数が多いとは言えないが出土している。

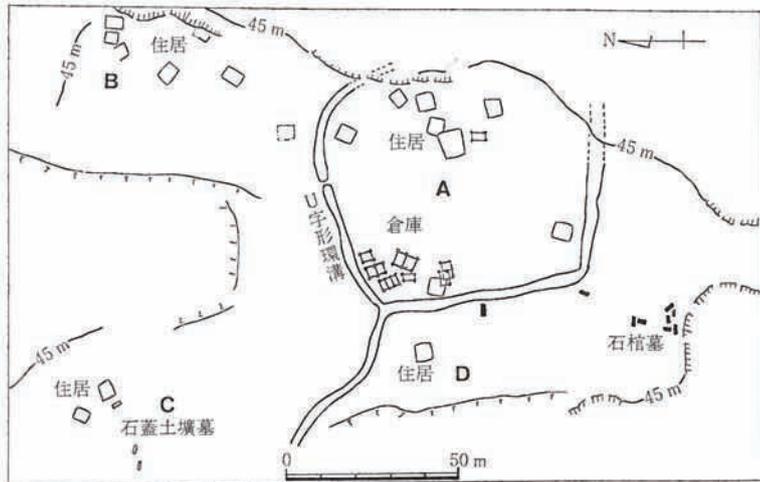
このように、八日市地方遺跡は「小松文化」圏のなかでも中核的な役割を果たしたことは疑いない。「北陸第Ⅲ様式」といった無機的な名称ではなく、小松式土器・「小松文化」と命名する理由はここにある。そして、濃尾平野の朝日遺跡が、太平洋側で西日本と東日本を結びつける結節点であったように、八日市地方遺跡は弥生時代中期における西日本と東日本を接続する扇の要の役割を果たしたと考える。



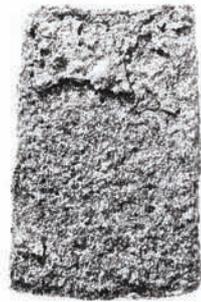
A: 灌溉稲作 (青森県垂柳遺跡)



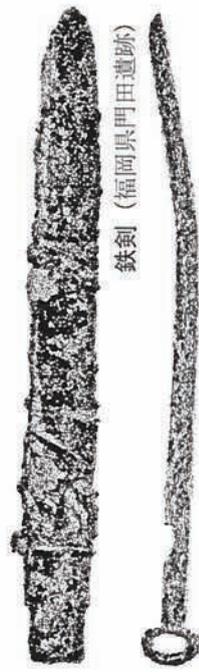
B: 環濠集落 (横浜市大塚遺跡)



C: 社会の階層化 (佐賀県千塔山遺跡)

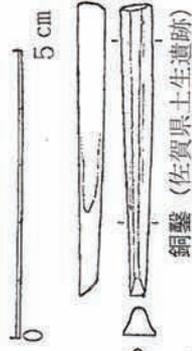


鉄斧 (長野市光林寺裏山)



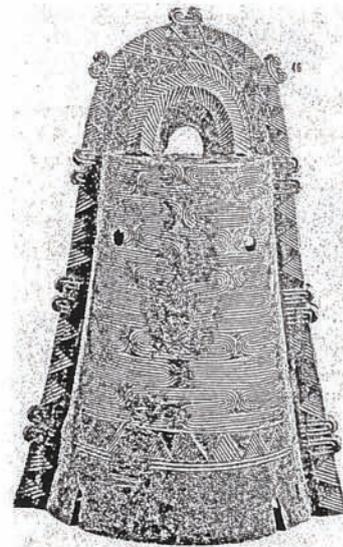
鉄剣 (福岡県門田遺跡)

鉄刀 (佐賀県横田遺跡)



銅鏃 (佐賀県土生遺跡)

D: 金属製利器



E: 青銅祭器 (銅鐸: 大阪府跡部)



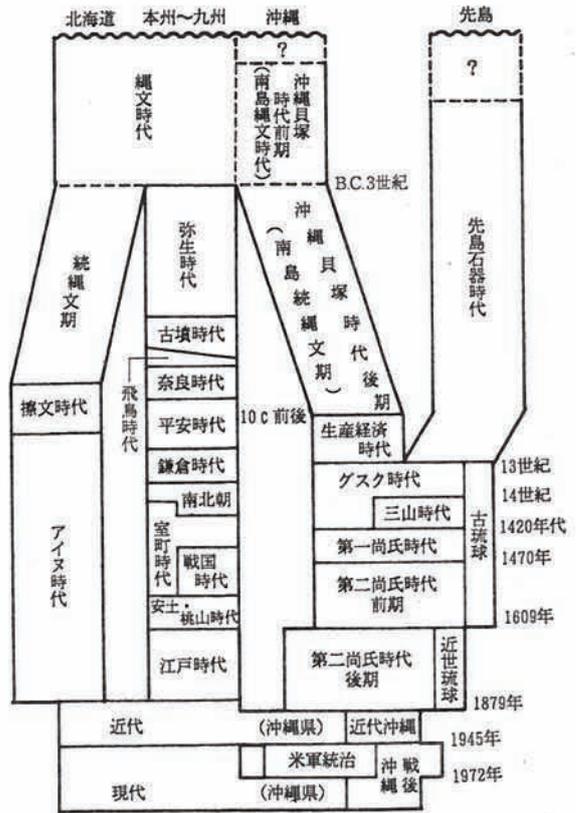
F: 「漢委奴國王」金印と『後漢書』 (建武中元二年=AD57年)

謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升
等獻生口百六十人願請見桐靈間倭國
大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰
卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑眾

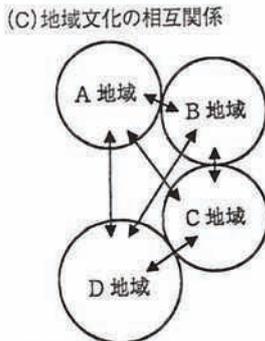
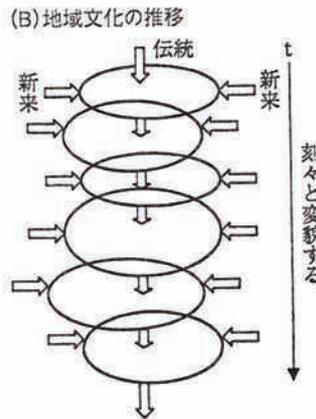
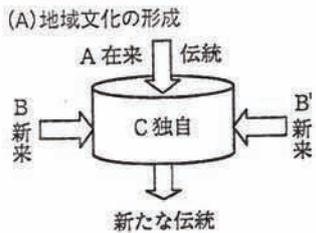
第1圖 弥生時代とは(1)



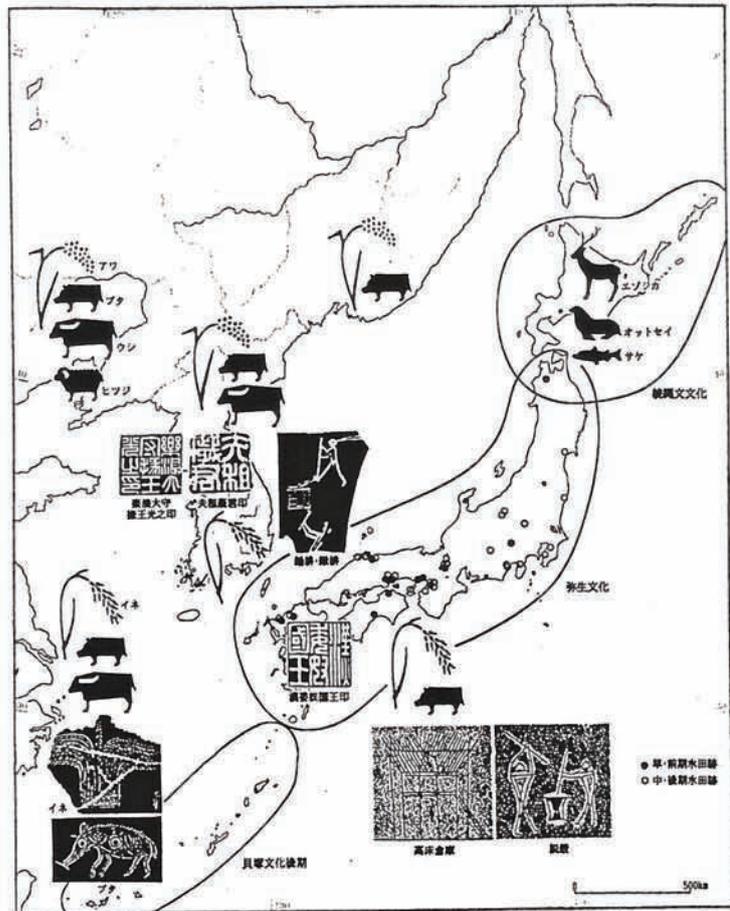
A : 弥生文化の伝播 (杉原 1977)



B : 日本列島を舞台とする歴史と弥生文化 (安里 1990)

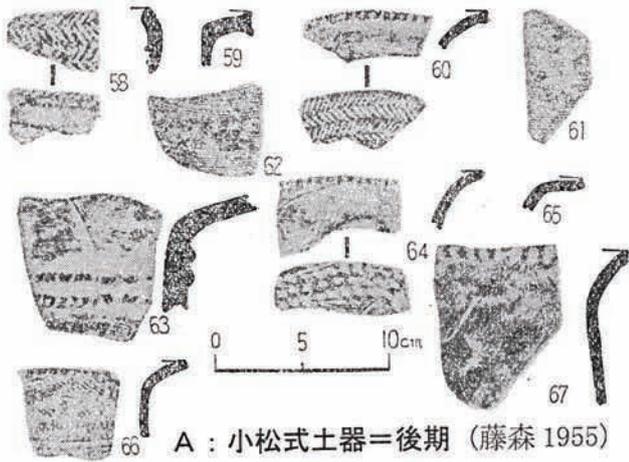


D : 弥生文化をどう見るか (石川 2010)

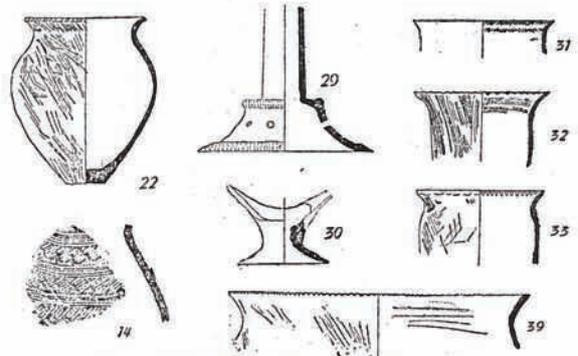


C : 弥生文化の広がり (春成 1994)

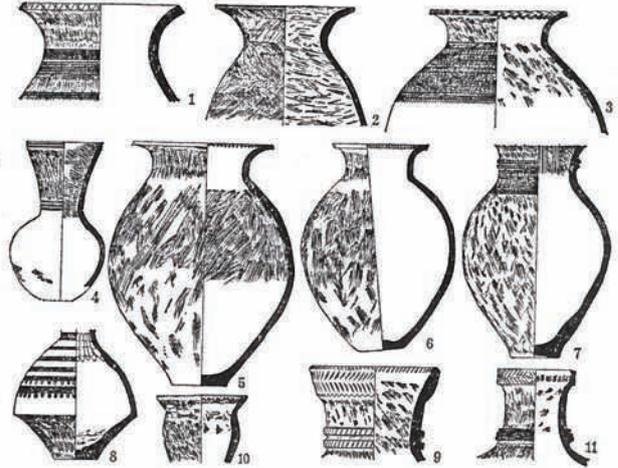
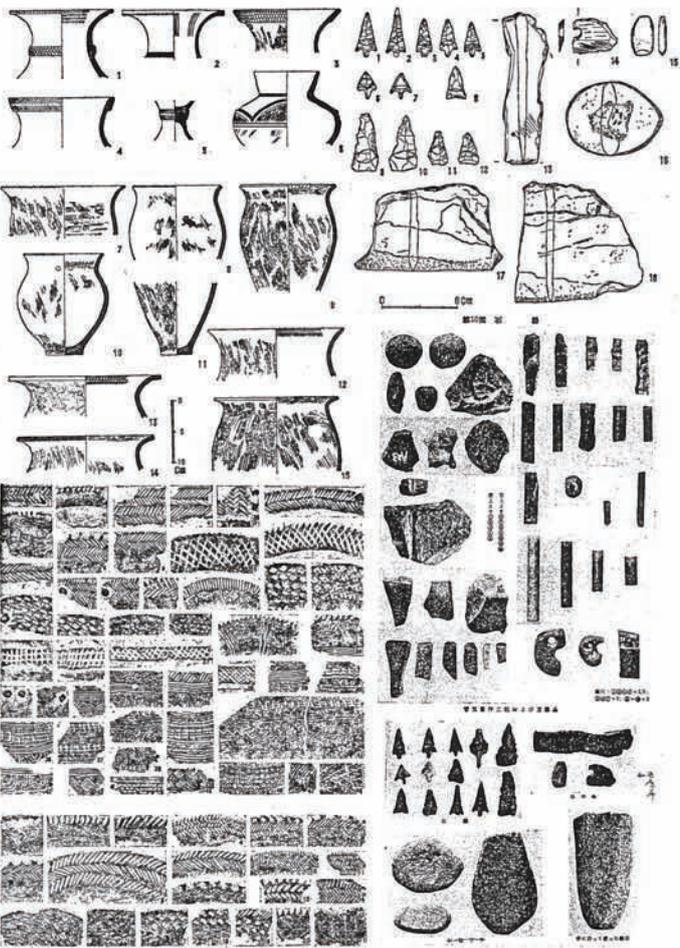
第2図 弥生時代とは (2)



A : 小松式土器=後期 (藤森 1955)



B : 「次場下層式」(浜岡 1957)



D : 佐渡の「竹ノ花式」土器 (九学会 1964)

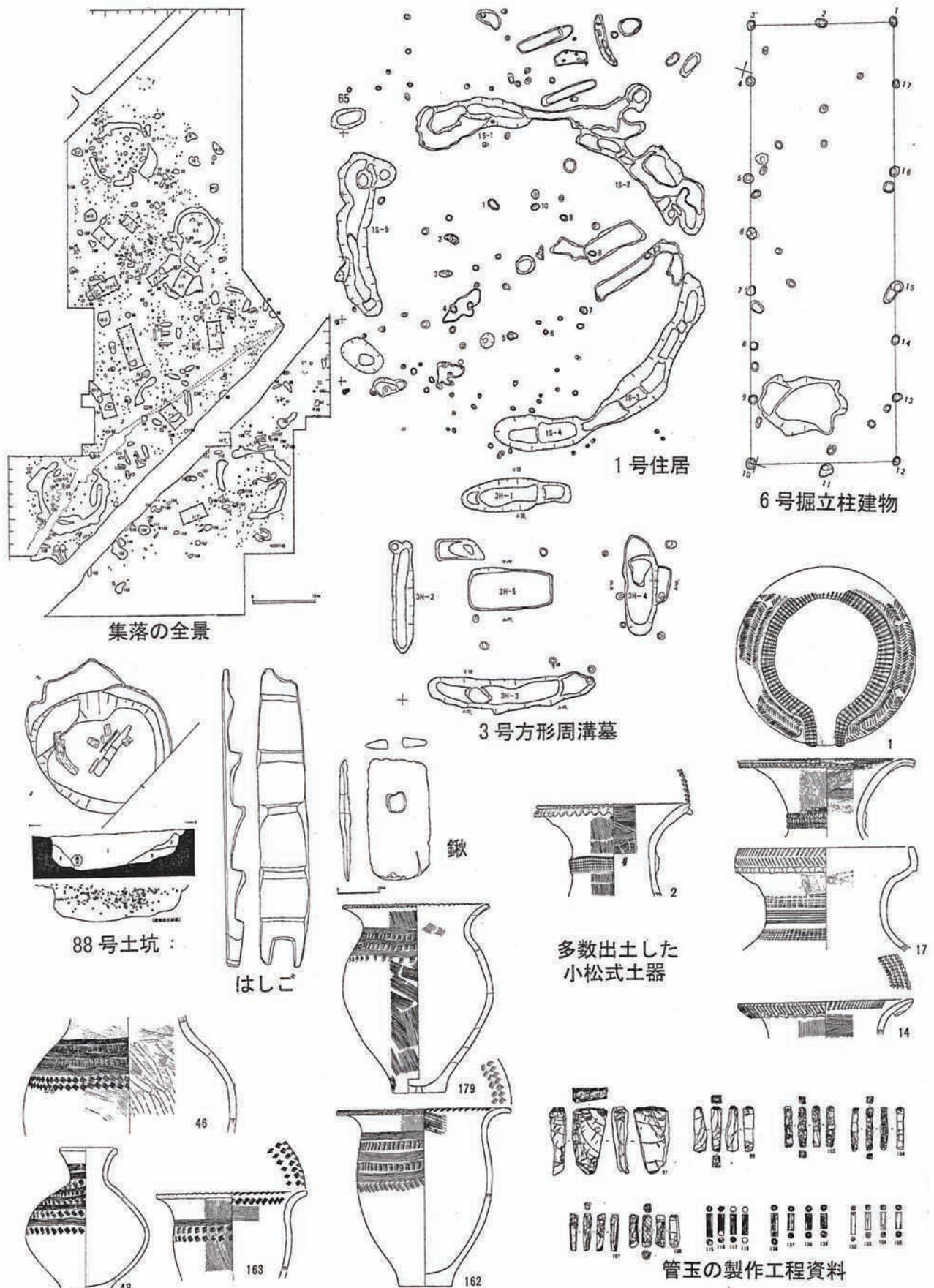
図2 第二次統及期の土器 1・2 石川県小松, 3・4・9 石川県次場, 5 富山県赤祖父, 6 富山県岩瀬天神, 7・8 石川県梯川, 10 石川県一ノ宮, 11 石川県羽咋高校前 (縮尺 1/8)

C : 「小松式」=中期 (橋本 1966)

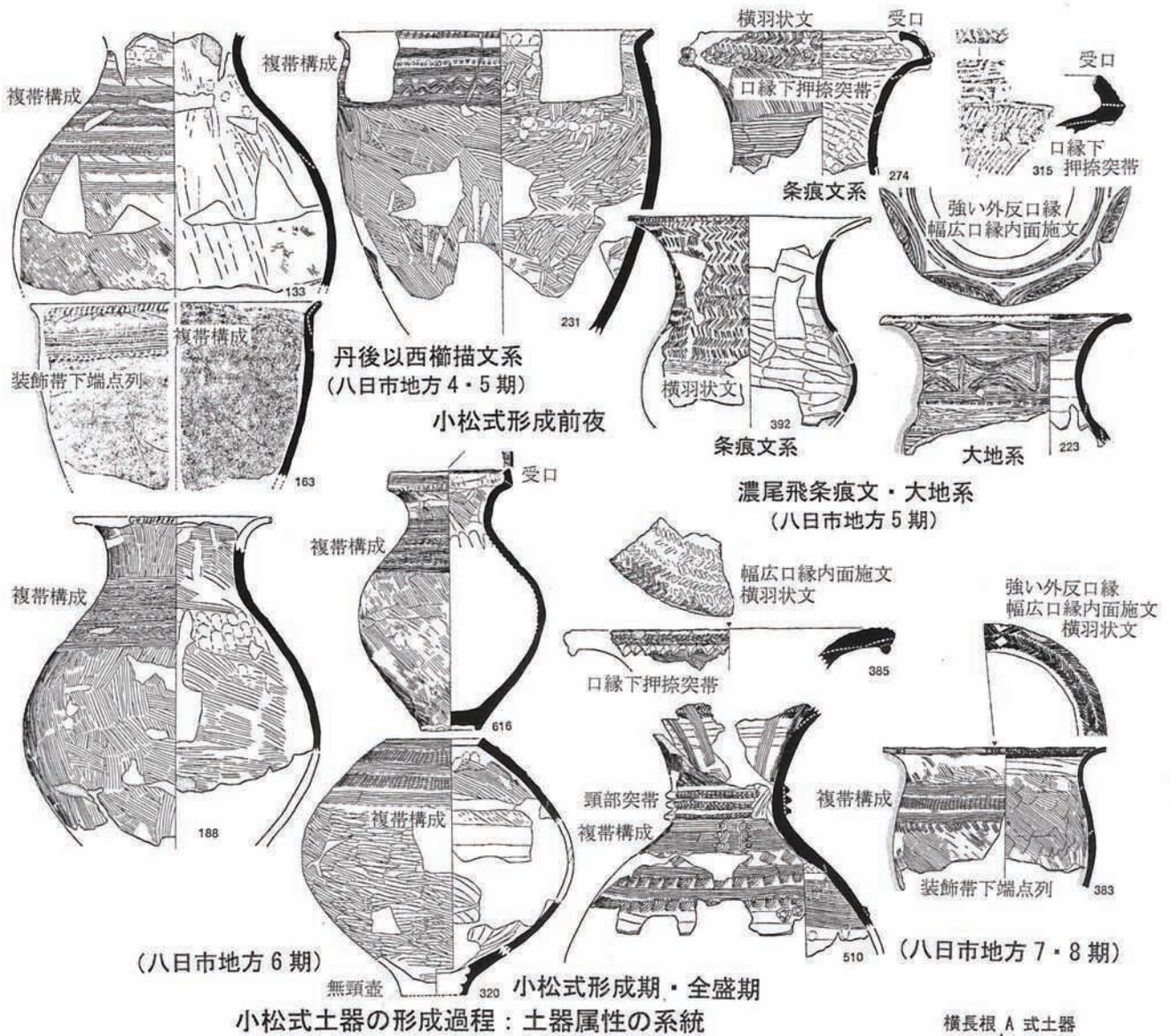


E : 高岡市石塚遺跡の小松式土器 (上野 1972)

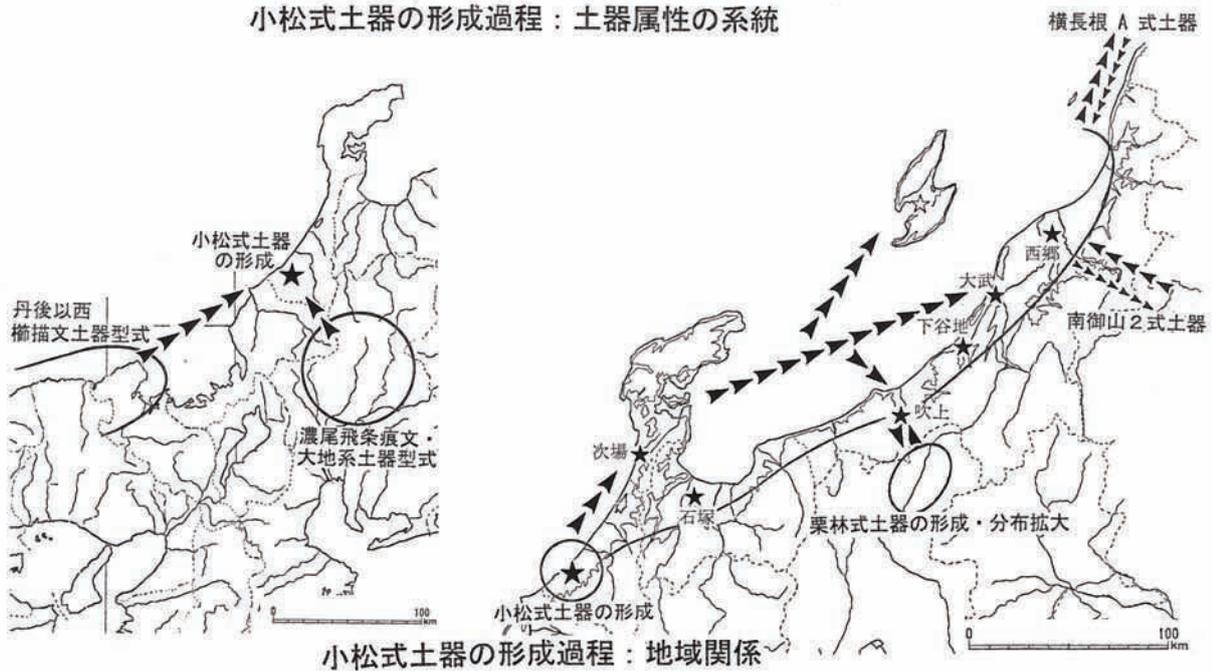
第3図 小松式土器理解の歩み (1)



第4図 小松式土器理解の歩み(2): 柏崎市下谷地遺跡の小松期集落と土器(金子1979)



小松式土器の形成過程：土器属性の系統



第5図 小松式土器の成立過程とその拡散および周辺型式との関係



第6図 八日市地方遺跡から「小松文化」を考える (福海ほか 2003 より抜粋)

海の道、山の道、玉の道

—玉がつなぐ地域間の交流—

株式会社 吉田建設
笹澤 正史

1 新潟県の弥生文化はどこから来たか

北陸の弥生(小松)文化は八日市地方遺跡で開花し、日本海沿いに北陸北東部に伝わった(図1)。それは、八日市地方遺跡が最盛期を迎える八日市地方7・8期のことで、短期間のうちに新潟県北部域にまで達した。

新潟県で出土する弥生土器や管玉の作り方をしてみると、能登半島や富山県のものに類似しており、八日市地方遺跡よりも、能登半島以東との文化的なつながりが強い。おそらく、八日市地方遺跡から直接にではなく、能登半島周辺に根付いた弥生(小松)文化が人の移住等により新潟にもたらされたのであろう。ただし、長岡市(旧和島村)大武遺跡のように、一部は八日市地方遺跡からの移住によって弥生(小松)文化が伝えられたと推測できる地域もある。

新潟県で、最初に作られた弥生時代の大きなムラは、交通の要衝や玉作りの原石を入手しやすい場所(図1)にあり、ある程度地理的な情報と地域の情勢を入手して弥生(小松)文化を伝えた人たちが西から移住してきたと考えられる。

交通の要衝であった点は、遺跡周辺に古代の地方行政を司る役所であった郡衙が造られた(吹上遺跡の周辺に頸城郡衙、しもやち下谷地遺跡周辺に三島郡衙、大武遺跡周辺に古志郡衙が比定されている)ことが示している。

2 新潟県域の弥生文化の特色

小松式土器の文様の変化(図2・3)や管玉や勾玉の製作方法(特に分割方法)をみると、新潟県の弥生文化は八日市地方遺跡のもととは異なり、能登半島周辺や富山県域との共通性が高い。一例を挙げれば、能登半島以東は、小松式土器を斜行短線文と呼ばれる短冊形の文様で装飾することを好む傾向が強く、時期が新しくなりにつれ、よりこの文様を使用して華美に土器を装飾する。一方、八日市地方遺跡のものは、直線文や簾状文れんじょうもんといった伝統的な文様で装飾するものが多く、保守的な面が強い。

次に管玉の作り方(図4)を見ると、八日市地方遺跡では石材を分割する時に、立方体または直方体とした素材の長辺に擦り切り溝を入れて分割する「横取り」と呼ばれる分割方法が多く用いられ、新潟県周辺では素材の短辺に擦り切り溝を入れて分割する「縦取り」と呼ばれる分割方法が多用されるなどの違いがあり、弥生(小松)文化が遠方の地域で根付く過程ですこしずつ変容していく様子が伺える。

また、住居となる建物の柱の配置や柱間の取り方(図5)、墓の配置の仕方などにも八日市地方遺跡との違いが認められ、新潟県の弥生文化には、新しい文化をそのまま受容するのではなく、移民と在地の人との交渉によって、弥生(小松)文化が伝わる以前の生活習慣を組み込みながら新たな生活様式と社会が作られていった過程を見出すことができる。ただし、大武遺跡

のように、八日市地方遺跡とのつながりが推測できる(図2～4)遺跡では、北陸西部の文化的な影響がより強く作用していたと考えられる。

3 信州との交易・交流の拠点となった吹上遺跡

吹上遺跡は、新潟県南西部の上越市に所在する。上越地域は、古来より現在まで信州方面との交流が盛んな土地柄である。吹上遺跡は、上越市域の大半を占める高田平野と呼ばれる平野の南西端に立地する。ここは、信州への峠道へと向かう入り口にあたり、平野部から富倉峠を越えて飯山・中野方面、野尻湖を越えて長野方面へと向かう分岐点となっている。

吹上遺跡は、弥生時代中期(八日市地方7期)に成立し、古墳時代前期まで断続的に続くが、最も栄えたのは弥生時代中期である。吹上遺跡の土器組成を見ると、北陸系の小松式土器と信州系の栗林式土器が混在しており、両文化系統の人たちがともに一つのムラで暮らしていた。

弥生時代中期のムラは、前半期と後半期の2時期に大きく区分できる。吹上遺跡の特徴に、ムラの前半期と後半期で、小松式土器と栗林式土器の割合が逆転してムラの姿が変わること、すなわち、両土器文化の担い手たちの構成ががらりと変わってしまうことが挙げられる(図7)。

前半期は、小松式土器が8割程度、栗林式土器が2割以下で、小松文化の担い手たちの主導のもとにムラが運営される。玉作りが盛んであることから、小松文化の人たちの活発な活動の痕跡が認められる。ここで作られたたくさんの勾玉や管玉は、北陸の情報と一緒にともに暮らす栗林文化の人たちを介して信州に運ばれたのであろう。

ところが、後半期になると、小松式土器が3割程度、栗林式土器が7割以上となり、土器系統の比率が逆転する。そして、これと軌を一にするように、盛んであった玉作りが衰退してしまう。この時期は、新潟県内の本州側の大きな玉作り遺跡も一斉に衰退しており、代わって、管玉の原石が豊富な佐渡島での玉作りが盛んになることから、たくさんの原料が容易に入手できる佐渡島に玉作りの技術者が移住した結果、小松文化の担い手たちが減ってしまったのかもしれない。そして、吹上遺跡は、新たに栗林文化の担い手たちの活躍の場となり、ここを起点にして佐渡島から仕入れた玉や、北陸の情報や文物を信州へ運んだようだ。信州でたくさん発見された玉や、長野県中野市の柳沢遺跡から出土した銅鐸と銅剣を(図8)、吹上遺跡の栗林文化の担い手が信州に持ち込んだと考えるのは想像に難くないであろう。

4 新潟県に根を下ろした小松文化の行方

新潟県内に弥生(小松)文化が最初に伝えられ、交通の要衝に造られた大きな弥生のムラは、当初はムラの中で玉作りを盛んに行って、後には佐渡から管玉を仕入れて周辺地域との交易や交流を活発化させた。おそらく、北の新潟市(旧亀田町)西郷遺跡は東北南部(会津)や北関東への玄関口として、大武遺跡は海路と信濃川を介した陸路を通じて、日本海沿岸の東北地方や信州もしくは関東と交流や交易を行なったと思われる。そして、吹上遺跡は信州と活発に交流し、栗林文化の担い手を通じて関東方面へも、北陸の文化と文物を伝えていく。

このように、新潟県域は、北陸の弥生(小松)文化と文物を東日本に伝える中継点の役割を果たしていった。そのきっかけとなったのは、八日市地方遺跡での弥生文化の開花と繁栄であ

り、そこから北へとフロンティアを目指した人たちであった。

その道筋は、弥生(小松)文化伝来以前から続いていた地域間の交流が基礎となっている。だからこそ、在来の人たちは新しい文化を積極的に受け入れて新たな社会を築いていったのであろう。

北陸新幹線のルートや新駅が、弥生時代の拠点的な遺跡と重なる(図9)のも、代々受け継がれてきた交流をある程度反映しているからであろう。

【参考文献・図の出典】

1979『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県教育委員会

1992『長岡市史 資料編1 考古』長岡市

1996『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編』新潟県中郷村教育委員会

2000『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

2003『八日市地方遺跡Ⅰ』石川県小松市教育委員会

2003『県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』京ヶ瀬村教育委員会

2004『上越市史 通史編1』上越市

2006『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅤ 道端遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

2006『新潟県上越市吹上遺跡—主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書Ⅰ—』新潟県上越地域振興局 上越市教育委員会

2007『新潟県上越市吹上遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会

2009『開館15周年 平成21年度秋季企画展 山を越え川に沿う—信州弥生文化の確立—』長野県立歴史館

2010『開館15周年 平成21年度秋季企画展 山を越え川に沿う—信州弥生文化の確立—』長野県立歴史館

2012『大境—富山県考古学機関紙—第28号』富山県考古学会

2013『八日市地方遺跡Ⅱ—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財調査報告書—』石川県小松市教育委員会

2014『一般国道116号 和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 大武遺跡Ⅱ(古代～縄文時代編)』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

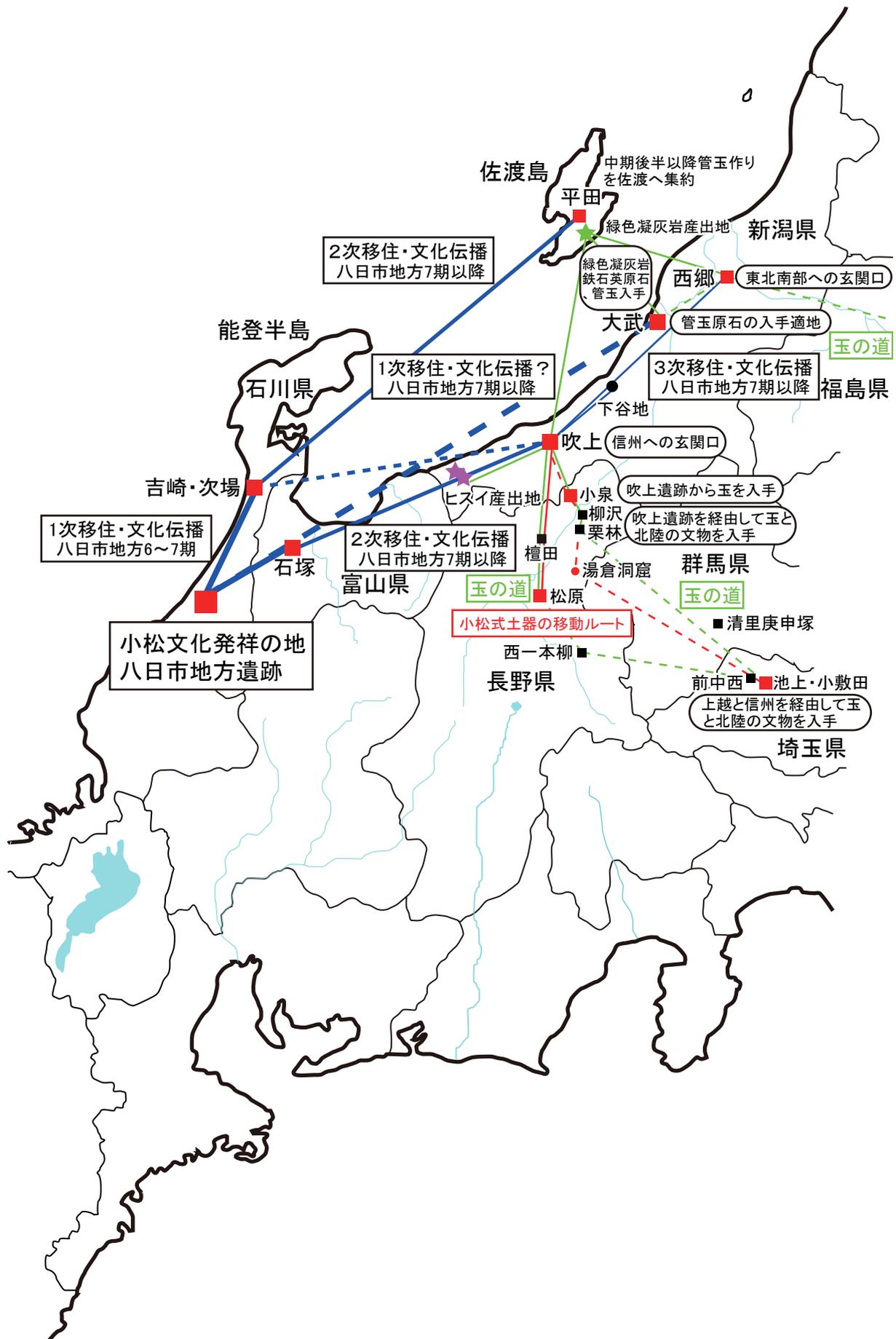
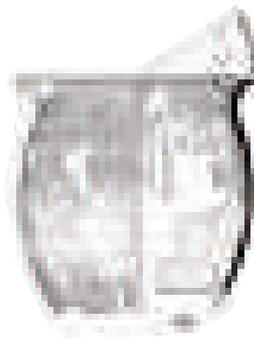
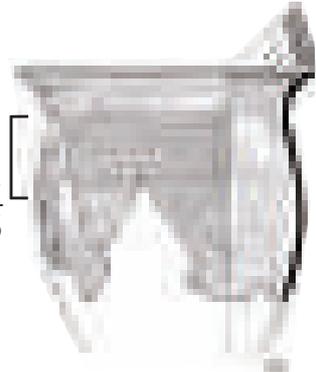


図1 北陸北東部および東日本への小松文化の波及と玉の流通ルートの想定

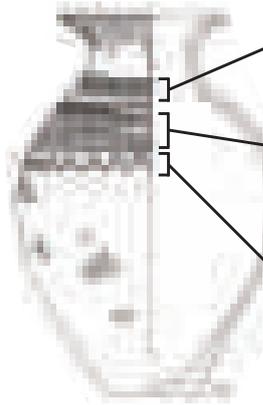


疑流水文
(直線文と
半円弧文を
組み合わせ
た流水状の
文様)



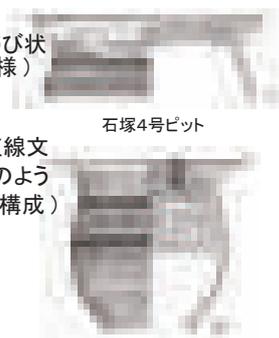
八日市地方遺跡7期の土器

胴部の装飾は、直線文と波状文か
簾状文を交互に施文する構成が主体。
疑流水文もよく用いられる。
斜行短線文は稀。



石塚4号ピット

ちよくせんもん
直線文
(数本の線が帯び状
となって巡る文様)
ふくたい
複帯
(2帯以上の直線文
を重ねて1帯のよう
に見せる文様構成)
はじょうもん
波状文
(波形の文様)



石塚7地点 A - 3



石塚4号ピット

石塚4号ピット

富山県の八日市地方7期並行の土器

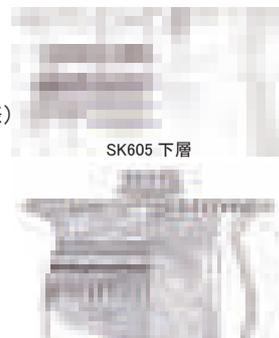
胴部の装飾は、複帯の直線文と波状文
に簾状文が加わる構成か、簾状文とほ
かの文様による組み合わせが主体。
口縁部内面は波状文と羽状刺突文が多い。
斜行短線文は稀。



SK602 下層

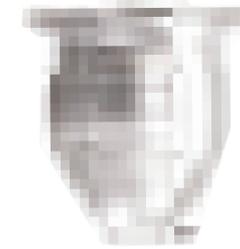
SK602 下層

しゃこうたんせんもん
斜行短線文
(短冊形の文様)
れんじょうもん
簾状文
すだれ
(簾の形に似た文様)



SK605 下層

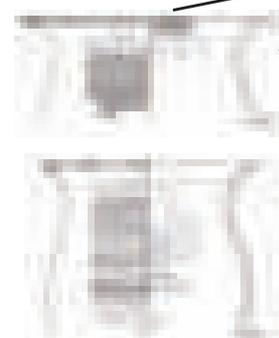
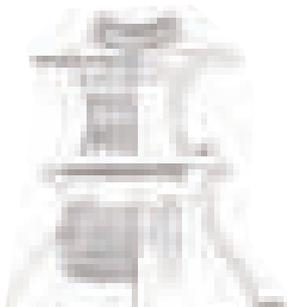
旧河道最下層



SK37

胴部の装飾は、複帯の直線文に波状文
と簾状文が加わる構成が主体。
口縁部内面と胴部下端に斜行短線文を施文。

新潟県の吹上遺跡の八日市地方7期並行の土器



うじょうしとつもん
羽状刺突文
(鳥の羽に似
た形の文様)



胴部の装飾は、直線と波状文か簾状文
を交互に施文するものが多い。疑流水文
も多用される。口縁部内面は羽状刺突文
が多く斜行短線文は少ない。
八日市地方遺跡の構成に類似。

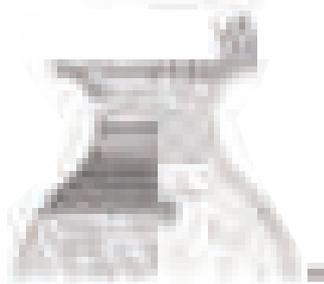
新潟県の大武遺跡の八日市地方7期並行の土器

図2 八日市地方遺跡の小松式土器と他地域の小松式土器との比較1

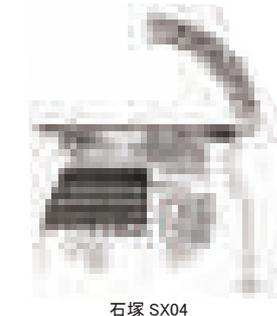


八日市地方遺跡8期の土器

胴部の装飾は、直線文と簾状文を交互に施文するものが多く、斜行短線文が胴部の装飾に定着。ただし、口縁部内面を除き斜行短線文の多段施文は少ない。



石塚 SI02



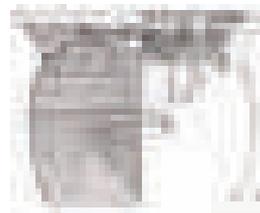
石塚 SX04



作道 SD07



作道 SK21



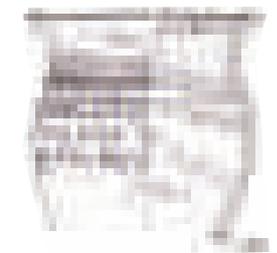
高島ASK21

富山県の八日市地方8期並行の土器

胴部の装飾は、直線文と簾状文または直線文と斜行短線文を交互に施文し、斜行短線文が多段に施文するものも多い。



SK295



SK59



SK159

胴部の装飾は、直線文と簾状文または直線文と斜行短線文を交互に施文し、斜行短線文が多段に施文するものも多い。

新潟県の吹上遺跡の八日市地方8期並行の土器



灰色粘土層



Ⅶ層

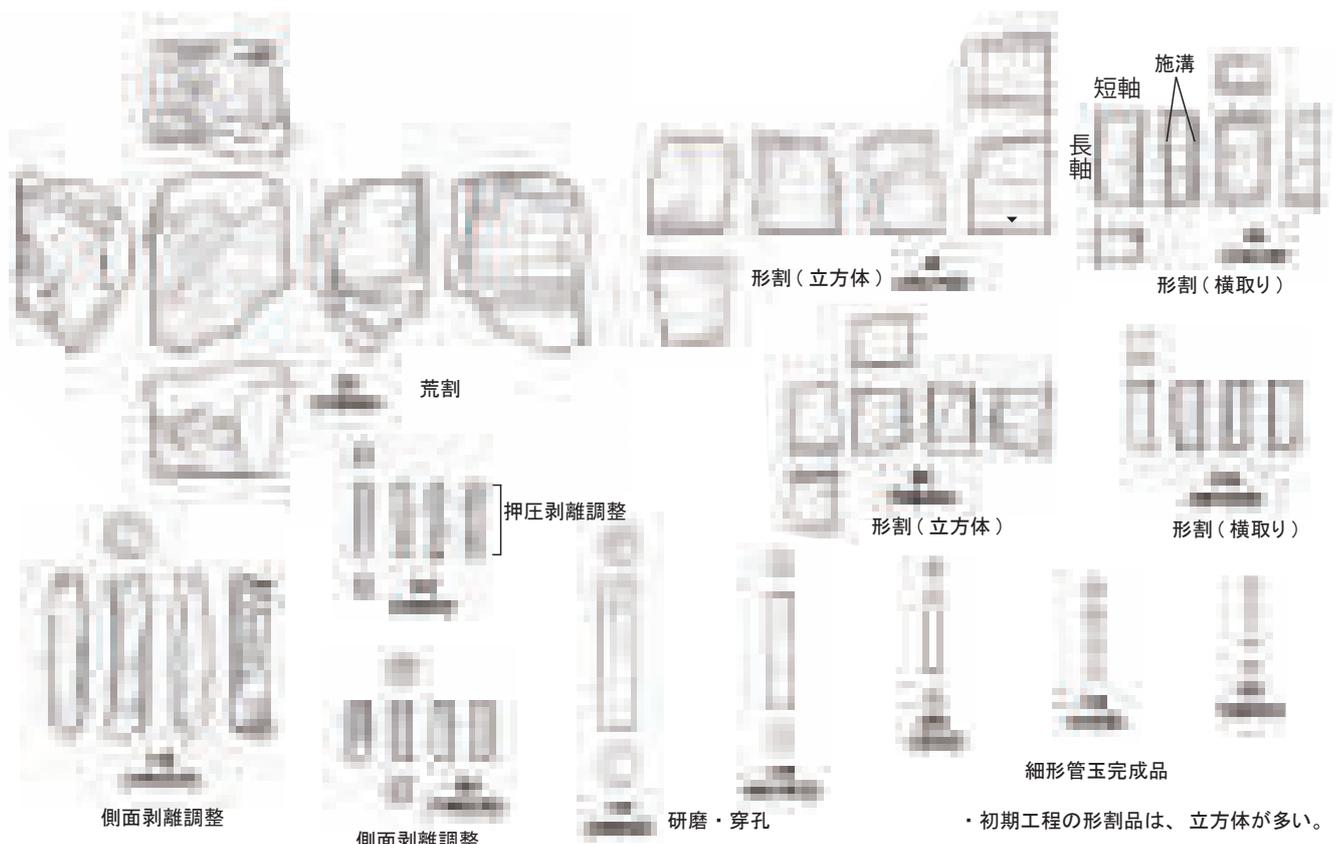


灰色粘土層

胴部の装飾は、直線文と簾状文を交互に施文するものが多い。胴部の装飾に斜行短線文が定着しているものの、施文率は低い。八日市地方遺跡の構成に類似。

新潟県の大武遺跡の八日市地方8期並行の土器

図3 八日市地方遺跡の小松式土器と他地域の小松式土器との比較2



八日市地方遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程

- ・初期工程の形割品は、立方体が多い。
- ・形割段階の施溝分割は、長軸に施溝して分割する（横取り）のが基本。
- ・完成品は、細形管玉が3サイズあり、長さ10mmくらいのもが多い。



新潟県大武遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程

- ・形割品は、板状または直方で立方体はわずか。
- ・形割段階の施溝分割は、長軸に施溝して分割する（横取り）ものが主体。
- ・太形管玉が2、細形管玉が3サイズある。長さ10mmくらいのもが多い。



新潟県吹上遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程

図4 北陸各地の緑色凝灰岩製管玉の作り方

縄文時代晩期

弥生時代中期前半

弥生時代中期中頃～後半

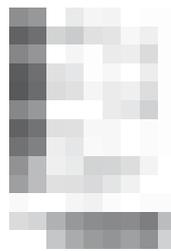
竪穴建物



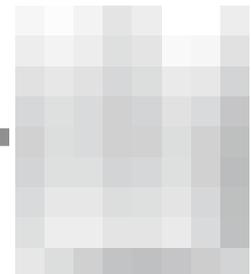
継承



周溝付建物



周溝の形を継承

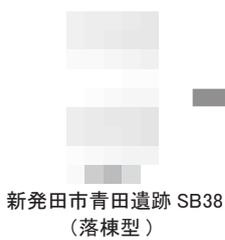


平地建物

北陸から伝来



掘立柱建物（亀甲形）



継承



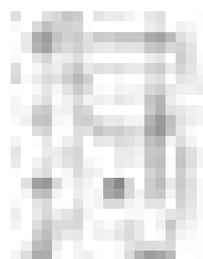
柱間と柱穴の
大きさを継承



掘立柱建物

形を継承

柱間と柱穴の
大きさを採用



北陸から伝来

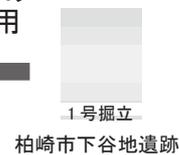
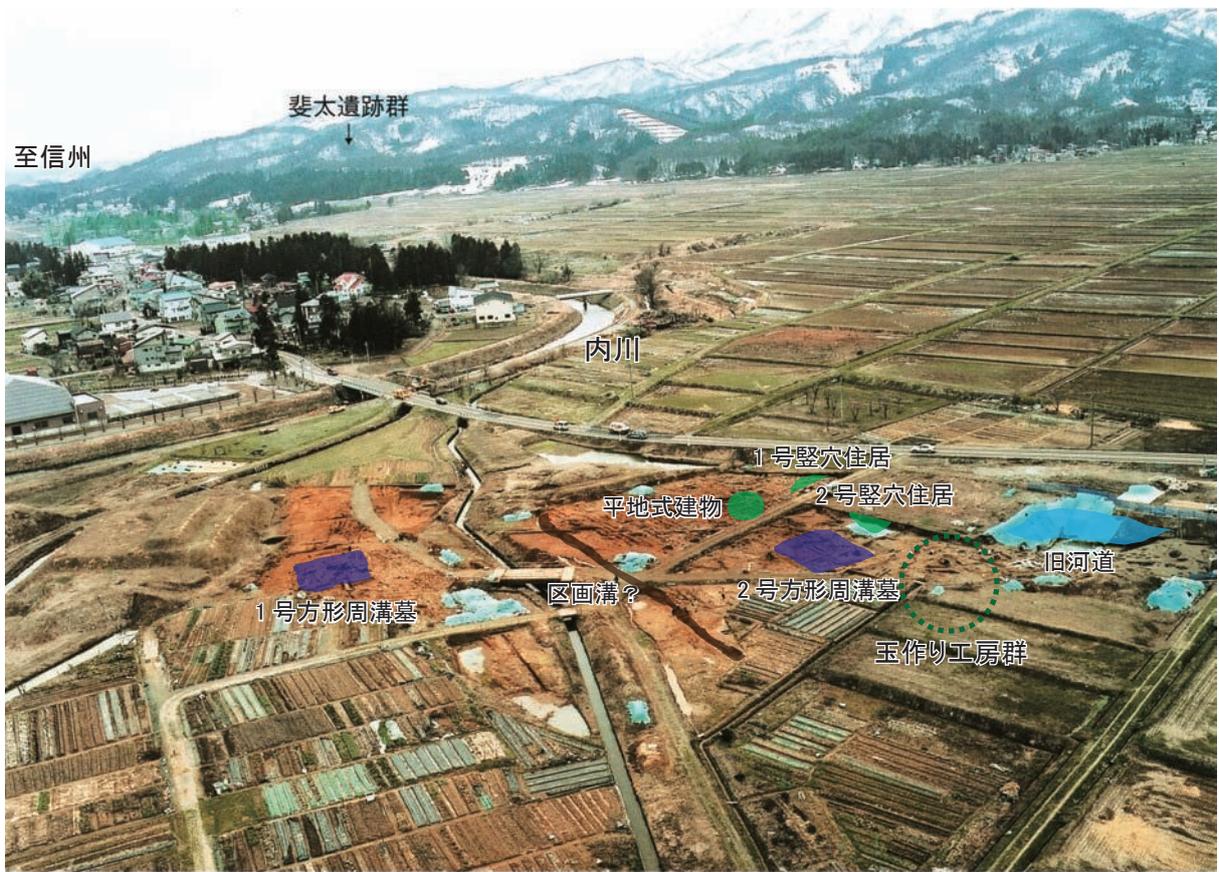


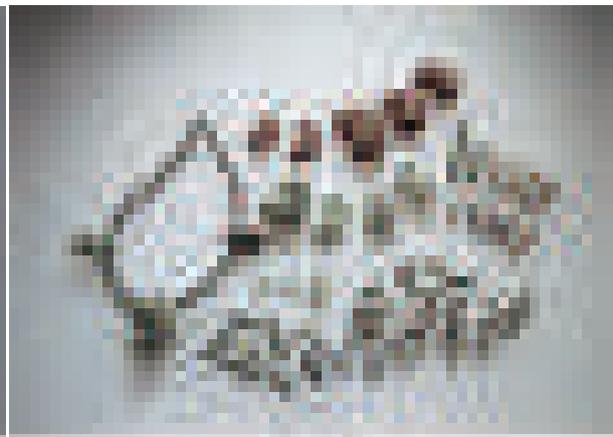
図5 新潟県における縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての建物の変遷



吹上遺跡遠景



管玉作りの材料と道具



いろいろな色や形の玉

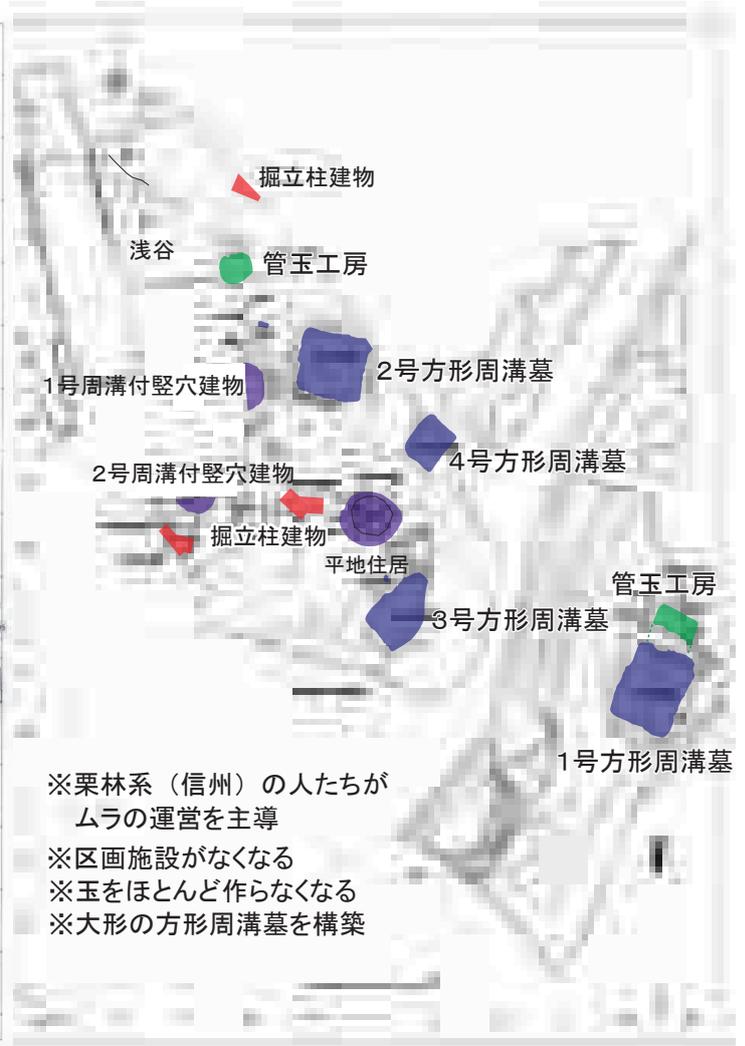
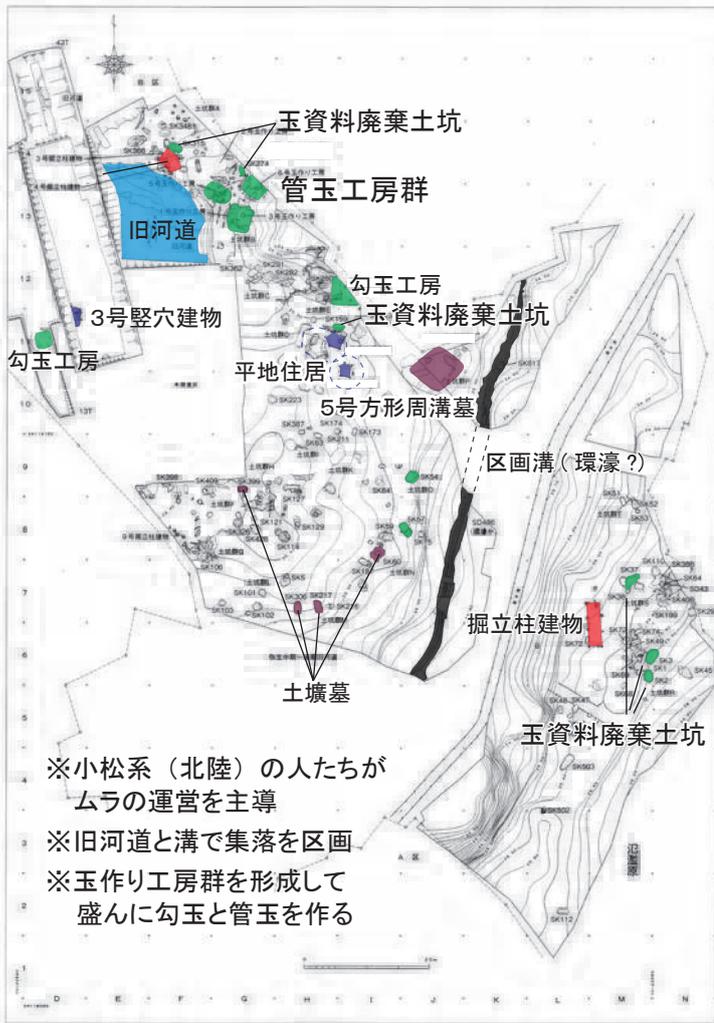


管玉に穴を開けるための石の錐



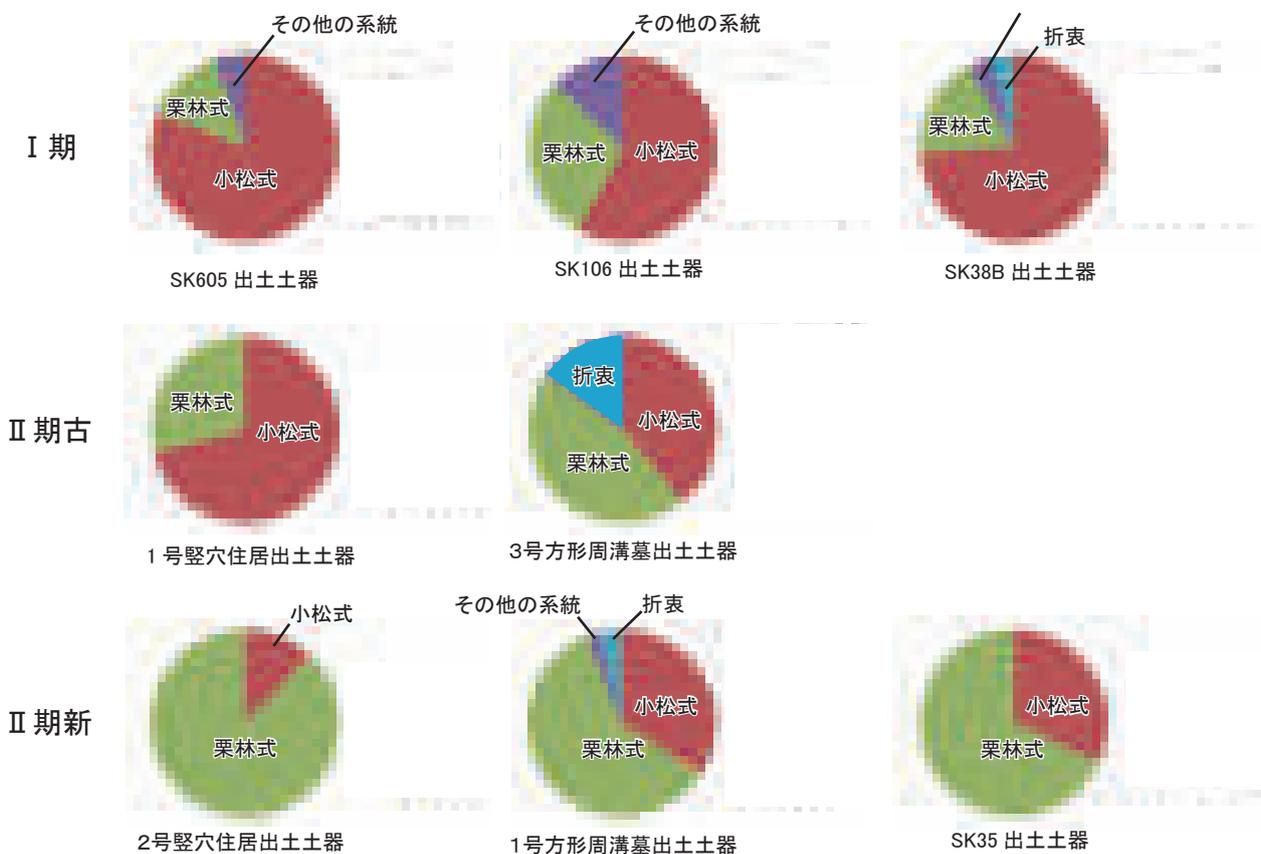
特殊な遺物

図6 新潟県上越市吹上遺跡とおもな出土遺物



吹上遺跡 I 期の集落

吹上遺跡 II 期の集落



吹上遺跡における土器系統の比率の変化

図7 吹上遺跡におけるムラの変遷と土器系統の比率の変化



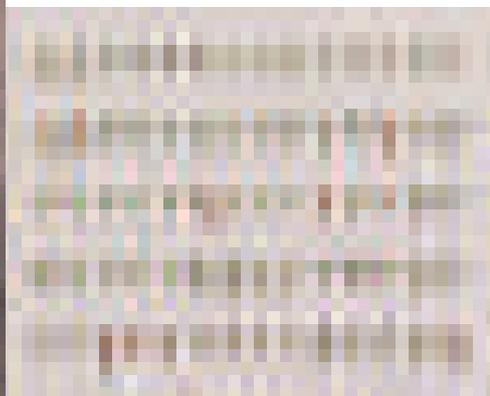
北陸と信州の青銅製祭器と模倣品の分布（上越市史通史編1に加筆）



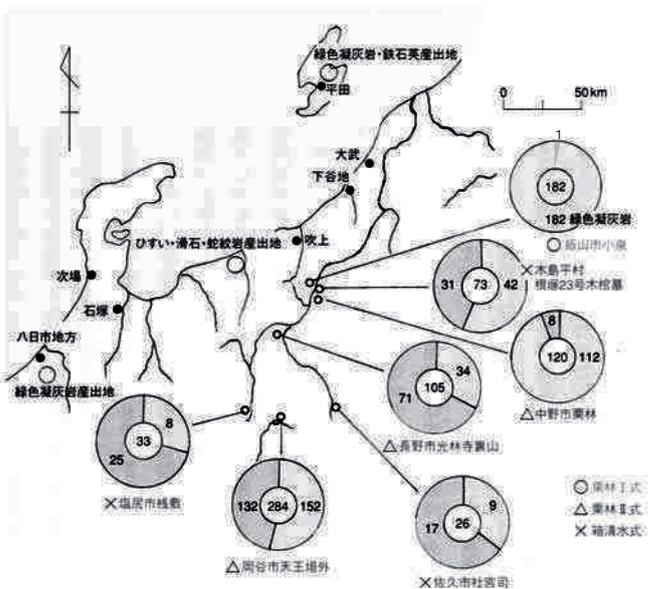
埋納土坑の銅戈



長野県中野市柳沢遺跡の青銅器埋納土坑



柳沢遺跡1号礫床木棺墓に副葬されていた管玉



※数字は個体数、赤 鉄石製、青 緑色凝灰岩製 ●は生産地、○は消費遺跡

長野県で弥生時代の玉を出土したおもな遺跡（上越市史通史編1に加筆）



光林寺裏山遺跡出土品(長野県長野市)



勾玉・管玉・土器・小玉
(長野県岡谷市天王垣外遺跡出土品)

図8 長野県に運ばれた青銅器と玉

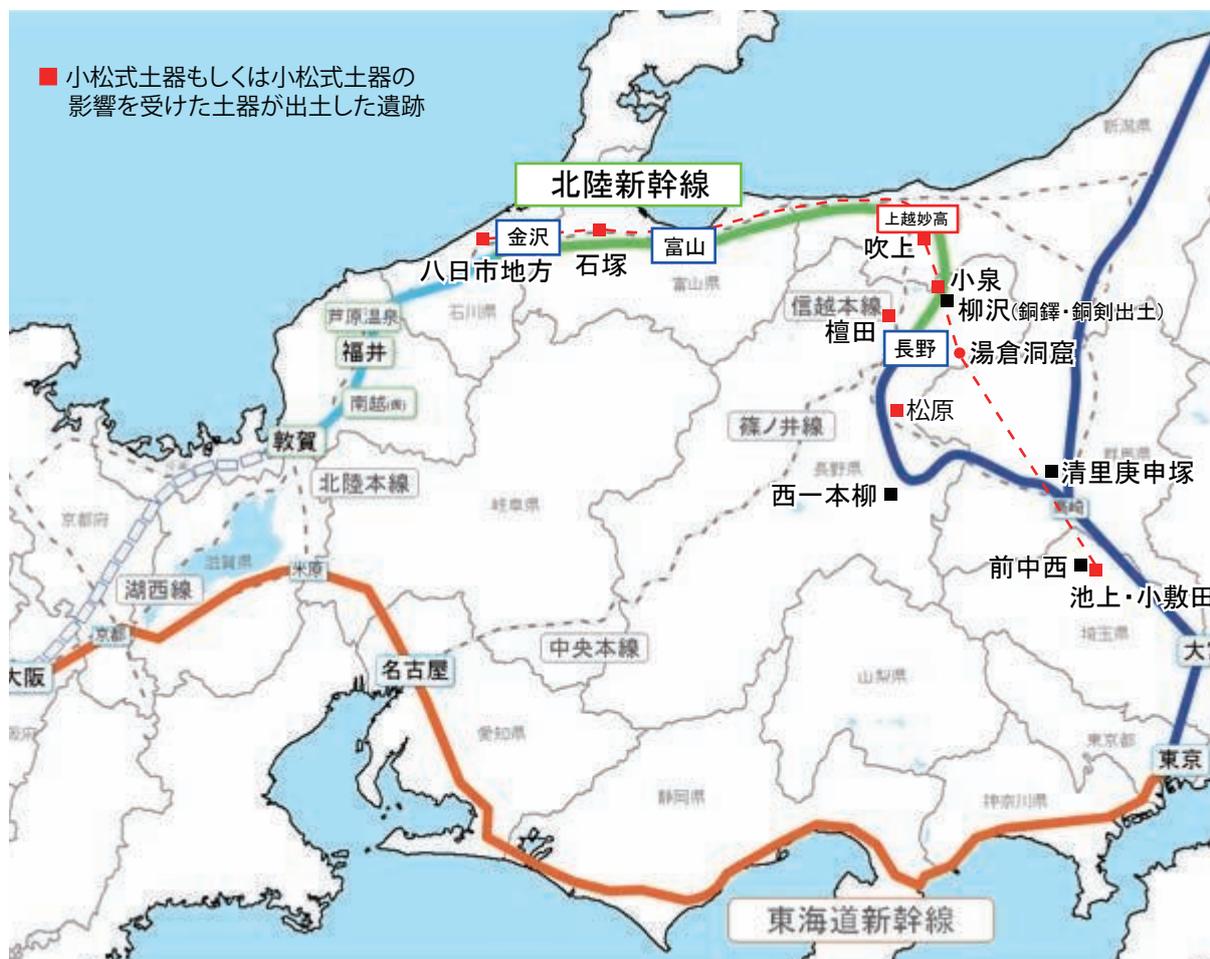


図9 北陸新幹線沿線に位置する弥生時代中期の代表的な集落遺跡と小松文化の波及ルート

青銅器の足跡

—信州に至る北陸ルート—

愛媛大学ミュージアム
吉田 広

はじめに

北部九州の銅矛を中心に西日本西部に広がる武器形青銅器、対して近畿を中心とする銅鐸。つまり、日本列島の西に偏った青銅器分布において、北陸地域は北東周縁部にあたり、弥生時代青銅器文化を論じる際に、決して重点的には扱われてこなかった。ところが、小松市八日市地方遺跡や上越市吹上遺跡での青銅器模倣品の出土により、青銅器そのものの稀少性は変わらないものの、北陸地域からこそ青銅器文化を重層的に論じられる状況になった。さらに、これらを超えて中野市柳沢遺跡による最東青銅器文化の具体化は、ルートと目される北陸における青銅器文化の受容・展開について、西日本的な弥生文化・青銅器文化の東日本への拡大と変容といった、一層大きな命題からの論及を求めている。なお資料は多くなく、しかも模倣品に偏った状況ではあるが、信州へと至る東日本青銅器文化への道程に果たした、北陸の青銅器文化前半期の様相を具体的に論じよう。

1 北陸の青銅器・青銅器模倣品概観

北陸地域の青銅器として武器形青銅器と銅鐸、それらの模倣品を表1にまとめた(注1)。一目して、福井地域の若狭・越前地域と、それ以北(以東)で大きな較差があることがわかる。何より、加賀地域以北では青銅器そのものが圧倒的に少ない。

① 若狭・越前の青銅器・青銅器模倣品

若狭・越前地域では、武器形青銅器こそないものの、銅鐸がかなりの数に及び、しかも時間幅がある。

坂井市(旧春江町)井向^{いのむかい}で、菱環鈕^{りょうかんちゅう}2式(2号)と外縁付鈕^{がいえんつきちゅう}1式流水文(1号)が伴出し、外縁付鈕2式流水文(明治大学1号)もそれに加わった可能性が指摘され、銅鐸最古式セットの好例となっている。さらに、坂井市(旧三国町)米ヶ脇^{こめがわき}も外縁付鈕1式中山型と、古式銅鐸の存在が大きな特徴である。銅鐸成立に際して、山陰・近畿・東海といった諸地域が広域連動した際、北陸も越前を中心にその一翼を担った可能性を指摘したところである(吉田2012)。何より、中期中葉に遡る坂井市(旧三国町)下屋敷遺跡銅鐸石製鋳型の存在は、早い段階での銅鐸生産をも担う、銅鐸分布の主要構成域であったことを示している。

その後、扁平鈕式^{へんぺいちゅう}古段階小型銅鐸の欠落は、その段階から本格的な流入が始まる吉備地域や伯耆地域と対照的だが(吉田2013)、新段階には若狭地域にまとまった銅鐸流入が見られる。若狭町(旧上中町)野木の6区袈裟文、同堤向山の6区袈裟文1a式、そして美浜町南伊夜山の6区袈裟文2式横帯分割型^{とっせんちゅう}B1類である。突線鈕式^{とっせんちゅう}段階になっても、鯖江市新町の突線鈕2式6区袈裟文横帯分割型D2類、三方町向笠の突線鈕2式近畿式A系列と、その前半には確実に青銅祭器としての受容

表1 北陸地域の青銅器・青銅器模倣品

出土地	器種・型式	出土遺構等(時期)	文献
若狭			
小浜市(旧高浜町)小和田 小和田遺跡	銅戈形石製品・無樋無内 銅剣形石製品・Ⅲ式	埋納土坑	森川・大森(1971)
若狭町(旧上中町)野木	銅鐸・扁平鈕式新段階 6区袈裟文		喜谷他編(1993)
若狭町(旧上中町)堤向山	銅鐸・扁平鈕式新段階 6区袈裟文1a式		上田(1920)
若狭町(旧上中町)大鳥羽 大鳥羽遺跡	銅剣形石製品・Ⅱ式	採集	入江編(1984)
三方町向笠山浦	銅鐸・突線鈕2式近畿式A系列		広嶋(1982)
美浜町郷市南伊夜山	銅鐸・扁平鈕式新段階 6区袈裟文2式		畠中編(2005)
若狭国	銅鐸・?	『続日本後紀』	淡厓(1887)
越前			
敦賀市吉河 吉河遺跡	銅剣形石製品・Ⅱ式	溝16(後期)	月輪編(2009)
越前市(旧武生市)瓜生町 瓜生助遺跡	小銅鐸	6号住居内土坑SK-12(後期)	齋藤(2008)
鯖江市新町	銅鐸・突線鈕2式6区袈裟文		上田(1920)
福井市半田・二上町 糞置遺跡	銅戈形木製品・無樋 銅戈形木製品・無樋(穿無)	川①区中層(弥生中期～古墳前期) 川⑥区	鈴木編(2006) 鈴木編(2006)
福井市泉田町 林・藤島遺跡	銅鐸形土製品	包含層(弥生後期後半～古墳前期前半)	富山編(2009)
勝山市昭和町 三谷遺跡	銅鐸形土製品	土坑(弥生後期後半～古墳前期)	
大野市中丁 中丁遺跡	銅鐸形土器(後期前半)2点	I区1号土坑(後期前半)	青木編(2003)
坂井市(旧春江町)井向島田 1号	銅鐸・外縁付鈕1式2・3区流水文		矢野(2003)
坂井市(旧春江町)井向島田 2号	銅鐸・菱環鈕2式4区袈裟文		春成(1984)
伝 坂井市(旧春江町)井向島田	銅鐸・外縁付鈕2式横型流水文		三木(1974)
坂井市(旧丸岡町)高柳 高柳・下安田遺跡	銅鐸・突線鈕3Ⅱb～5Ⅱ式近畿式 銅鐸・突線鈕式?近畿式? 銅鐸・突線鈕式?近畿式?	SI001(後期後半後葉) SI001(後期後半後葉) SB006(後期後半後葉)柱穴付近	赤澤編(2010) 赤澤編(2010) 赤澤編(2010)
坂井市(旧三国町)米ヶ脇	銅鐸・外縁付鈕1式4区袈裟文		印牧(1951)
坂井市(旧三国町)加戸 下屋敷遺跡	銅鐸石製鑄型	SD-001(中期中葉)	富山編(1987)
加賀			
小松市 八日市地方遺跡 市調査	銅戈形木製品・扁平無樋 銅剣形木製品・扁平 銅鐸形土製品 銅鐸形土製品 銅鐸形土製品	E-5Gr中層(中期中葉～後葉) C-9Gr河川跡8-1層(中期中葉後半) 土坑 埋積浅谷断割(中期後葉以降) 溝(中期後葉以降)	福海他編(2003) 福海他編(2003) 福海他編(2003) 福海他編(2003) 福海他編(2003)
小松市 八日市地方遺跡 1997年度県調査	銅戈形石製品?	包含層	浜崎編(2004)
小松市 八日市地方遺跡 1999年度県調査	銅鐸形土製品	河道	浜崎編(2004)
金沢市藤江 藤江B遺跡2次調査	小銅鐸	大溝上層(古代)	松山・松浦(2002)
金沢市藤江 藤江B遺跡3次調査	銅剣・中細形BC類	河道跡内包含層(～弥生終末)	滝川編(2001)
伝 河北郡河北潟畔	銅鐸・扁平鈕式新段階 6区袈裟文1b式	近畿以西からの購入品か	吉岡(1969)
能登			
羽咋市吉崎町・次場町 吉崎・次場遺跡	銅鐸形土製品 銅剣形石製品・Ⅱ式	I-4号溝上部(中期中葉～後葉) V-12号土坑脇	福島編(1987) 福島編(1987)
越中			
小矢部市埴生 埴生南遺跡	銅鐸形土製品	(中期)	高木場(2005)
越後			
上越市大字稻荷字吹上 吹上遺跡	銅剣形石製品・Ⅱ式 銅戈形土製品・扁平有樋 銅戈形石製品? 銅鐸形土製品 銅鐸形石製品	1号堅穴建物周溝SD381上層(中期末葉) 遺構検出面(中期中葉後半?) 2号方形周溝墓SD31(中期末葉) SK63下層(中期中葉後半) 1号方形周溝墓SD30-1(中期末葉)	笹沢編(2006) 笹沢編(2006) 笹沢編(2006) 笹沢編(2006) 笹沢編(2006)
上越市大潟区大字潟町巻	銅戈形石製品・扁平有樋		後藤(1930)

青木隆佳編2003『中丁遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第64集
 赤澤徳明編2010『高柳・下安田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第112集
 入江文敏編1984『大鳥羽遺跡Ⅰ』、上中町教育委員会
 印牧邦雄1951「坂井郡雄島村米ヶ脇出土の新銅鐸について」『福井県文化財調査報告』1、福井県教育委員会
 上田三平1920「越前及び若狭における古代遺跡(銅鐸発見の遺跡)」『福井県史蹟名勝地調査報告』第1冊、福井県
 喜谷美宣・宮本郁雄・森田稔編1993『特別展 銅鐸の世界一地の神への「いのり」一展』、神戸市立博物館
 後藤守一1930「上古時代に於ける上越地方(一)」『考古学雑誌』20-9
 齋藤秀一2008「福井県越前市(旧武生市)瓜生助遺跡出土の小銅鐸について」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』
 笹沢正史編2006『吹上遺跡』、上越市教育委員会
 鈴木篤英編2006『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第90集
 高木場万里2005「埴生南遺跡」『平成16年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第56冊
 滝川重徳編2001『金沢市藤江B遺跡Ⅱ』、石川県埋蔵文化財センター
 淡厓汪天1887「古史中銅鐸の事」『東京人類学雑誌』2-9
 月輪泰編2009『古河遺跡発掘調査概報、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 富山正明編1987『下屋敷遺跡・堀江十楽遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第14集
 富山正明編2009『林・藤島遺跡泉田地区』福井県埋蔵文化財調査報告第106集
 畠中清隆編2005『南伊夜山銅鐸出土地』福井県埋蔵文化財調査報告第84集
 浜崎悟司編2004『八日市地方遺跡』、石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
 春成秀爾1984「最古の銅鐸」『考古学雑誌』70-1
 広嶋一良1982「福井県三方郡三方町向笠出土の銅鐸について」『考古学雑誌』68-1
 福島正実編1987『吉崎・次場遺跡』第1分冊(資料編(1))、石川県立埋蔵文化財センター
 福海貴子・橋本正博・宮田明編2003『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会
 松山和彦・松浦郁乃2002『金沢市藤江B遺跡Ⅳ』、石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
 三木文雄1974『流水文銅鐸の研究』、吉川弘文館
 森川昌和・大森宏1971「若狭高浜町出土の石剣・石戈」『若狭考古学研究会研究報告』2
 矢野健一2003「井向1号銅鐸の保存処理とこれに伴う調査」『辰馬考古資料館考古学研紀要』5
 吉岡康暢1969「伝石川県河北潟畔出土銅鐸について」『石川考古学研究会会誌』12

が続く。しかし、坂井市（旧丸岡町）高柳・下安田遺跡での銅鐸破片（突線鈕 3 II b～5 II 式近畿式 1 点、近畿式？ 2 点）出土によれば、東海・近畿地方で広く見られる、装身具あるいは素材としての銅鐸片流通という、新たな銅鐸ライフサイクル（鈴木 2014）が、北陸地域にも広がっていたことになる。これに対応するように、小松市一針 B 遺跡等で具体的様相が明らかになるように（荒木編 2002）、主として小型青銅器生産が北陸においても始まり、銅鏡の流入も認められるようになる。なお、銅鐸模倣の可能性もある、越前市（旧武生市）瓜生助遺跡小銅鐸、福井市林・藤島遺跡銅鐸形土製品、勝山市三谷遺跡銅鐸形土製品、大野市中丁遺跡銅鐸模倣土器は、いずれも後期以降。後述する加賀以北における銅鐸模倣の中期遡及とは対照的である。

一方、武器形青銅器の確実な出土例はこれまで皆無だが、若狭湾岸地域において、銅剣形石製品や銅戈形石製品が出土する。若狭町（旧上中町）大鳥羽の銅剣形石製品、敦賀市吉河遺跡銅剣形石製品、そして小浜市（旧高浜町）小和田では、銅剣形石製品と銅戈形石製品が丘陵上に埋納され、青銅祭器と変わらない扱いまで見られる。地域によっては銅鐸と武器形石器がセット関係をなすような場合があり、丹波から但馬・丹後の近畿北部地域に共通し、武器形青銅器模倣品あるいは武器形石器が青銅祭器と同様の社会的役割を担っていた可能性も考えられる（種定 1990、松葉編 2004）。なお、越前嶺北地域では福井市糞置遺跡の銅戈形木製品のみと、様相が変わる。

② 加賀以北の青銅器・青銅器模倣品

以上の南部に対して、加賀地域以北となると状況が一変する。何より青銅器が少ない。伝河北潟畔出土とされる扁平鈕式新段階 6 区袈裟文 1b 式銅鐸は、近畿以西からの購入品とも想定されるため除くと、金沢市藤江 B 遺跡出土の中細形 BC 類銅剣のみである。

中細形 BC 類銅剣は、推定剣身長 40～45cm と中細形 B 類にほぼ一致するものの細身・薄手で、^{くりかた} 刃位置が中細形 B 類より高位にあってプロポーシオンが異なり、例外なく^{うが} 穿たれた^{まちぶそうこう} 関部双孔位置も高い（図 1）。広島県福田木ノ宗山（5）の復元により全形を推し量れ、その他に広島県絵下谷（2）、鳥取県西大路土居（6）、島根県竹田（3）があり、ここに藤江 B 銅剣（4）が加わる。形態的・法量的にも中細形 B 類（1）を祖形とし、平形に至る中細形 B' 類、東部瀬戸内系平形（7）へと続く中細形 B'' 類、そして中細形 C 類（8）と、中細形 B 類を起点に銅剣が多系列化していく際の一形態である（吉田 2005）。弥生時代中期中葉を前後に、中細形諸器種から、近畿型銅戈 I 式、中細形 A' 類銅剣、中細形 B' 類銅剣、中細形 B'' 類銅剣、中細形 BC 類銅剣といった派生的な型式が登場し、それらは基本的に北部九州圏外の出土に限られている。同様の生産と流通を見せる福田型銅鐸も加えて、自らも受容する通有の青銅器群（第 I 種）に対して、製作しながら自らは受容せず専ら移出用とした青銅器群として第 II 種と総称した（吉田 2011）。北部九州と近畿を中心にした東西の青銅器文化の相互交流（北島 2003）において創出された中細形 BC 類銅剣が、北部九州から北陸地域に到達している意義は小さくなく、その延長にこそ柳沢の銅戈がある。

少ない青銅器の一方で模倣品は多い。八日市地方遺跡にまとまった出土がまずあり、しかも中期の資料である。藤江 B 遺跡には小銅鐸もあるが、これは弥生後期の可能性が高い。能登地域の羽咋市吉崎・次場遺跡でも、中期に遡る銅剣と銅鐸の模倣品が存在する。越中地域は、これまで青銅器関連資料を欠いていたが、小矢部市埴生南遺跡で銅鐸形土製品が出土し、概要報告ながら中期とさ

1. 中細形B y (兵庫・古津路3号)
- 2～6. 中細形BC (2; 広島・絵下谷, 3; 島根・竹田, 4; 石川・藤江B,
5; 広島・福田木ノ宗山, 6; 鳥取・西大路土居)
7. 東部瀬戸内系平形 (徳島・東寺2号)
8. 中細形C y (島根・荒神谷 C55号)

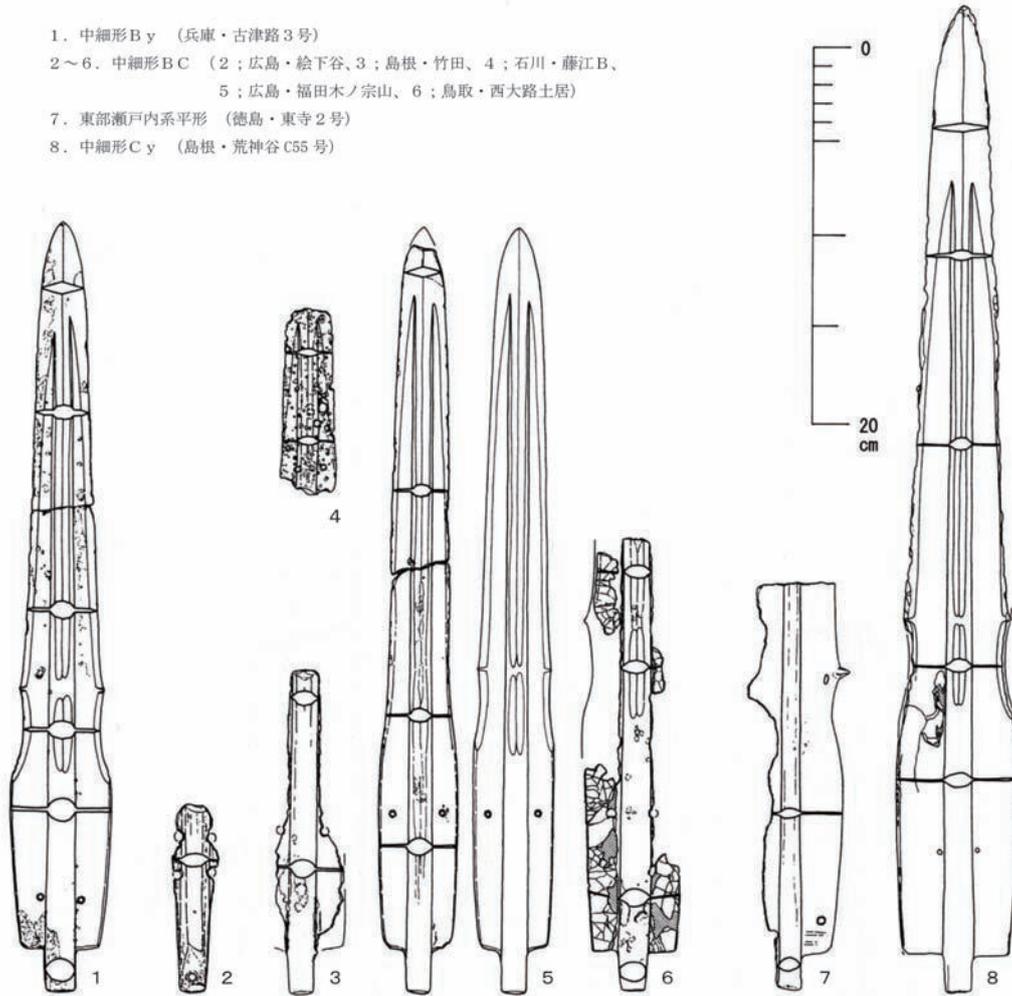


図1 藤江B遺跡出土中細形BC類銅剣と類例 (吉田2005より)

れている。そして、上越地域の吹上遺跡でまとまった中期の青銅器模倣品が存在し、上越市巻で中部高地的な銅戈模倣品の出土が古くから知られていた。このように、青銅器がほとんど見られない中で、中期に遡る青銅器模倣品が八日市地方遺跡、吉崎・次場遺跡、埴生南遺跡、そして吹上遺跡と広範に及ぶ。青銅器不在と青銅器模倣品存在という現況に対し、近畿北部のような模倣品自体の祭器としての地位確立とみるか、それとも青銅器がまだ見いだせていないのか、あるいは異なる新たな解釈が必要なのか。青銅器模倣品がとくに集中する八日市地方遺跡と吹上遺跡の詳細を整理し、その上で中部高地の栗林式期に盛行した青銅器文化を視野に入れ、北陸地域の青銅器文化の位置を論じる必要がある。

2 八日市地方の青銅器模倣品

八日市地方遺跡では各種の青銅器模倣品が際立つ。中でも、豊富な出土量を誇る木製品には、青銅器模倣かどうかわからない資料を含め、多数の武器形品がある(図2)。

このうち、明らかな青銅器模倣品は銅戈形(58)と銅剣形(49)である。前者は扁平な板状ながら、

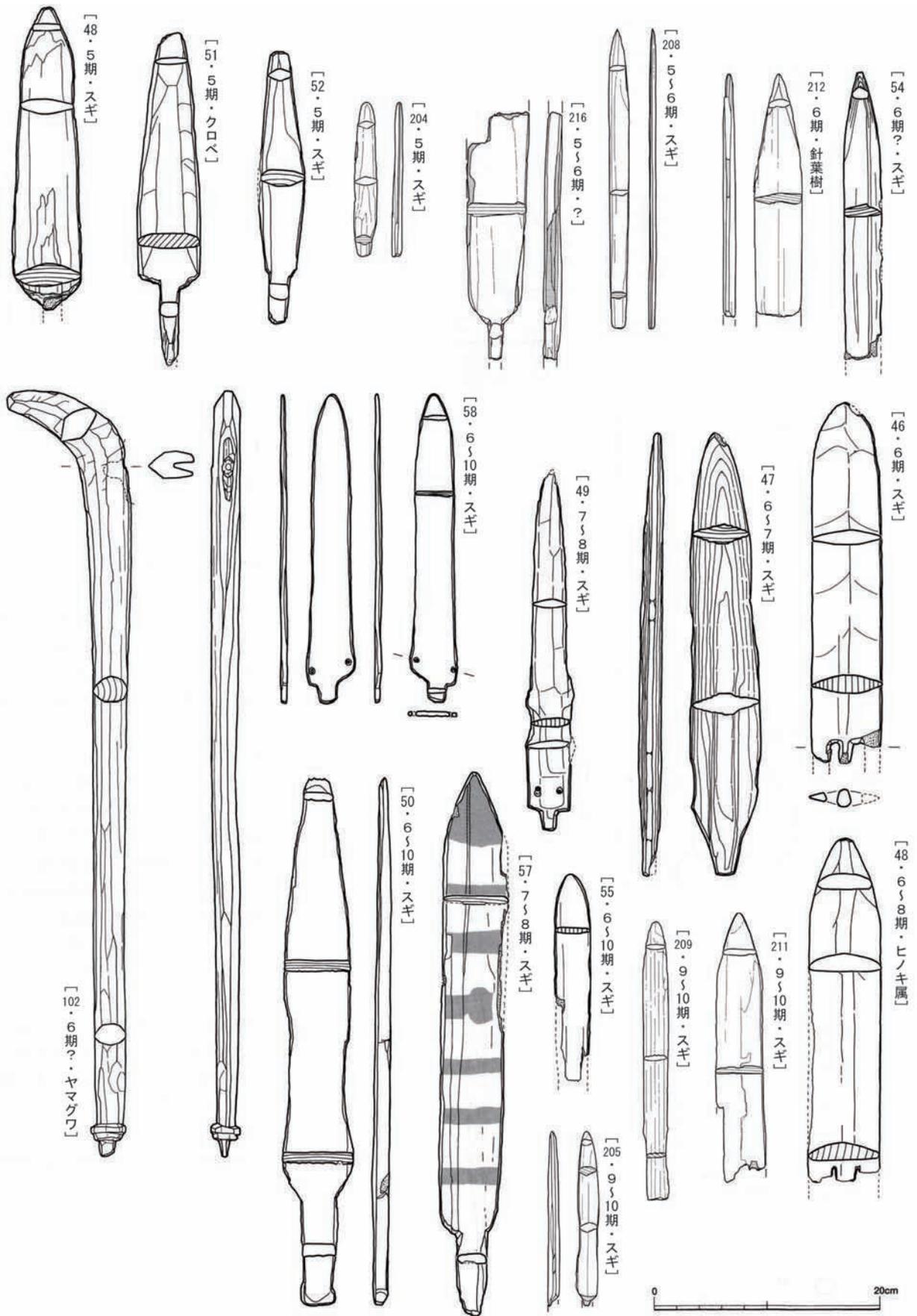
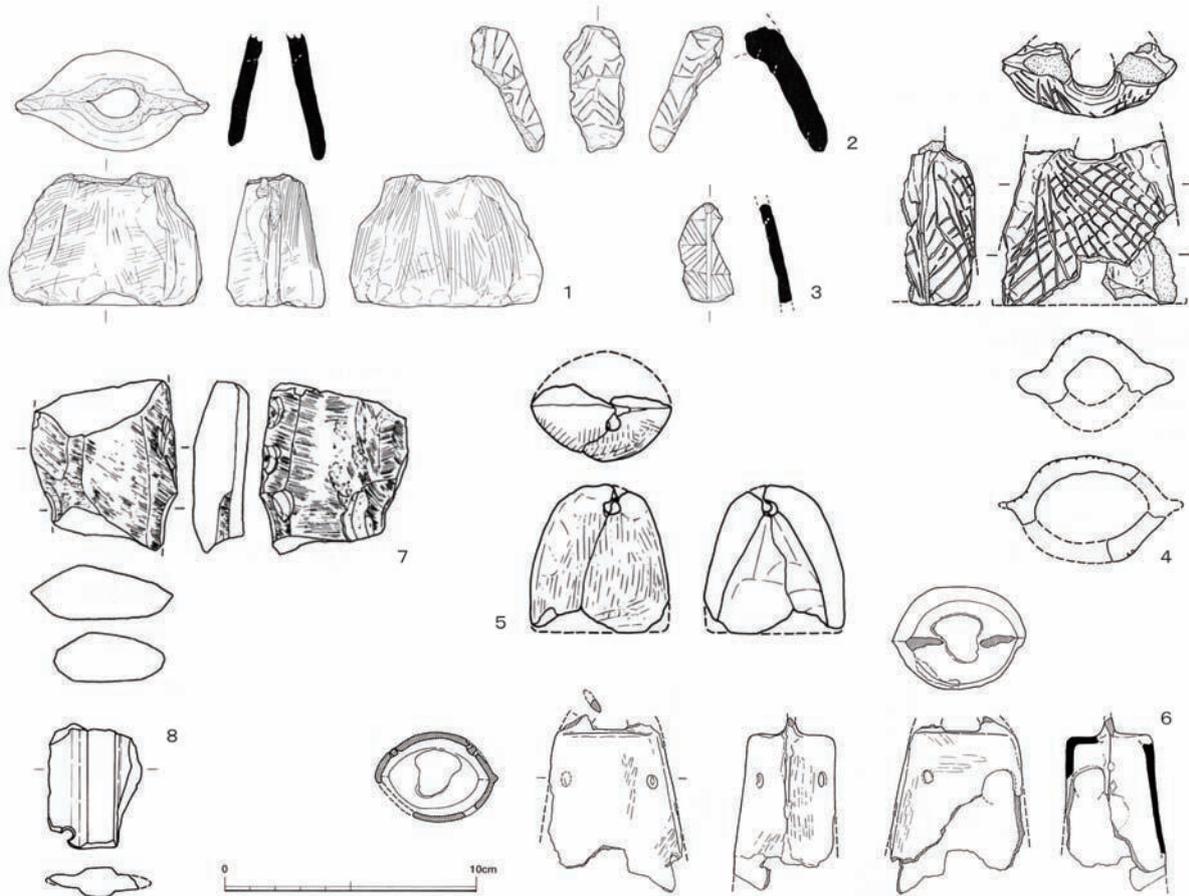


図2 八日市地方遺跡出土武器形木製品 (福海他編 2003・下濱編 2013 より、番号は報告のまま)

基部が身に斜交して裾広がり銅戈胡をよく写し、銅戈穿^こに対応する双孔もある。加えて、同出の戈柄（102）は着柄孔の大きさから、石製あるいは青銅製の戈よりも、扁平で小さな内の木製品がふさわしい。後者の銅剣形も、扁平板状であるが、突起・刳方^{くりかた}・元部といった銅剣外形をよく写し、銅剣模倣に通有の関部双孔^{まぢぶそうこう}も具える。これら確実な青銅器模倣品の時期は、八日市地方6期、すなわち中期中葉以降となるようである。

一方、明らかな青銅器模倣以外の武器形木製品の中に、八日市地方5期に遡る例が確実に存在する。身は板状のものと断面菱形のものがあり、先端を三角形状に尖らせ、基部は刃部両側から^{えぐ}中央部を^{なかご}茎状に残すものである（48・51・52等）。こういった特徴の起源を銅剣形に求めることも可能ではあるが、刳方や関部双孔といった決定的特徴を欠き断定できない。銅剣模倣品の出現以降にも同形態は続き、中には関部双孔の一端を残すとも見えるものがある（46・48）。しかし、方形を志向する双孔、しかもそこでの破断は、同様の形状をもつ紐結合法による組合せ鋤の可能性も考えられる。こういった系譜が、銅剣模倣品以前の諸例に遡る可能性も考慮しなければならない。よって、確実な青銅器模倣の初現は中期中葉に収めておくべきだろう。



1；八日市地方・市報25、2；八日市地方・市報26、3；八日市地方・市報27、4；八日市地方・県報1999年度、5；吉崎・次場148、6；藤江B2次、7；八日市地方・県報1997年度、8；吉崎・次場369

図3 八日市地方遺跡および加賀・能登地域出土青銅器模倣品（表1各文献より）

他方、八日市地方6期に確実な青銅器模倣が認められて以降、不完全な一部のみの青銅器模倣は認めてよいのかもしれない。47や205は刃方を思わせる湾入をもち、50も長い刃方様の湾入をもち基部が銅劍茎^{なかご}というより長柄状を呈する。彩色をもった57も同様である。

武器形木製品の他にも青銅器模倣品がある(図3)。まず7(県報1997年度)は、刃部両側の挟りが左右でずれて銅戈基部の可能性のある石製品。ただし、本来あるべき銅戈^{せん}の穿に対応した双孔がなく、銅戈形と確定しきれない。対して、明らかな銅鐸模倣として4点の銅鐸形土製品がある。1(市報25)は、2枚の粘土を貼り合わせて中空の截頭円錐形鐸身部と左右の鱗状部^{ひれ}を作る。鈕を欠き、舞が塞がっていたかどうかは不明。鐸身に文様はもたない。2(市報26)は、鐸身片側縁部片で鱗状部はなく、身型持孔が一部残り、鈕を欠損する。両面に山形あるいは縦羽状の陰刻が施され、その上下区画線を水平に採るなら、提示図よりもう少し筒状を呈するらしい。3(市報27)も鐸身片側縁部片で鱗状部はもたない。1・2より薄く作りも丁寧で、3段以上の横羽状文も鋭い。4(県報1999年度E59)は1と同じく中空の截頭円錐形鐸身部から鱗を左右に捻り出し、舞部は吹き抜け。身に型持孔はないが、鐸身ほぼ全面に鋭く深い陰刻の斜格子文をもつ。この施文後に鈕を取り付けたとみられるが欠失する。なお、2～4の文様自体は銅鐸に見いだせるが、構成や施文部位まで正確を期したものではない。

以上のように、八日市地方遺跡においては、武器形(銅戈・銅劍)と銅鐸いずれの模倣品も存在し、かつその時期が中期中葉から後葉に遡る。加えて、武器形青銅器模倣では、やや青銅器の形態を逸脱した変容も考えられた。したがって、現在なお青銅器の出土は見ないものの、八日市地方遺跡に展開していた集落および地域社会には、青銅器(銅戈・銅劍・銅鐸)が存在し、かつ模倣品を生み出すほど、一般成員にその祭祀的意味が浸透していたと考えられる。八日市地方遺跡の地に、弥生青銅器そして青銅器文化が確かに存在したのである。

なお、数は少ないながら、能登半島のつけ根、吉崎・次場遺跡においても、同様に中期中葉に遡る可能性の高い青銅器模倣品が存在する。銅劍形石製品(8)は水平な翼を丁寧に作り出し、関部双孔も一部が残る。対して銅鐸形土製品(5)は、レンズ状の断面で鐘形のプロポーションをもつものの、鱗・舞・型持孔・文様いずれもなく、鈕孔とみられる頂部表裏方向の貫通孔をもつのみと、模倣の程度は高くない。さらに埴生南遺跡の銅鐸形土製品から、富山湾岸にも中期段階で青銅器文化の波及が窺える。

3 吹上遺跡の青銅器模倣品

飛び石的ながら、八日市地方遺跡に発する中期の青銅器模倣品は、吹上遺跡に行き着き、5点を数える(図4)。853は現状断面が扁平な六角形状で武器形か。現状主軸に斜交して溝状部があり、また孔の一端が残ることから、銅劍形石製品の基部付近を取り出し軸方向も変える再加工が施されたものである。時期は吹上Ⅱ期の中期末葉。854は扁平な板状土製品で、銅戈樋先端近くの鋒部分にあたる。樋先端は左右合致せず、樋内に鋸歯文があることから、銅戈でも近畿型を模倣したことが明白である。吹上Ⅰ期中期中葉後半に遡る可能性が示唆されている。856は三角形の石製品であるが、提示図で上辺を基部とすると、その上位に双孔が並び中央部の厚みが大きいことから、銅戈形石製品基部再加工の可能性が考えられる。中期末葉。864は銅鐸形土製品。SK63出土で確

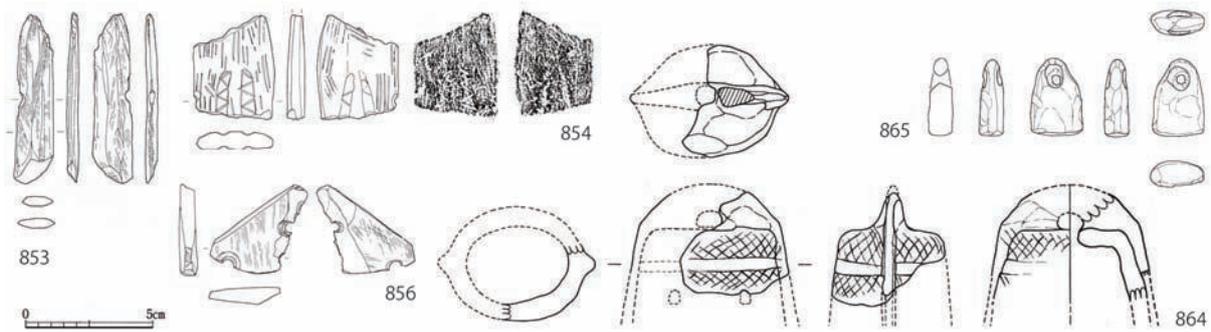


図4 吹上遺跡出土青銅器模倣品（表1文献より、番号は報告のまま）

実に吹上I期中期中葉後半に遡る。鈕の一部と鐸身上半部が残り、鈕はやや厚みを残すが扁平。表裏に貫通する小さな鈕孔直下の舞に同規模の型持孔が1孔開く。鐸身表裏は同じ横帯文構成で、上から舞に接する斜格子文帯、幅狭の無文帯、斜格子文帯となり、下位の斜格子文帯に身型持孔の一端がかかる。幅狭の無文帯が銅鐸とは異なるものの、八日市地方の諸例より模倣程度は高いと言えよう。865は1号方形周溝墓下層出土で中期末葉。扁平な鐘形で上位に鈕孔を象った1孔を穿ち、平面形のみを写した銅鐸形石製品と判断される。

吹上遺跡の中期の青銅器模倣品は、銅剣形石製品・銅戈形土製品・銅戈形石製品・銅鐸形土製品・銅鐸形石製品と、模倣対象と素材の組み合わせにおいて多様性に富む。ならばやはり吹上遺跡においても、青銅器の存在を前提に考えなければなるまい。

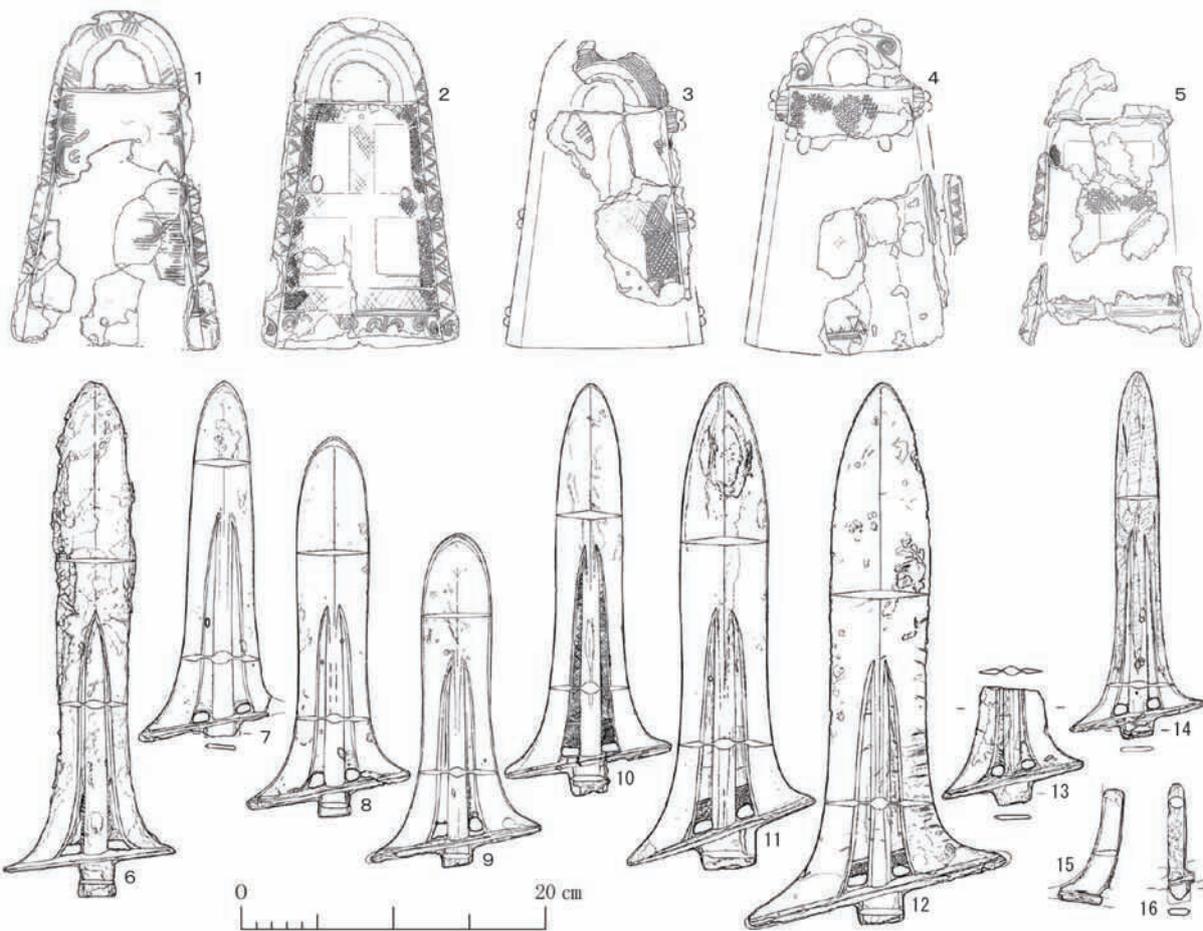
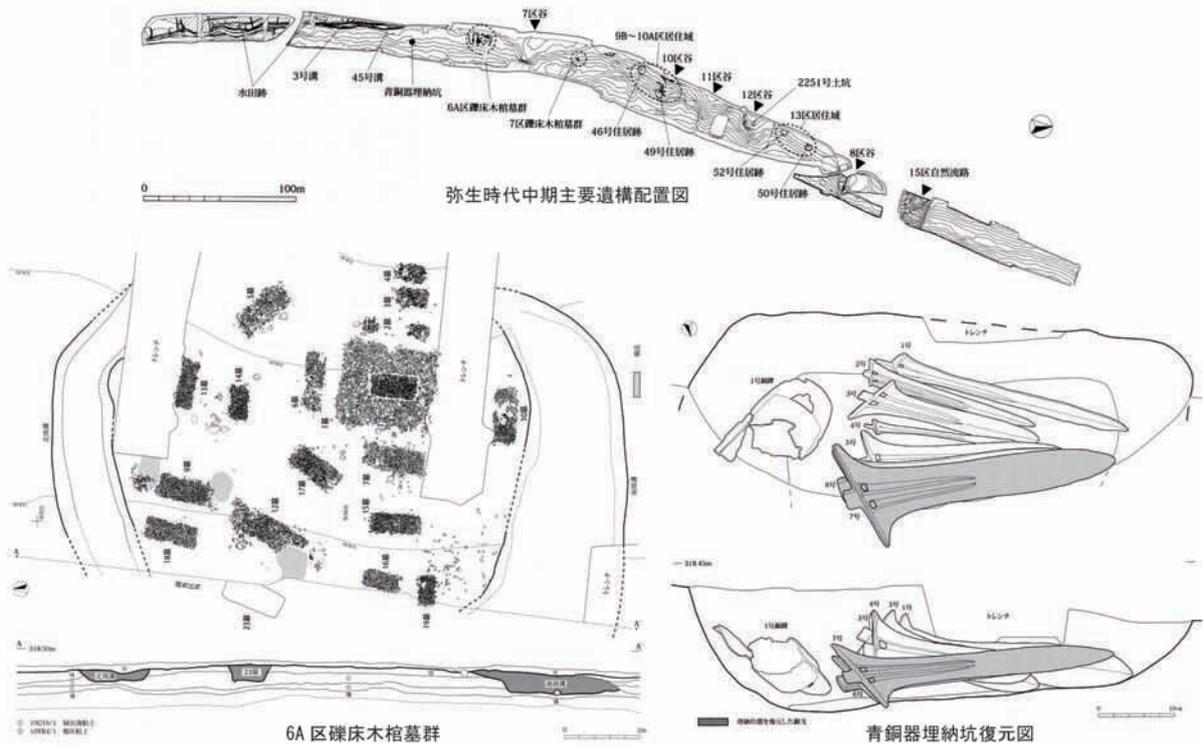
なお、明らかな近畿型銅戈模倣の銅戈形土製品と、後述する斧刃状再加工を共通させる上越市巻銅戈形石製品の存在は、中部高地からの逆移入も視野に入れておく必要がある。

4 信州の青銅器文化

柳沢遺跡(廣田編 2012)の発見は、重層的な信州の青銅器文化像を一層明確にした(吉田 2013等)。青銅器自体は、朝鮮半島(多鈕無文鏡)・北部九州(中細形C類銅戈・近畿型I式銅戈?)・近畿(銅鐸)と多様な来歴を含み、柳沢遺跡はじめ出土遺跡の分布や栗林式土器の系譜等から、日本海側からの流入が強く想定できる。しかも、柳沢遺跡における埋納状況から西日本と何ら変わることはない埋納祭祀のあり方までも受容している(図5)。

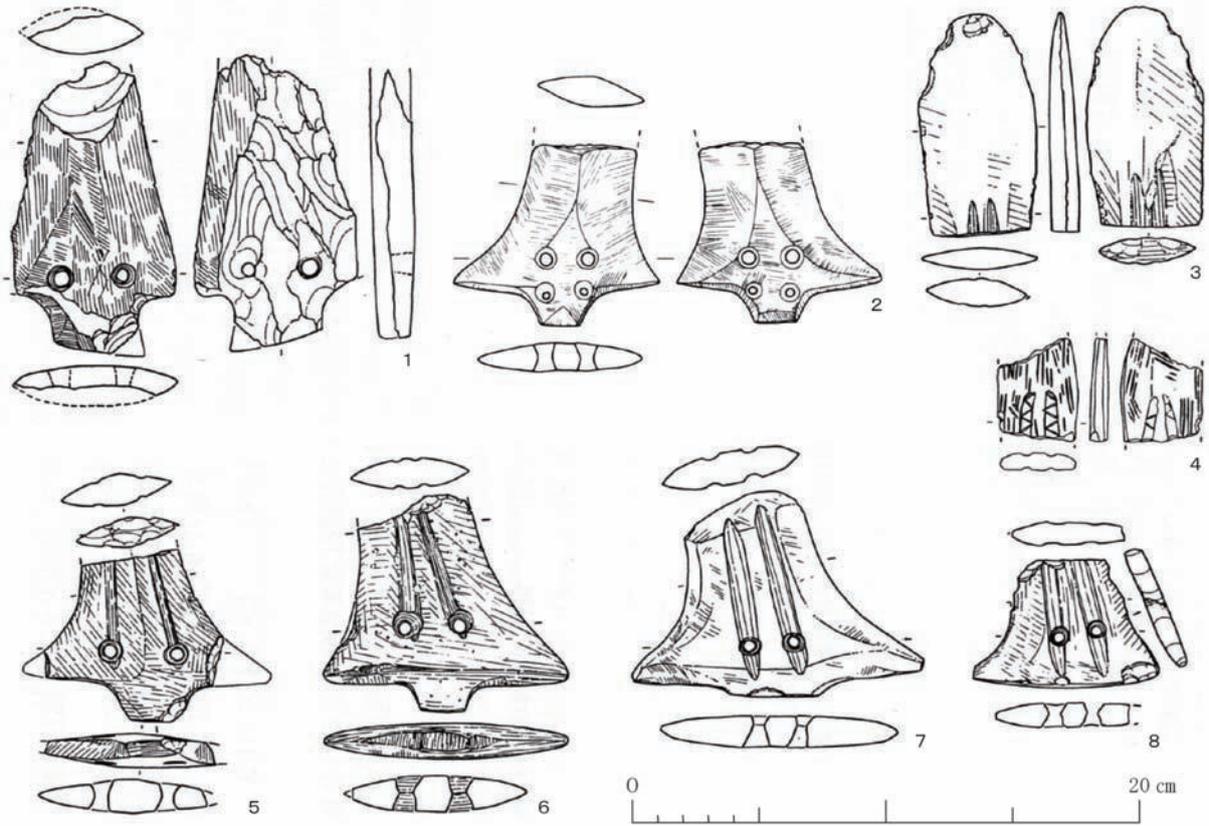
しかしながら、模倣品を作り出して重層的な祭祀を展開したのは専ら銅戈のみ。銅鐸模倣品は皆無で、青銅器祭祀受容に際して、信州在地の銅戈選択の強い志向を読み取ることができる。信州を中心とした地域の銅戈模倣品は約20例を数える(図6)。無樋と有樋、内の有無等、多様な模倣品が存在する。近畿型銅戈通有の樋内複合鋸歯文まで写したのが吹上の銅戈形土製品であったが、最近熊谷市前中西遺跡でも樋内に複合鋸歯文を陰刻した銅戈形石製品が出土し、中部高地栗林式を中心とした銅戈模倣の多様性と広がりを更新した。なお、銅戈と銅戈形石製品に「斧刃状」と言われる(馬場 2008)、共通した再加工のあり方・研磨方法がみられ、青銅器と青銅器模倣品に、取り扱いを共通させた上での重層的関係を見ることができるといえる。なお意外ながら、このような青銅器と青銅器模倣品の重層的関係は、列島内の他地域ではほとんどみることができない(吉田 2014b)。

銅戈と重層的な関係を有した銅戈形石製品は、さらに形態変化を遂げていく(図7)。有孔石製



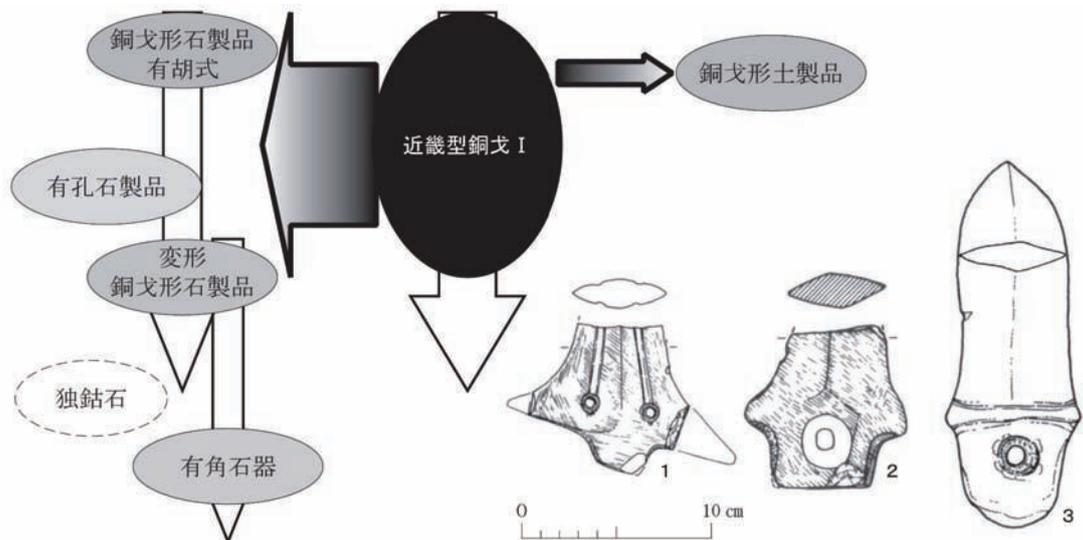
1～13；長野・柳沢、14；長野・上諏訪神社蔵、15；群馬・三ツ俣、16；群馬・八木連西久保

図5 柳沢遺跡および柳沢遺跡他出土青銅器（廣田編 2012 より）



1 ; 長野・黒沢川右岸、2 ; 群馬・古立東山、3 ; 長野・笠倉、4 ; 新潟・吹上、5 ; 長野・北裏、6 ; 長野・沢村、7・8 ; 長野・松原

図6 信州および周辺の銅戈模倣品 (2 ; 水田・平岡編 1990、他 ; 石川 2012 より)



1 ; 長野・北裏、2 ; 長野・宮瀬本村、3 ; 長野・笠倉 (いずれも馬場 2008 より)

図7 中部高地の銅戈模倣 (吉田 2014a より)

品の影響下に変形銅戈形石製品が成立し、この延長に縄文系の独鈷石等からの系譜を取り込みつつ有角石器に至る（石川 1992・馬場 2008・小林 2013 等）。信州の地においては、銅戈模倣に発する多彩な石製祭器が生起し、その間不断に銅戈からの影響が継続されたことに、また大きな特徴がある（吉田 2014a）。

おわりに－信州青銅器文化への道程－

日本列島において最東の信州の地において、最も重層的な青銅器文化が弥生時代中期のうちに成立していた。それに至る道程は、点々と残された青銅器模倣品によって推し量れた北陸地域の中期青銅器文化の存在しかあり得ない。信州に南から至る木曾や伊那といったルート上には、中期に遡る青銅器文化の痕跡が認められず、何より信州においても北に偏って青銅器文化が展開している状況である。

ならば、現在で見えている青銅器模倣品以上の、青銅器本体を伴った北陸地域青銅器文化が実体として存在したはずである。八日市地方遺跡の集落あるいはその地域弥生社会こそ、青銅器保有の最有力候補であろう。いずれそれを雄弁に語る資料が出土すると確信する。

【注】

1 模倣品の範疇に含まれる可能性のある小銅鐸を除いて、基本的に後期以降に降る銅鏡や銅鏃等の小型青銅器、さらには後期の青銅器製作関連遺物も省いた。後期以降の青銅器文化について若干の言及はするものの、資料集成を経て改めて論じる機会を持ちたい。

【参考文献】

- 荒木麻理子編 2002 『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』、石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
石川日出志 1992 「N.G.マンロー資料中の「有孔石剣」と「石包丁」『考古学雑誌』78- 1、pp.118～125
石川日出志 2012 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市 柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100、pp.182～191
北島大輔 2003 「福田型銅鐸の型式学的研究」『考古学研究』51-3、pp.32～52
小林青樹 2013 「戈形の象徴性」『栃木史学』27、pp.16～42
笹沢正史編 2006 『吹上遺跡』、上越市教育委員会
下濱貴子編 2013 『八日市地方遺跡Ⅱ』、小松市教育委員会
鈴木一有 2014 「松東遺跡における銅鐸破片出土の意義」『松東遺跡3次』、浜松市教育委員会
種定淳介 1990 「銅剣形石剣試論（上）・（下）」『考古学研究』36-4・37-1、pp.21～52・29～56
馬場伸一郎 2008 「武器形石製品と弥生中期栗林文化」『「赤い土器のクニ」の考古学』、雄山閣、pp.111～163
廣田和穂編 2012 『中野市 柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
福海貴子・橋本正博・宮田明編 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会
松葉竜司編 2004 『美浜町歴史シンポジウム記録集 1 美浜出土銅鐸が語る～銅鐸と生きた人々の暮らし～』、美浜町教育委員会
水田稔・平岡和夫編 1990 『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』、妙義町遺跡調査会
吉田広 2005 「福田木ノ宗山の遺跡と銅剣・銅戈－広島武器形青銅器・補遺－」『考古論集－川越哲志先生

退官記念論文集一』、川越哲志先生退官記念事業会、pp.329～346

吉田広 2008 「日本列島における武器形青銅器の鑄造開始年代」『新弥生時代のはじまり』第3巻 青銅器と鉄器の系譜と年代、雄山閣、pp.39～54

吉田広 2009 「銅鐸分布圏の武器形青銅器素描」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』、一山典還暦記念論集刊行会、pp.75～88

吉田広 2012 「出雲青銅器文化の重層的検討」『古代出雲における青銅器文化の研究』、島根県古代文化研究センター、pp.7～23

吉田広 2011 「武器形祭器」『講座 日本の考古学』6 弥生時代（下）、青木書店、pp.187～222

吉田広 2013a 「吉備における青銅器祭祀の在地化」『考古学研究会例会シンポジウム記録九 吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』、考古学研究会、pp.107～128

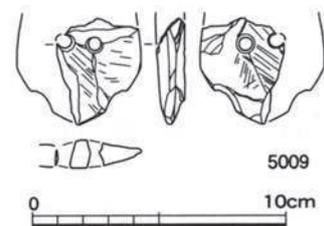
吉田広 2013b 「信州における青銅器の受容と祭祀」『日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』、日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会、pp.295～300

吉田広 2014a 「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、pp.239～281

吉田広 2014b 「青銅器模倣研究の可能性」『第63回埋蔵文化財研究集会 青銅器の模倣Ⅰ』、埋蔵文化財研究会、pp.1～12

【補遺】

北陸地域の青銅器模倣品として、越中地域高岡市中曾根西遺跡出土資料を漏らしていた。中期から後期の土器を含むSD23出土5009で、銅戈形石製品下端の可能性はある（土任隆編2005『中曾根西遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第13冊）



中曾根西遺跡出土資料

小松集団と交流する信州栗林集団

下呂市教育委員会
馬場 伸一郎

はじめに

栗林式土器は、信州（長野県）北部から東部を流れる千曲川流域と、松本盆地を中心に分布する土器型式である。その年代の幅は、おおよそ紀元前3世紀頃から紀元前1世紀頃である（第1図・第1表）。

栗林式土器の壺は一般的には器高40cm程度で、文様を頸部（壺の首の部分）から胴部の上半に、縄文・ヘラ描き・櫛歯を工具として、直線・波状・弧状の文様を施す。また、文様のない帯も入り、文様のある場所・ない場所を組み合わせで多彩な装飾となっている。甕は口縁部下に文様は施さず、胴の上部から下部にかけて、櫛描の羽状文・垂下文・波状文を施文する。

壺と甕の器形・装飾は、年代とともに変化をしており、現在、栗林式土器は3型式6段階に細かく区分されている（馬場2008c）。なお、栗林1式の壺に限り、器高が60cmを超える大形のものがある。

栗林式土器の装飾は栗林式よりも前の土器型式の装飾を多く引き継いでいるが、北陸方面から経由して入ってくる土器型式の影響を受けて成立した。その影響元が、小松式土器と、北陸よりさらに西方の土器型式である（石川2002,2012）。

栗林式土器の成立に見られる背景は、「栗林文化」の成り立ちとその後を考える上で、極めて重要である。石川氏は、「栗林式土器は成立当初は西方との関係が密であったのが、時期が下るに従ってそれが希薄になる」と指摘した。上越市吹上遺跡で出土した銅鐸形土製品等の遠隔地系遺物と、中野市柳沢遺跡で出土した銅鐸5点・銅戈8点の背後に、北陸そしてさらに西方との関係が栗林式成立期に密な状態を推定する（石川2012）。

ここでは、「栗林文化」がどのように始まり、そして展開していくのか、特に北陸側との交流に注目しながら見てみたい。

「栗林文化」とは

「栗林文化」の特徴をまとめると、①水田稲作とアワ・キビに代表される雑穀栽培を主な生業とすること、②集落構造は、単なる「集合」状態のみならず、環濠で区画された区域をもつ大規模な「集住」集落を、特定の地域に単発的に形成することがあること、③集団の規模は固定的ではなく可変的で、また集団は移住を伴い、集団関係は等質性を基本とすること、④中部高地と隣接する日本海側から太平洋側各地域に広域の物流ネットワークを形成すること、⑤西日本に起源をもつ青銅祭器とその模倣品である武器形石製品のシンボル性により、集団の統合がなされていたことを挙げるができる。以下に一つずつ見てみよう。

①水田稲作と雑穀栽培の複合

「栗林文化」の遺跡では、これまで明確に水田跡が検出されたという例はない。ただし、栗林式後半期の長野市川田条里遺跡と石川条里高速道地点で、部分的ながらもその時期の用水路とわずかながら水田の畦畔が検出されているため、「栗林文化」が水田稲作文化であることはまず間違いない。しかしながら、「栗林文化」の農耕具に関しては、磨製石庖丁は未成品から完成品までの一連の製作工程品とその出土量も豊富である一方で、木製農具はいまだその確実な出土例がない。打製石斧（石鋤）が限られた量ながら出土することがあるため、木製農具の代用として使われていた可能性がある。

近年、土器の表面にある圧痕にシリコンを注入し、その圧痕レプリカを走査型電子顕微鏡で観察し、種実を同定するレプリカ法が発達している。焼成前に土器に付いた圧痕であれば確実にその時期・時代の種実である。当時の生業を知る上で重要な手法である。

現在、遠藤英子氏が関東北西部の栗林式併行の遺跡を調査しており、イネ圧痕の他に、アワ・キビ圧痕が一定量認められることが判明している（遠藤 2014）。栗林式段階については目下、遠藤氏と長野県内にて共同で調査を実施しているが、長野市春山 B 遺跡・松原遺跡でも、イネ圧痕（写真 1-①・④）とともにアワ（写真 1-②）・キビ（写真 1-③）圧痕が見られる。したがって、「栗林文化」には、稲作と雑穀栽培が組み合わさる複合的な生業が存在したと考えられる。

春山 B・松原両遺跡で見られたイネ・アワ・キビの「パッケージ」は、同県内では調査事例がないものの、信州に近い東海地方と埼玉北部域の弥生中期初頭から中葉頃で見られる（遠藤 2012,2014）。その結果は、「栗林文化」のパッケージのあり方と、栗林式以前のそのあり方とのつながりを考えるのに参考になる。

②集落構造

発掘調査で検出された水田関連遺構と種実圧痕の調査で明らかになってきたように、「栗林文化」の集団が主たる生業とするものは、以前から行われていた「アワ・キビ雑穀栽培」と、栗林式段階に新たに導入された「水田稲作」で構成される。となれば、当然、生業に投下される労働力の差が十分に想像できるため、集落構造にもそれが反映されていると考えられる。集落の構造とは、集落遺跡の調査で発見された遺構のパターンである。

栗林式成立期の集落の構造は、集落が立地の地形の制約を受けながら、竪穴住居数棟の組み合わせをパターンの基本とする。これを「単位遺構」と仮に呼びたい。そして、その「単位遺構」が“ゆるやか”に「集合」した状態が、栗林式成立期の基本的な様相である。「単位遺構」の周りには、通常、10 基程度の^{れきしゅうもつかん ぼ}礫床木棺墓で構成される墓群が伴う。典型例は、長野市^{まゆみだ}檀田遺跡・飯山市小泉遺跡群である。

「栗林文化」には、もう一つの集落構造パターンがある。居住域が 10 万㎡を超え、かつ集落全体あるいはその部分を環濠で囲い、さらに環濠の内部を小規模な溝で区画することもある。まるで、仕切られた空間を造ることを意図しているようである。遺構の重複が激しいこともあり、「単位遺構」はかろうじて確認できる。このパターンを「集住」と呼ぶ。「集住」パター

ンの典型的集落は、長野市松原遺跡・同榎田遺跡^{えのきだ}と佐久市西一本柳遺跡等が挙げられる。

「集合」と「集住」という「栗林文化」を特徴づける集落構造のパターン（馬場 2013）はあくまで大枠での様相であり、中には程度の差も見られる。

「集合」パターン^{まひだ}の遺跡を見ると、檀田遺跡では三つの旧河道に挟まれた緩やかな傾斜面上に、栗林 1 式から 2 式古段階の竪穴住居合計 21 棟が少なくとも 5 単位に散在して検出されている（第 2 図）。その内、1 つの単位には墓群が伴い（第 3 図）、墓制は礫床木棺墓である（第 4 図）。竪穴住居と墓群の関係がより鮮明であるのが小泉遺跡群である。栗林 1 式段階の遺構が中心となる遺跡で、4 つの谷で分離された 5 つの尾根上に各々竪穴住居数棟と掘立柱建物跡が検出され、墓群も竪穴住居や掘立柱建物跡と同様に 5 つの尾根上に認められる（第 6 図）。

一方で、「集住」の典型例である松原遺跡は、遺構の重複が非常に激しく、同一の土器型式を出土する竪穴住居でも遺構の重複関係が認められる。「大規模集落」と呼ぶにふさわしい集落遺跡で、遺構の多くは、栗林 2 式中段階から新段階に該当する（第 7 図）。西地区の一角を見ると、幅 6 m 程度の断面 V 字形の環濠で囲われた空間を、さらに幅 1 m ～ 2 m 程度の小規模溝と、さらにそれより細い幅 20cm ～ 30cm 程度の溝（布堀り溝）が仕切る様子がわかる。各種の溝で仕切られた空間は約 300 ～ 800m²程度の空間をもち、その中には竪穴住居・平地住居・掘立柱建物跡が各々数棟見られる。すなわち、先の「単位遺構」と同様の遺構構成である。松原遺跡は極端に「単位遺構」が集まり、かろうじて小規模溝の存在でその境が確認できる程度である。そのため、「単位遺構」そのものが巨大化してしまっている可能性もある。ただし、墓群は「集合」パターンと共通して、居住域内に分散している。

なお、栗林式 2 式新段階の中野市栗林遺跡の例は、居住域外側に環濠をもつ、その内部をさらに溝などで囲うといった「集住」の要素が見られる一方で、遺構の密度が低い。「集住」の程度の差と考えられる例である（第 5 図）。

さて、「単位遺構」は、栗林式以前の、雑穀栽培を主な生業とする小集団に由来すると考えられる。栗林式以前の畿内第 II 様式併行期の新諏訪町段階には「単位遺構」が指し示す小集団が一般的であった。それが変化するのが、栗林式直前段階の畿内第 III 様式^{まつぶせ}の長野市松節遺跡からである。そこでは「単位遺構」が“ゆるやか”に「集合」し、栗林式成立期に至る。そして、栗林式後半期には単位遺構の巨大化や、「集住」集落が登場する。いわゆる大規模集落の登場である。栗林式直前の段階から栗林式の段階にかけて集団単位が結合・移動など変化する（馬場 2008b）背景には、より大きな協業を必要とする水田稲作とそれに付随する手工業生産の比重が大きく占めていったことが考えられる（馬場 2007b）。

③集団関係

集落構造が「集合」から「集住」へと変化が見られることで人口の増加が推定されつつも、「栗林文化」の集団関係は、ほぼ一貫して親子関係に基づく血縁と夫婦関係を核とする世帯原理を基本としたと考えられる。それを考古資料から点検してみよう。

集落遺跡で分散して認められる墓群は、棺床の長さから成人用・小児用があり、また礫床木棺墓の主軸が 45°から 90°に交わる 2 から 3 群に分かれることが多い。その様相は、栗林式

直前段階の長野市松節遺跡でも窺えることから、「栗林文化」へと継続する要素である（馬場 2007b）。栗林式の時間幅の中で集落構造や集団単位が変わりながらも、「栗林文化」以前の集団関係が実はその後の「栗林文化」集団を規定しているところに注目したい。

そのためか、通常、「栗林文化」の礫床木棺墓には格別な副葬品と埋葬施設で特別な人物を埋葬した厚葬は認められない。この姿は栗林式を通じて、千曲川流域に見られる特徴である。

唯一例外であるのが柳沢遺跡である。銅鐸 5 点・銅戈 8 点が出土した同遺跡では、周囲を溝で囲まれた 18 基の礫床木棺墓が検出された。周溝からは栗林 2 式古段階の土器が出土する。その中で、1 号墓は長さ 1.7m・幅 0.6m の埋葬部の周囲に礫床を敷き、長さ 2.5m・幅 2.2m の規模をもつ。また埋葬部より管玉が 101 点出土した。同じ墓群に同類はなく、埋葬施設と規模、副葬品において突出する。このような墓制の要素全てを「栗林文化」のオリジナルと考えることは難しい。

注目したいのは、「栗林文化」に柳沢遺跡のような明らかな厚葬例はわずか 1 例、それも栗林式前半期に限られる。そのため、厚葬は定着しなかった、と考えられるのではないか。銅鐸・銅戈の出土から推定される特別な人物の存在が 1 号墓に反映されていると考えられているが（広田 2012, 笹沢 2012）、仮にそうであっても、栗林 2 式中段階以降、集団関係がより複雑になることが予測される「集住」パターンの集落遺跡に厚葬が定着しない。ここに、「栗林文化」以前から連綿と続く集団関係のベースが「等質志向」であるため、突出した首長層を析出しづらい状況にあることを推定できる。

④青銅祭器とその模倣品の発達

武器形石製品とは、青銅製の銅劍・銅矛・銅戈、あるいは鉄劍を模倣した石製品の総称である。信州を中心に周辺各県に分布する。限られた発掘出土品の時期が栗林式およびその併行期である。先の柳沢遺跡で銅戈が出土したことで、信州を中心に銅戈を模倣した武器形石製品が出土する背景・意義がより鮮明になった。

銅戈を模倣した石製品には、銅戈の原形をほぼ保つ「銅戈形石製品」（第 8 図 - 1・4・5）と、それが変形した「変形銅戈形石製品」（第 8 図 - 6～9）がある。後者は、銅戈形に近いものから一方で銅戈形から大幅に変形が進んだ、いわゆる「有孔石劍」を含む。また、同時期には金属製武器との関連性が窺える、刃部をもつ「有孔石製品」（第 8 図 - 2～3）が認められる。

出土品である銅戈形及び変形銅戈形石製品を点検すると、銅戈形の場合、銅戈の原形をより濃く留める「古式の銅戈形石製品」と、鑄が認められず銅戈の内が短小あるいは消滅し、合わせて樋が浅くなる「新式の銅戈形石製品」の二つがあり、前者が栗林式前半期（1 式～2 式古段階）、後者が栗林式後半期（2 式中段階～2 式新段階）の土器に伴い出土する（第 8 図）。一方で、変形銅戈形は今までのところ栗林式前半期に伴う確実な例がなく、発掘出土品は全て栗林式後半期に伴う。すなわち、柳沢遺跡の銅戈・銅鐸埋納時期（栗林 2 式新段階以前）を境に、千曲川流域で変形銅戈形が登場するという関係が浮かび上がる。なお、筆者は、変形銅戈形の要素は全て銅戈形の要素に限定できないと考えており、異論はあるが（注 1）、先述した有孔石製品の穿孔手法が加わらないと変形銅戈形は成立しないと考える。現在までのところ、有孔

石製品の時期は栗林式前半期に限られ、時期的な関係性にも矛盾はない。

さて、信州北部の千曲川流域に銅戈・銅鐸がもたらされたのには、小松式土器分布圏内にその出土は認められないものの、北陸の「小松文化」集団や、より西方の集団の関与がなければ生じないのは確かである。栗林式前半期（特に栗林1式）に限り、小松式土器の搬入品もしくはその忠実な模倣品が信州北部の遺跡でわずかながらも出土することはその関与を直接示す材料となり、櫛描文土器の横帯構成を模した栗林式壺の装飾帯構成はその理解の傍証になる（石川2012）。また上越市吹上遺跡出土の銅戈形土製品・銅鐸形土製品と、先述の栗林式前半期の古式の銅戈形石製品の存在に見られる遠隔地系物品のコピー品の存在は、北陸側を経由して、西日本系青銅祭祀が「栗林文化」集団に移入されたことを示す。

つまり、栗林式前半期は、土器に限らず「栗林文化」全体が「小松文化」集団やより西方の集団との関係を密にして成立した文化であると理解できよう。

なお、松原遺跡の武器形石製品類の遺跡内分布を点検すると、興味深いことに、3点銅戈形石製品が出土した西地区では、独鈷石^{どっこいし}1点・独鈷石状石器1点が出土した（第9図）。私が注目するのは、銅戈形とともに、全く別系統の石製品「独鈷石」が出土することである。西日本系青銅祭祀一辺倒にならない、「栗林文化」集団のオリジナルな部分が見え隠れする。

なお、青銅器以外の金属器では、長野市春山B遺跡の栗林2式新段階の竪穴住居から板状鉄斧片と報告される鉄器が出土した。現在、弥生中期に該当する鉄器の発掘調査出土例は本例1例で、その他佐久市社宮司遺跡と長野市光林寺裏山遺跡で、時期の位置付けに課題はあるものの、各1点板状鉄斧が報告されている（第10図）。

⑤広域物流ネットワークの形成

「小松文化」集団やより西方の集団との関係が密であった栗林式前半期。その一方で、栗林式後半期はそれが薄れつつ、「栗林文化」集団による磨製石斧の生産・流通網の構築と大規模集落の形成が始まる。特に信州北部の千曲川流域では、栗林式前半期までは「小松文化」集団あるいはより西方の集団からの一方向的な受容が目立ったのが、この段階は、「栗林文化」集団と「小松文化」集団の双方向的な交流が登場する。その直接材料となるのが、硬質の石材を用いた変質輝緑岩^{へんしつ きりよくがん}製の榎田型磨製石斧（第11図）と、吹上産あるいは佐渡島産の勾玉・管玉の分布である。栗林式後半期は、これまでの様子を土台としつつ、「栗林文化」にオリジナルな要素が発現する時期で、沖積地での広大な水田稲作の実施と、榎田・松原両遺跡の磨製石斧分業生産に見られる規模の大きい手工業生産が行われるのもこの段階である。

変質輝緑岩^{へんしつ きりよくがん}製磨製石斧は、両刃である太形蛤刃石斧^{ふとがたはまぐり ぼ}と片刃である扁平片刃石斧^{へんぺいかた ぼ}の二つの種類があり（第12図）、特に広域に流通するのは太形蛤刃石斧である。栗林式後半期の栗林式土器が信州周辺の各県に最も分布域を拡大する時期、変質輝緑岩製磨製石斧は北陸西部・東部の小松式土器分布圏のみならず、同じ信州の南部に分布する北原式、飛騨^{うちがいと}の内垣内式、関東平野の北島式そして宮ノ台式の各土器分布圏に広がる。等質志向で、規模が変化する集団単位をもつ「栗林文化」集団は、外へ外へと物流ネットワークを広げ、やや集落衰退期（八日市地方9期～10期）に入った「小松文化」集団の一つ、八日市地方集落に達する。同集落の出土品

に占める榎田型は約1割と、決して多くはない。客体的であるのは、「栗林文化」集団が「小松文化」集団と北陸西部奥深くにまで交流を行った結果であろう。「栗林文化」集団が「小松文化」集団に求めたものは、栗林式後半期に登場するわずかながらの鉄製利器や、傾斜の少ない広大な沖積地で水田稲作を営むための技術であったのだろうか。まだ検討が必要である。

まとめ－「小松文化」集団と「栗林文化」集団の交流の意義－

栗林式土器の成立に少なからず小松式土器の関与があったことは事実で、それと同時期か直後、柳沢遺跡の銅戈・銅鐸と青銅祭器のコピー品の出土が示す西日本系青銅祭祀の移入があった。「小松文化」集団が在地の「栗林文化」集団の文化変化に直接的に関与する、あるいは丹後以西の集団が「小松文化」集団を媒介して「栗林文化」集団に関与するといった状況が推定されるであろう。いずれにせよ、「小松文化」集団との交流なくして、栗林式前半期の文化は成立しなかった。

しかし、栗林式後半期である栗林2式中段階以降、明らかに小松式土器の影響が薄れ、従前の西日本系青銅祭祀に「栗林文化」独自の要素が加わり始める。そして、柳沢遺跡1号墓に代表される厚葬は定着せず、等質志向で可変的な集団単位が「集合」ないしは「集住」する。それは、栗林式以前の集団関係の延長線上で理解できるあり方である。同じ時期、「栗林文化」集団は北陸方面、関東方面に物流のネットワークを伸長していく。この段階、信州ではわずかながら鉄製利器の出土が見られるため、北陸方面へのネットワーク拡大は、信州栗林集団が鉄製利器を求めた結果であろうか（馬場 2007a,2009）。興味は尽きない。

日本列島の弥生時代の地域文化は、地域相互の交流と文化動態がダイナミックである。それが、日本海側の「小松文化」と内陸地の「栗林文化」には実によく見られる点で、注目される。

レプリカ法による種実圧痕調査については、2014年度-2015年度明治大学大久保忠和考古学振興基金の研究によるもので、本紙レプリカ法の成果について遠藤英子氏よりご校閲頂いた。また、レプリカの採取と観察・同定の際には、明治大学古代学研究所と長野県立歴史館にご協力を頂いた。なお、紙面の都合、論文等は引用文献に限り、発掘調査報告書の引用は本文中の図版引用を除き省略したことをご寛容頂きたい。

【注】

難波洋三 2012「柳沢遺跡出土銅鐸の位置付け」『柳沢遺跡』（長野県埋蔵文化財センター）199頁で、畿内北部を中心に分布する無樋単孔の磨製石戈が祖型であると触れる。

【引用・参考文献】

石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99号・100号、54-80頁。

石川日出志 2012「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』、長野県埋蔵文化財センター、182-191頁。

遠藤英子 2012「レプリカ法から見た東海地方縄文弥生移行期の植物利用」『第19回考古学研究会東海例会

縄文／弥生移行期の植物食料と農耕関連資料』。

遠藤英子 2014 「栽培植物から見た関東地方の「弥生農耕」」『SEEDS CONTACT』第2号、16-23頁、平成25年度基盤研究(A) 課題番号 25244036 「植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」。

笹沢浩 2012 「長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡」『柳沢遺跡』、長野県埋蔵文化財センター、228-240頁。

馬場伸一郎 2007a 「弥生時代の物流とその背景－弥生 III 期後半～IV 期の北陸・信濃北部・関東を事例に－」『中部弥生時代研究会大会 発表要旨』。

馬場伸一郎 2007b 「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』第54巻第1号、47-67頁。

馬場伸一郎 2008a 「武器形石製品と弥生中期栗林式文化」『「赤い土器のクニ」の考古学』、113-163頁、雄山閣。

馬場伸一郎 2008b 「長野盆地南部における縄文晩期後半から弥生時代の集落動態と竪穴住居構造」『地域と文化の考古学』II、237-256頁、明治大学考古学研究室。

馬場伸一郎 2008c 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究－弥生交易論の可能性を視野に入れて－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集、101-174頁。

馬場伸一郎 2009 「磨製石斧の「生産」と「交易」」『中部の弥生時代研究』、167-195頁、中部の弥生時代研究刊行委員会。

馬場伸一郎 2013 「弥生集落と地域社会－中部高地から－」『文化の十字路 信州』、日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集、314-321頁。

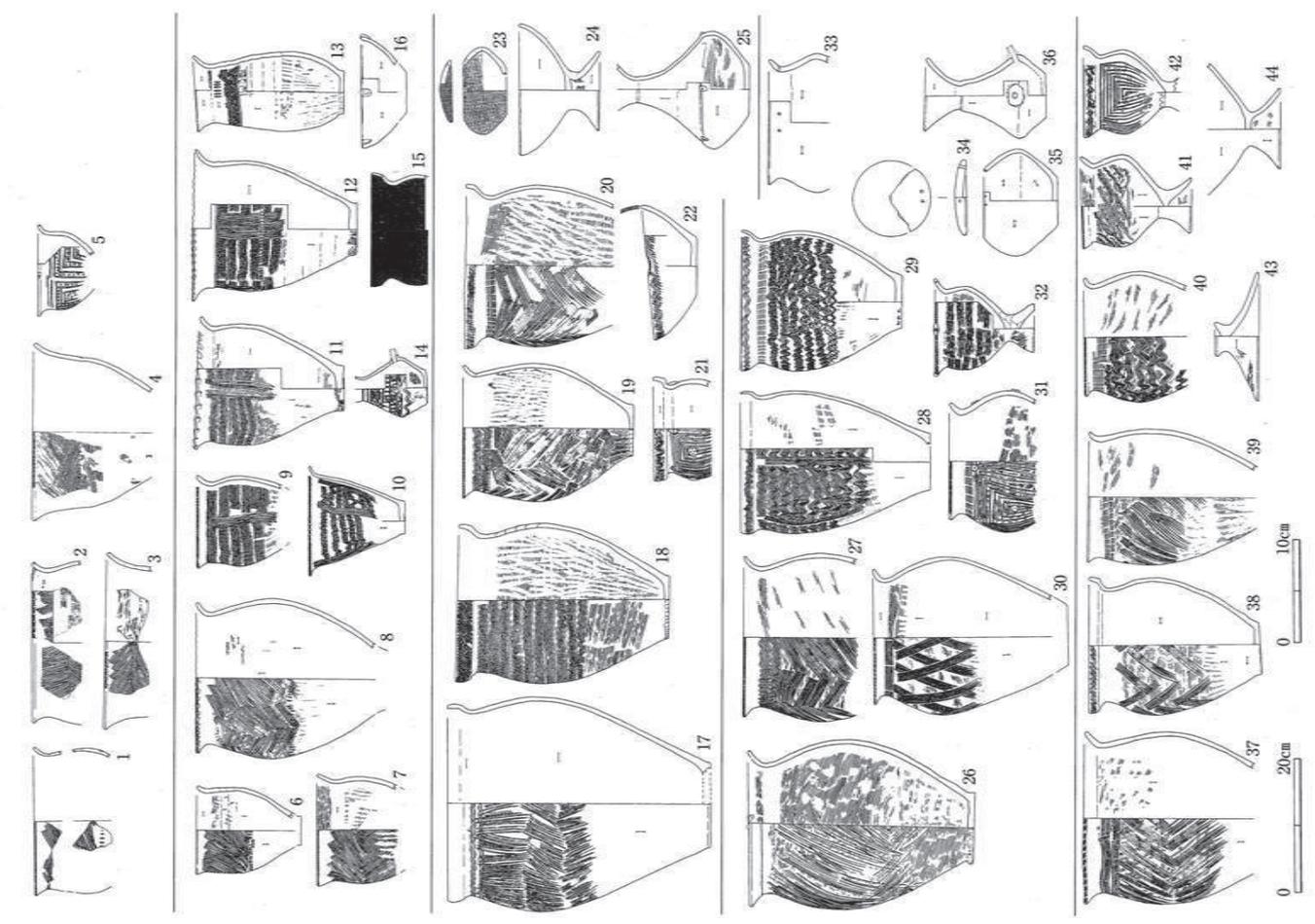
林大智 2009 「北陸における弥生時代の生産と流通」『中部の弥生時代研究』、145-166頁、中部の弥生時代研究刊行委員会。

久田正弘 2004 「南加賀地方における弥生時代の様相」『石川県埋蔵文化財情報』第11号、52-61頁、石川県埋蔵文化財センター。

広田和穂 2012 「長野県中野市柳沢遺跡の発掘調査－東日本で初例となる青銅器埋納坑の調査－」『考古学雑誌』第96巻第3号、50-62頁。

【図版出典】

第1図：馬場伸一郎 2008 掲載図。実測図は長野県埋蔵文化財センター 1998 『松原遺跡』(弥生中期・土器図版)より引用。第2図：馬場伸一郎 2013 掲載図。長野市埋蔵文化財センター 2004 『檀田遺跡』(本文編) 掲載図に加筆。第3図：長野市教育委員会 2004 『檀田遺跡』(図版編)。第4図：長野市教育委員会 2004 『檀田遺跡』(図版編)。第5図：馬場伸一郎 2007 掲載図。中野市教育委員会 1997 『栗林遺跡発掘調査報告書』、中野市教育委員会 2001 『栗林遺跡発掘調査報告書』 掲載図を改変し作図。第6図：馬場伸一郎 2013 掲載図。飯山市教育委員会 1995 『小泉弥生時代遺跡』 掲載図を改変し作図。第7図：馬場伸一郎 2007 掲載図。長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡』(遺構本文・遺構図版) 掲載図を改変して作図。第8図・第9図・第11図：馬場伸一郎 2008a 掲載図。ただし実測図と遺構図は、長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡』(前掲)・同 1999 『檀田遺跡』各報告書より引用。第10図：長野県埋蔵文化財センター 1999 『春山遺跡・春山B遺跡』、1978 『更埴埴科地方誌第二巻』、石川日出志 2011 「社宮司遺跡の多紐鏡・玉・鉄斧一括資料を考える」『佐久考古通信』No.108、14-15頁。第12図：馬場伸一郎 2008a 掲載図。写真1-①～④：遠藤英子撮影及び観察同定。



栗林1式

栗林2式古段階

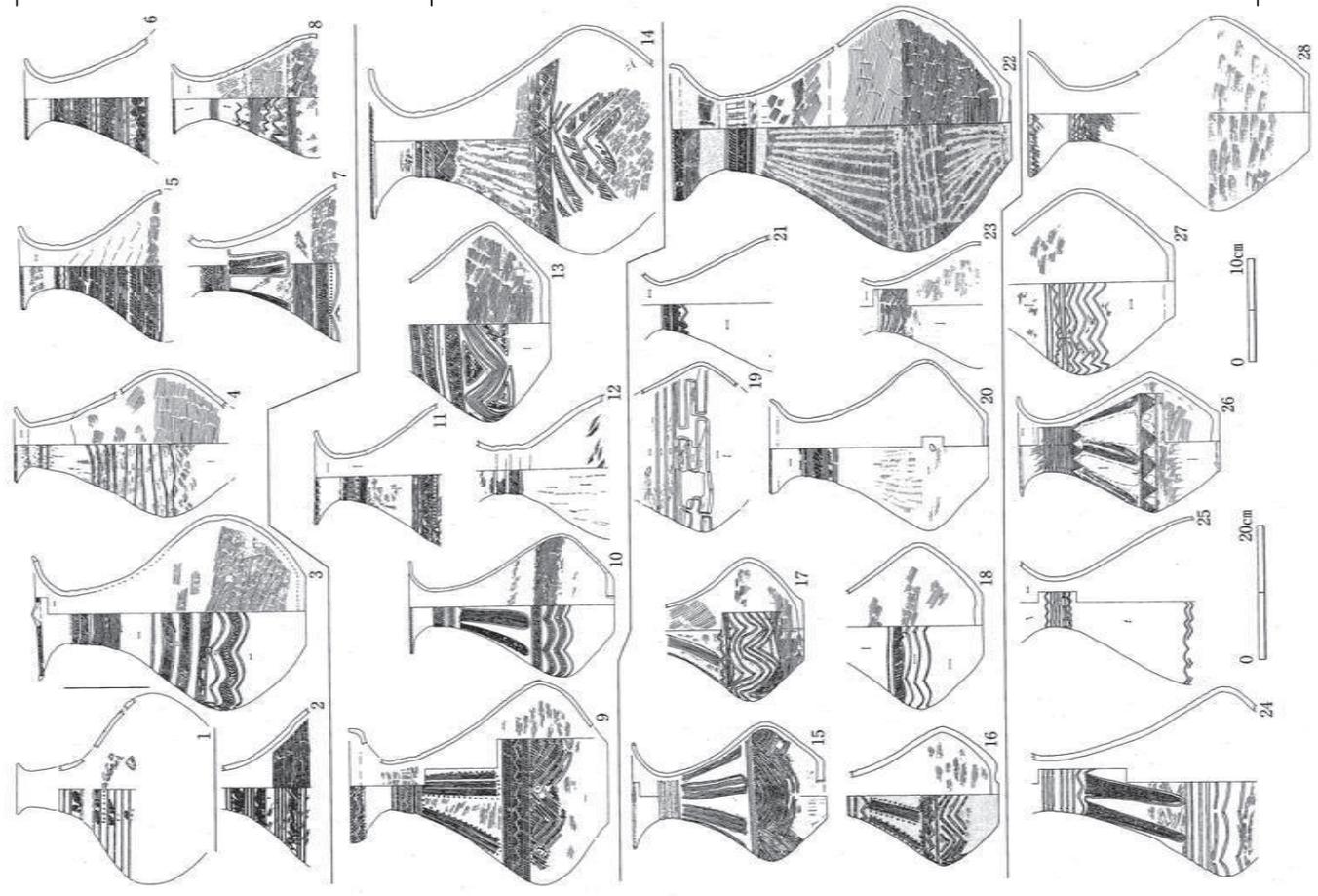
栗林2式中段階

栗林2式新段階

栗林3式

栗林式前半

栗林式後半



栗林1式

栗林2式古段階

栗林2式中段階

栗林2式新段階

栗林3式

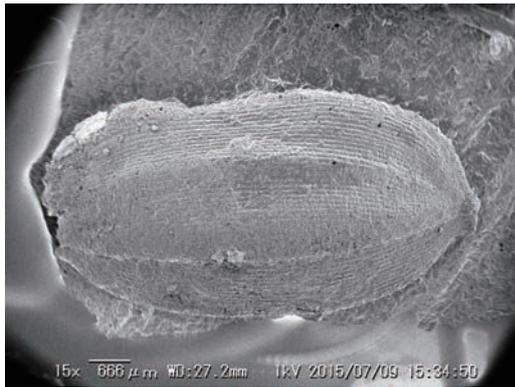
第1図 栗林式土器の編年〔長野盆地南部・松原遺跡出土〕

第1表 栗林式の編年的位置付け

畿内	尾張	加賀	飛騨	長野		埼玉北西部	
佐原1968	永井・村木2002	福海2003					
Ⅱ 様式	Ⅱ-1	八日市3	(阿弥陀堂の一部)	(新諏訪町)			
	Ⅱ-2	八日市4					
	Ⅱ-3	八日市5					
Ⅲ 様式(古)	Ⅲ-1	八日市6	+	(柳沢遺跡)	(松節)	(三ヶ尻上古)	
	Ⅲ-2	八日市7			銅鐸・銅戈招来	栗林1	池上(古) 池上(新)
	Ⅲ-3						
	Ⅲ-4						
Ⅲ-5	八日市8						
Ⅲ 様式(新)	Ⅳ-1	磯部運動公園	内垣内	銅鐸・銅戈埋納	栗林2 古・中・新	上敷免新	
	Ⅳ-2					北島(中)	
Ⅳ 様式	Ⅳ-3	専光寺			栗林3		前中西
	Ⅳ-4	戸水B					+
	Ⅳ-5						

※畿内・尾張・加賀の併行関係は石川2012を参考にした。

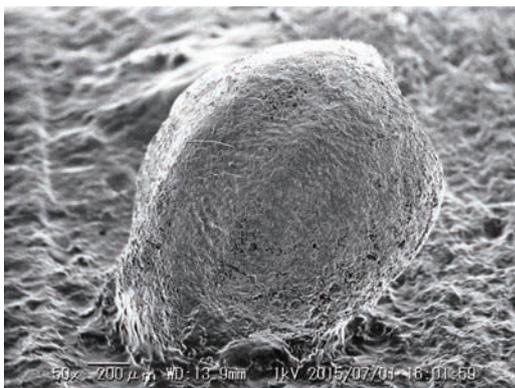
※限定的な資料から併行関係を検討したため、不確かな部分が含まれることに注意。



①長野市松原遺跡 イネ粃



③長野市春山B遺跡 キビ有ふ果

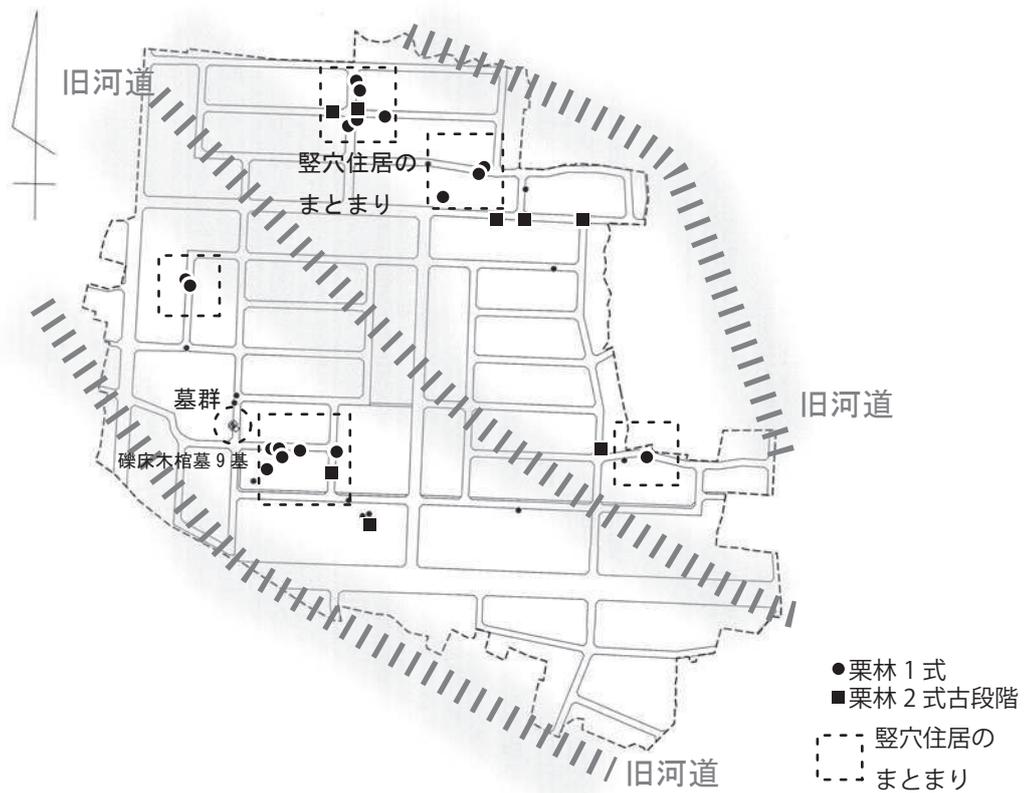


②長野市松原遺跡 アワ有ふ果



④佐久市森平遺跡 イネ粃

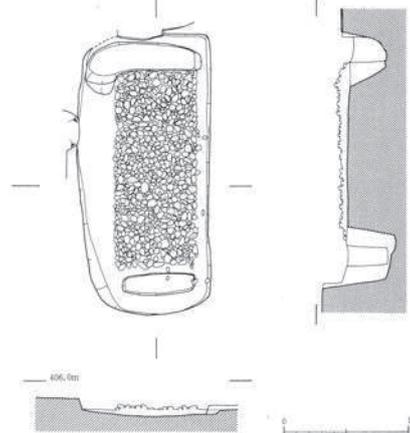
写真1 栗林式段階の遺跡で確認した土器表面の種実圧痕
(観察同定：遠藤英子、明治大学古代学研究所設置 SEM 撮影)



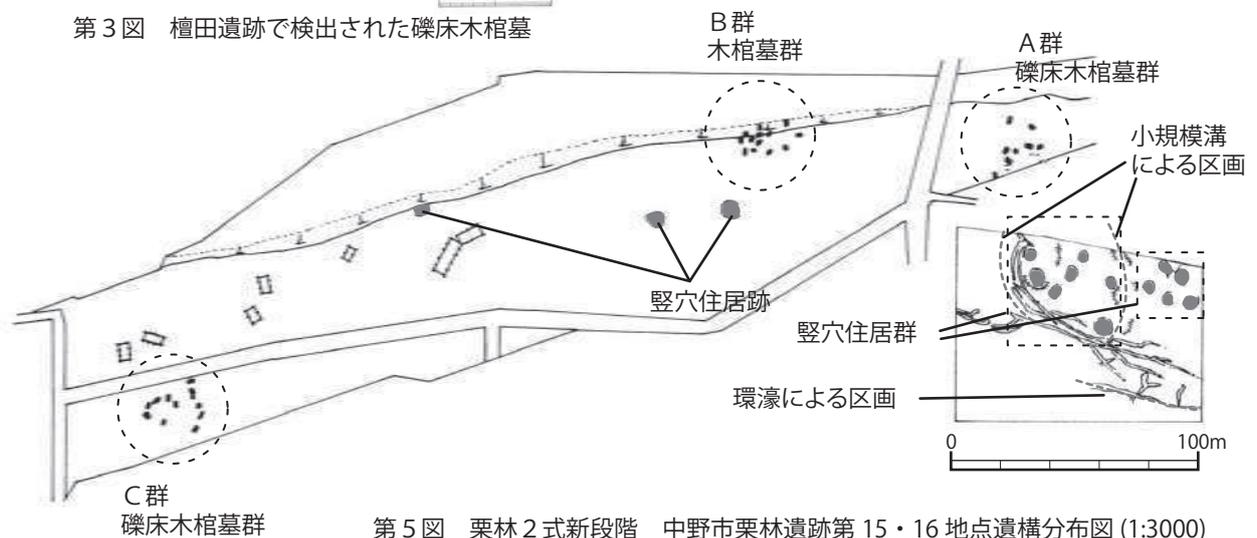
第2図 栗林1式～2式古段階 長野市檀田遺跡のの竪穴住居遺構分布 (1:6000)



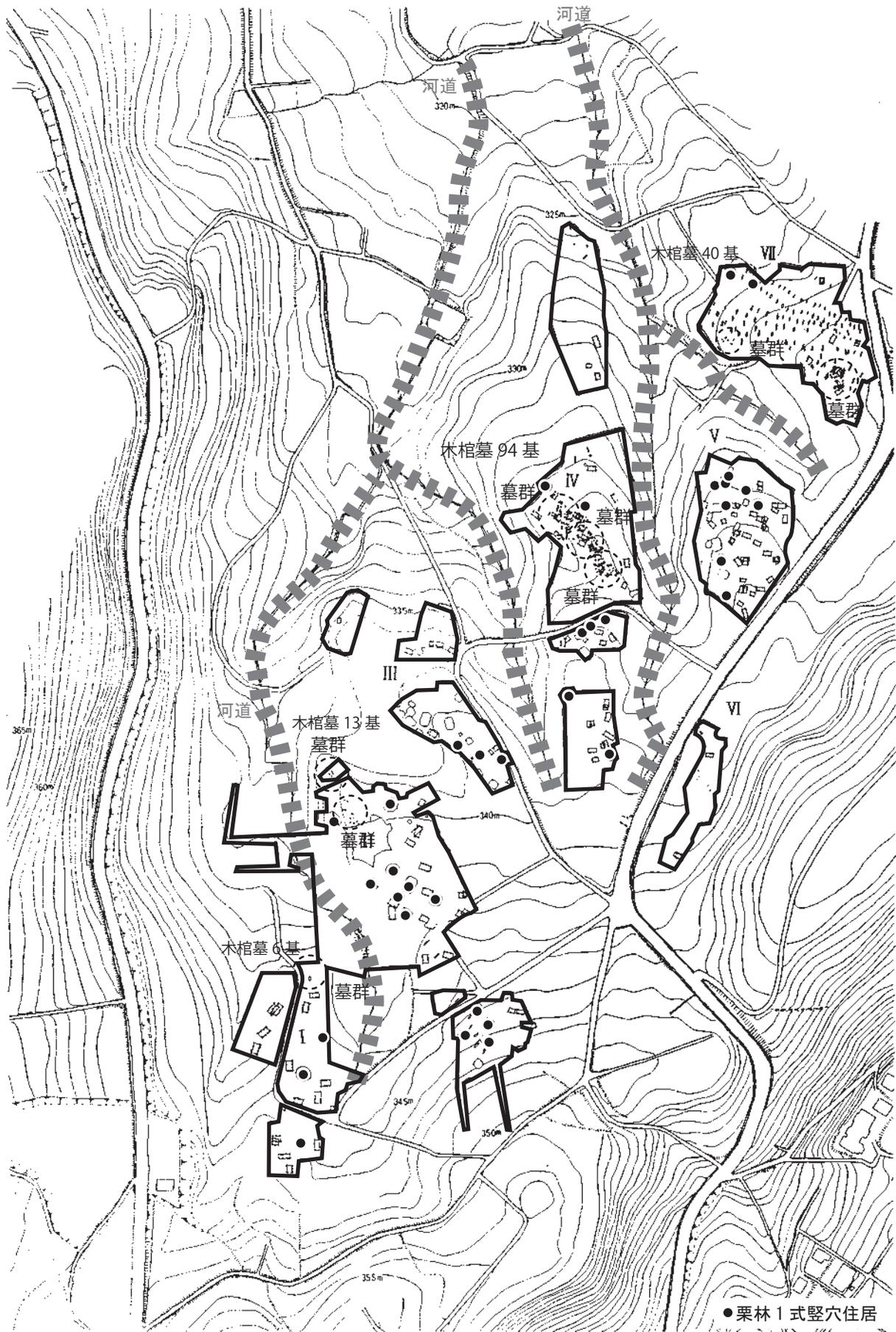
第3図 檀田遺跡で検出された礫床木棺墓



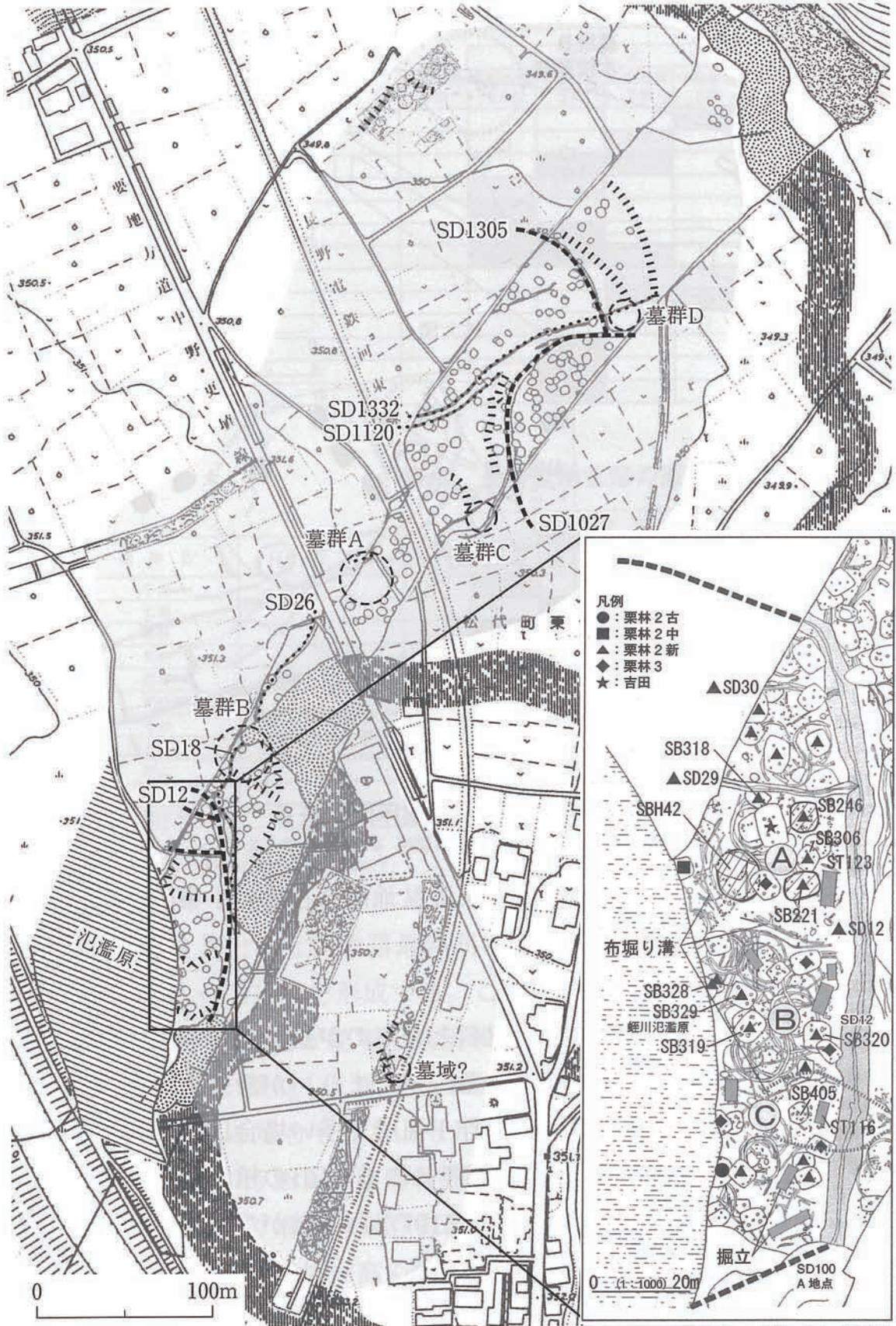
第4図 檀田遺跡 礫床木棺墓遺構図



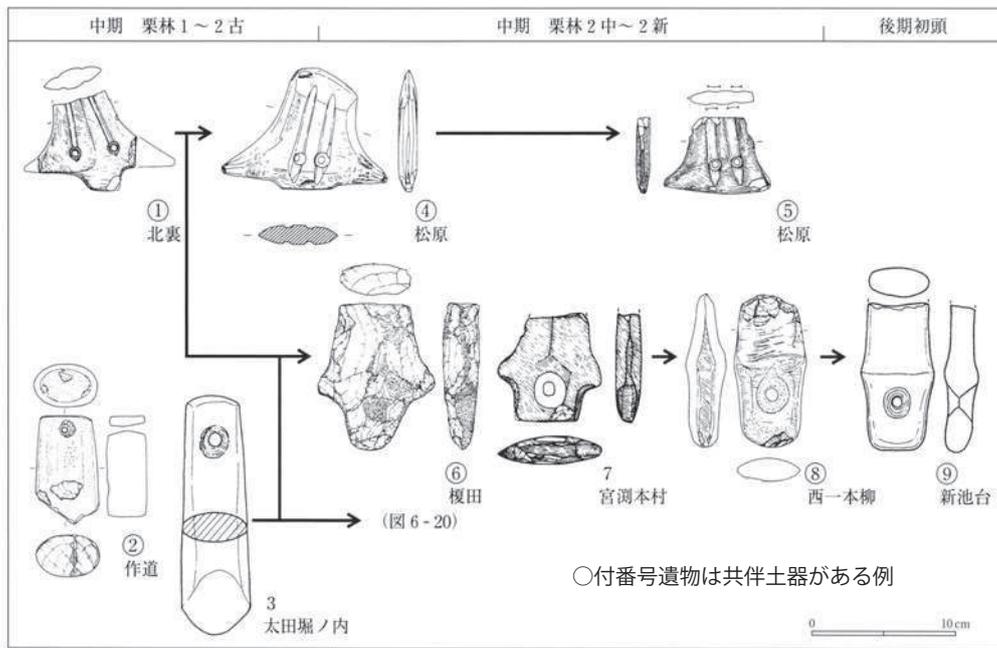
第5図 栗林2式新段階 中野市栗林遺跡第15・16地点遺構分布図 (1:3000)



第6図 栗林1式 飯山市小泉遺跡群の遺構分布図 (1:3000)



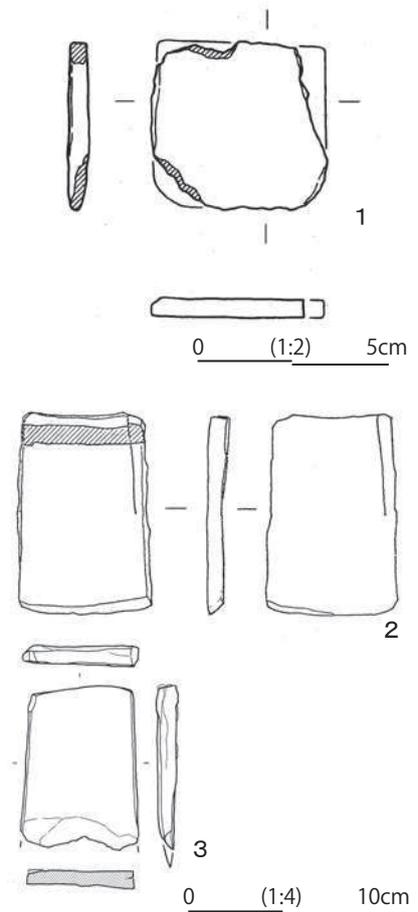
第7図 栗林2式新段階 長野市松原遺跡の遺構分布図



第8図 銅戈形・変形銅戈形・有孔石製品の系統関係と時期



第9図 長野市松原遺跡と各種石製品出土地点

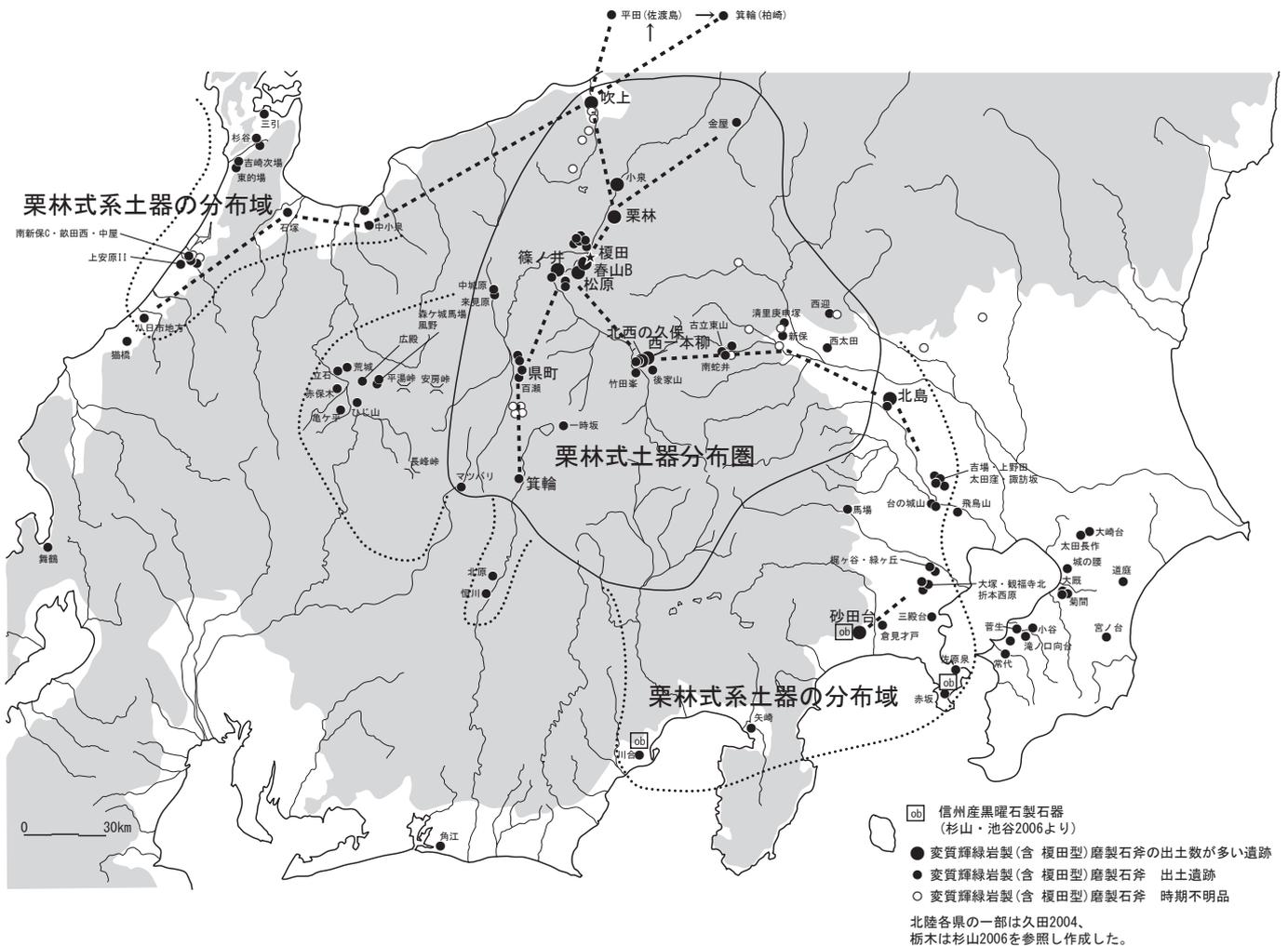


第10図 栗林式段階の遺跡出土の鉄製利器

1: 春山 B 2: 光林寺裏山 3: 社宮司



第 11 図 榎田遺跡・松原遺跡出土 変質輝緑岩製（榎田型）磨製石斧の工程品



第 12 図 変質輝緑岩製（榎田型）磨製石斧と栗林 2 式新段階の分布

『北陸型』木製品の出現と展開

愛知県埋蔵文化財センター 樋上 昇

はじめに

昨年は『小松式土器の時代—樹木からのアプローチ—』において、おもに西日本からの文化の受容地としての八日市地方遺跡に焦点を当てて報告した(樋上 2014)。

今回は『小松発・北陸新幹線ルート of 弥生文化を探る』というテーマなので、視点を東と北に向けて、小松式の時代に八日市地方遺跡で培われた文化がどのように東遷していくかをみていくこととしたい。

ただし木製品に関しては、富山以東の地域では弥生時代中期の資料が著しく少ないために、弥生時代後期～古墳時代前期をも視野に入れての報告となることを、あらかじめご了承ください。

『北陸型』鋤の出現過程

『北陸型』鋤には、直柄平鋤とナスビ形曲柄鋤がある(図1)。

直柄平鋤は頭部が山型を呈し、泥除け具は柄孔の両横に開けた小孔と前主面(使用者側の面)に設けた段で固定する。その起源は弥生時代前期の『山陰型』直柄平鋤に求められる(図2)。2種ある『山陰型』のうち、「凹頭系」が弥生時代中期前葉に北陸地方へ伝播する。弥生時代中期後葉には八日市地方遺跡で『北陸型』の祖型が認められるが、これとセットになるべき型式の泥除け具はまだ確認されていない(石川県小松市教育委員会 2004・2014)。

この『北陸型』直柄平鋤が定形化するのには弥生時代後期のことで、島根県姫原西遺跡へと流入する現象も認められる(樋上 2010a)。

また『山陰型』直柄平鋤そのものも、丸形頭系・凹形頭系ともに八日市地方遺跡を経由して宮城県中在家南遺跡にまで伝播する。

『北陸型』ナスビ形曲柄鋤の源流にあたる『瀬戸内型』ナスビ形曲柄鋤は弥生時代中期中葉の吉備地方で出現する(図3)。曲柄鋤と反柄をしっかりと固定し、かつ土に鋤を打ち込んだ際に柄と身がズレにくくする工夫からこのカタチが生ま

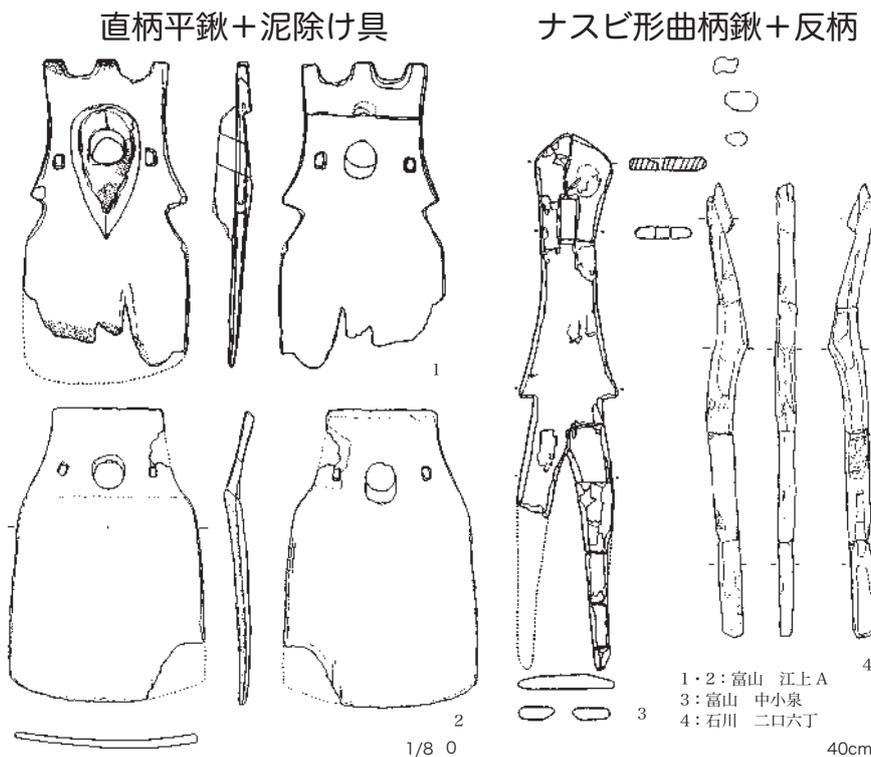


図1 『北陸型』直柄平鋤・ナスビ形曲柄鋤 (S=1:8)

弥生前期 弥生中期前葉 弥生中期中葉～後葉 弥生後期～古墳前期 古墳中期～終末期

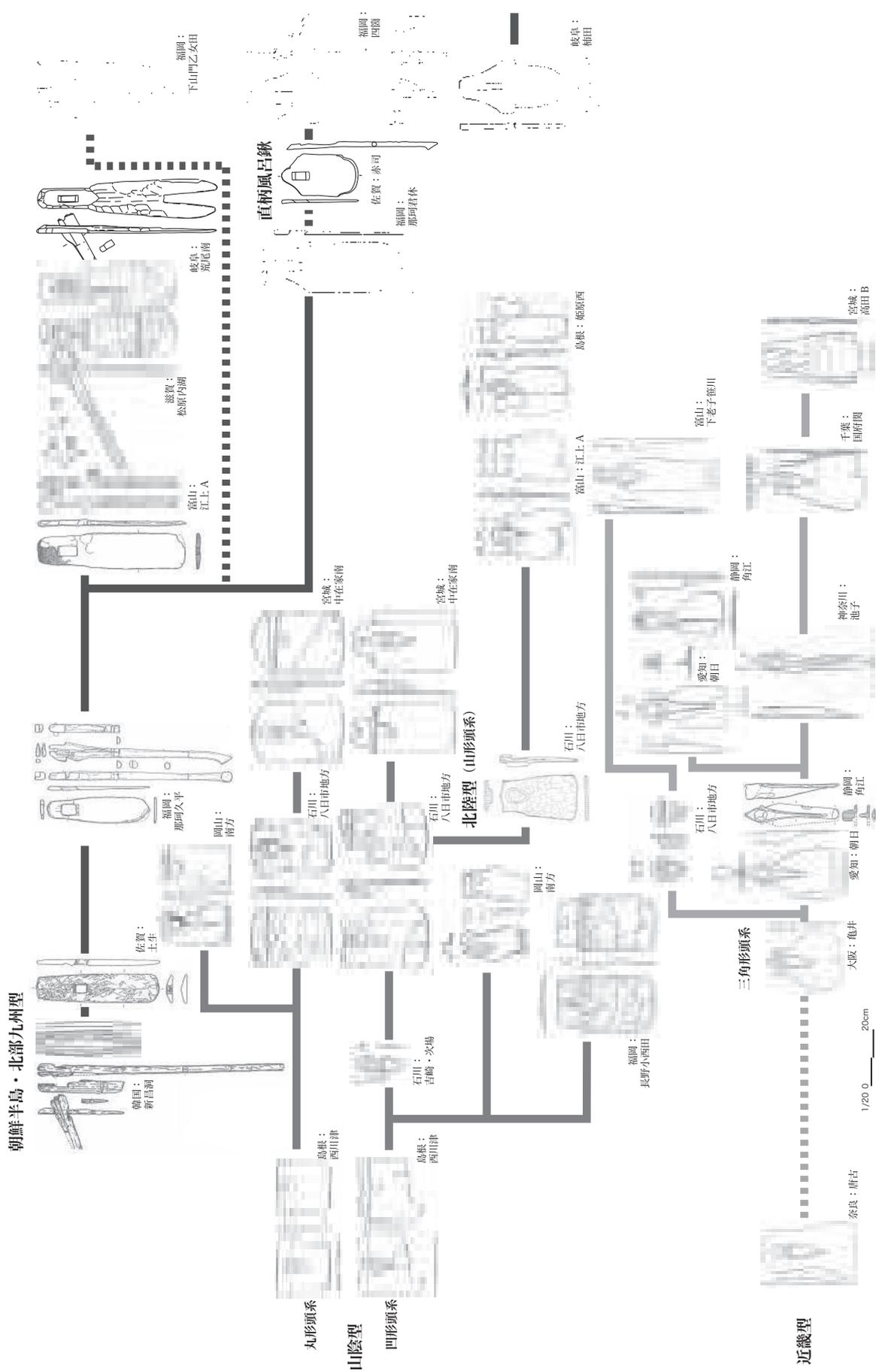


图2 地域型直柄平鐵の伝播過程 (S=1:20)

『北陸型』透かし彫り高杯の分布

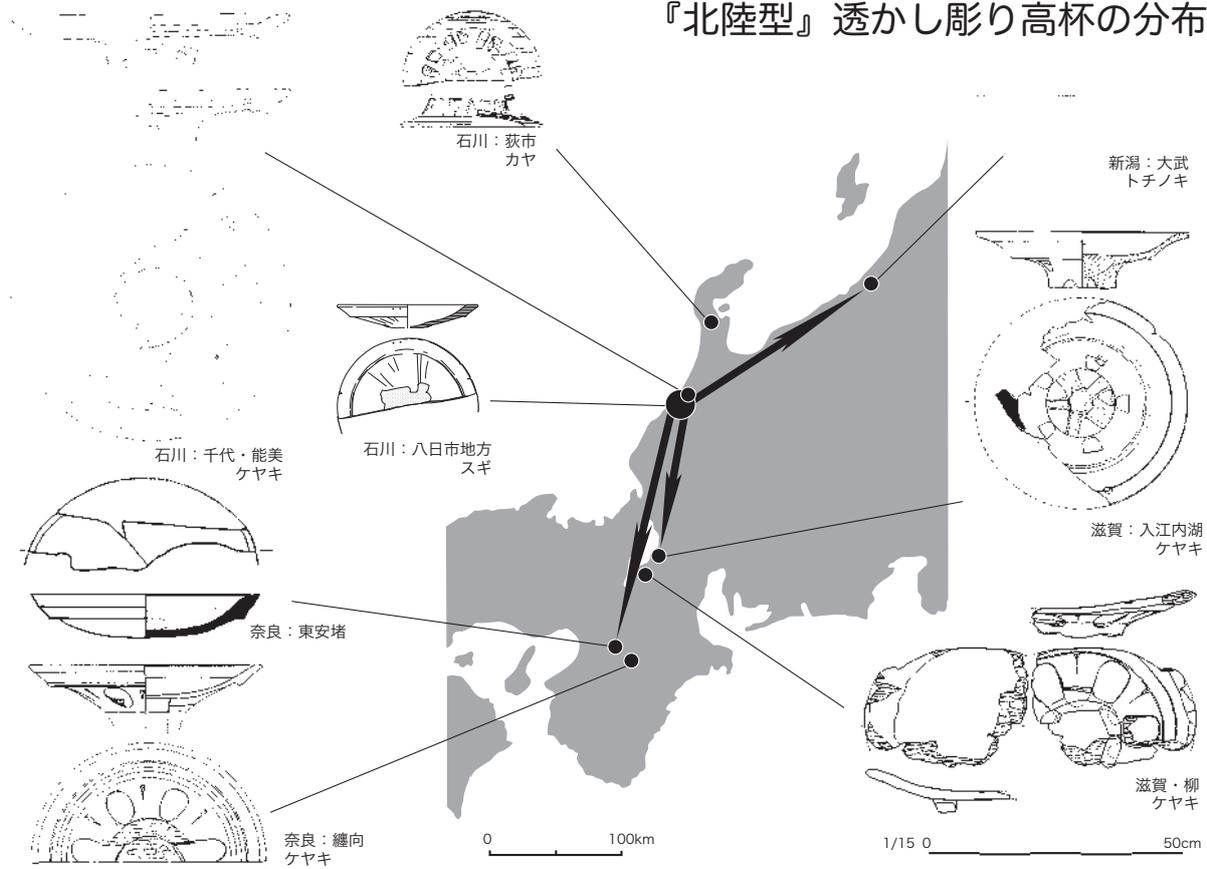


図4 『北陸型』透かし彫り高杯の分布状況 (S=1:15)

れた。これもまた、山陰地方を經由して弥生時代中期後葉に八日市地方遺跡へと伝播している。

それとは別に、『北陸型』ナスビ形曲柄鍬のもう一つの源流は『朝鮮半島・北部九州型』直柄鍬にある(図2)。方形柄孔と複雑な装着具をもつこの鍬は、弥生時代後期に北陸地方へ伝播し、そこから琵琶湖東岸部を経て岐阜県大垣市へと流入する。

この方形柄孔の直柄鍬とナスビ形曲柄鍬が融合したのが『北陸型』ナスビ形曲柄鍬である。柄の構造は図1右側のように簡略化するが、柄結合によって柄と身のズレは見事に防止されている。しかし、本来のナスビ形のカタチの意味は既に失われている。

柄によって柄と身を固定するナスビ形曲柄鍬は、古墳時代中期にU字形鉄刃が出現す

ることにより、古墳時代後期以降のナスビ形曲柄鍬の主流となる(樋上2012)。

この『北陸型』ナスビ形曲柄鍬は近年、新潟県糸魚川市の竹花遺跡でも出土しており、群馬県新保遺跡から宮城県高田B遺跡へと伝播していくルートの経由地として注目される(新潟県教育委員会ほか2011)。

『北陸型』高杯の源流と伝播

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、石川県内では、杯部の口径が40cmを超える大型の木製高杯が製作される。この高杯は外面に様々な透かし彫りをほどこすことが特徴で(久田・石川2005)、その点において同時期の北陸地方における土製高杯とも共通性が見いだせる。

この『北陸型』の透かし彫り高杯は、琵琶

儀杖形木製品 I 類の分布

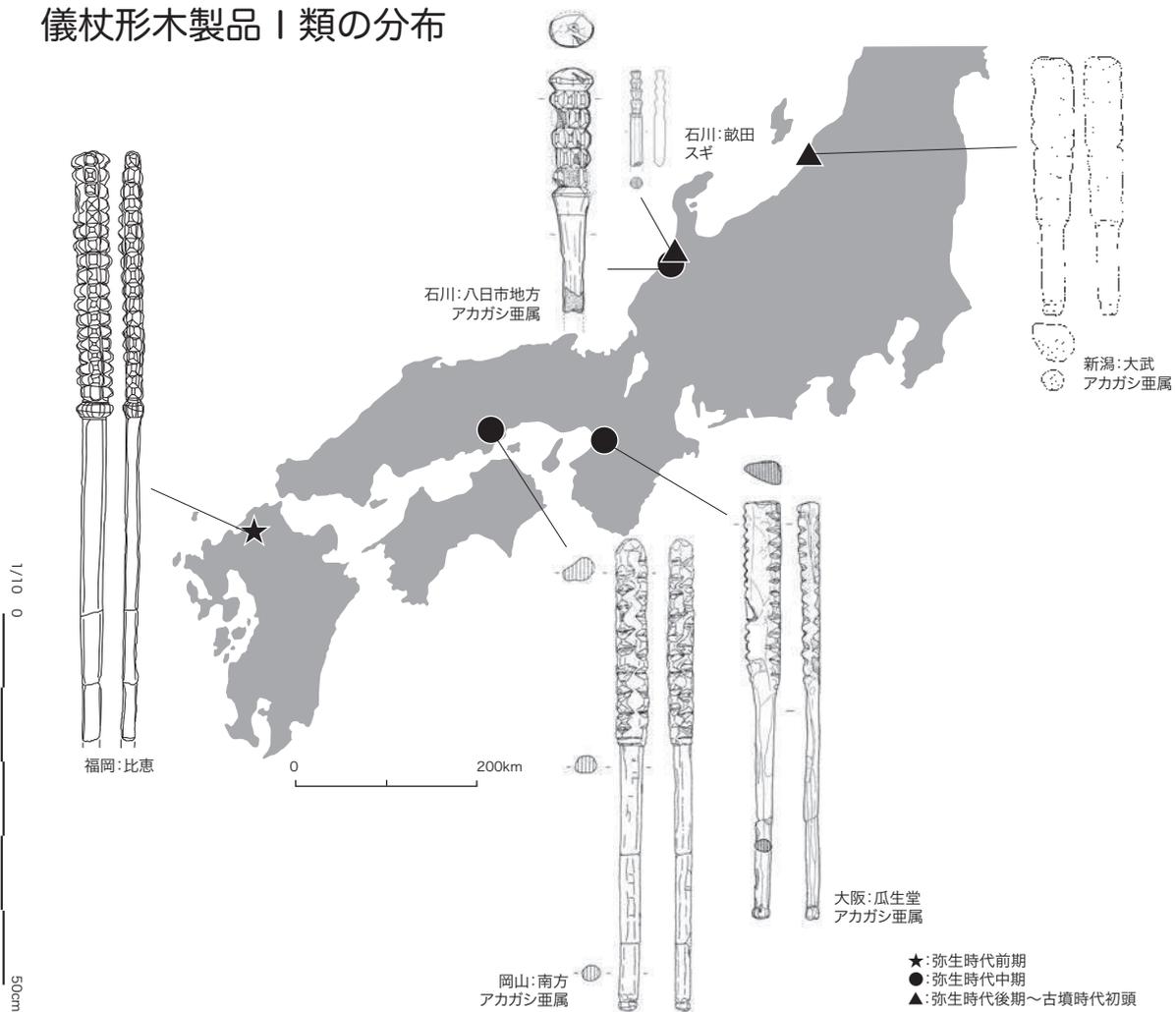


図5 儀杖形木製品 I 類の分布状況 (S=1:15)

湖東岸部を經由して奈良盆地（東安堵遺跡・纏向遺跡）へと伝播している（図4）。そのうち、東安堵遺跡出土例とほぼ同形同大のものが新潟県長岡市の大武遺跡から出土していることは注目に値する（新潟県教育委員会ほか2014）。

そして、この大武遺跡と東安堵遺跡出土例の起源と考えてよさそうなのが、八日市地方遺跡出土の木製高杯なのである。外面に段を有する肥厚した口縁端部と、そこから緩やかに内彎する形態に共通点が見いだせる。

儀杖形木製品の流れ

この大武遺跡からは、もう1点注目すべ

き木製品が出土している。それは私がかつて「儀杖形木製品 I 類」としたもので、上半部に無数の突起あるいは溝を刻んだ棒軸状の木製品である（樋上2010b）。

所属時期は弥生時代前期の福岡県比恵遺跡例が最も古く、弥生時代中期のものが岡山県南方遺跡と大阪府瓜生堂遺跡、そして八日市地方遺跡から出土している（図5）。石川県内では、さらに古墳時代前期の畝田遺跡においても認められている。

大武遺跡例は、溝が刻まれていない下半部が他の出土例より短い、隅丸方形を呈する断面の四隅に溝を刻むという点において、南方遺跡や瓜生堂遺跡の例と共通していること

から、同様の機能を有するものと考えて差し支えなからう。

この「儀杖形木製品Ⅰ類」に関しては、突起をほどこす（比恵・八日市地方・畝田例）か、溝を刻む（南方・瓜生堂・大武例）かで違いがあり、これまでみてきた鍬や高杯のように一貫した伝播ルートが現状では見えないため、今後の類例の増加を待ちたいところである。可能性としては、琵琶湖東岸部からの出土に期待している。

まとめにかえて

最後に紹介した「儀杖形木製品Ⅰ類」はひとまず置くとして、『北陸型』直柄平鍬・ナスビ形曲柄鍬の出現には山陰地方が深く関わっており、このことは昨年報告した「花卉高杯」を含む様々な精製容器の分布からも裏付けられる（樋上 2014）。

それとともに、八日市地方遺跡が『北陸型』直柄平鍬とナスビ形曲柄鍬の成立においてキーポイントとなっていることは疑い得ない。そして、八日市地方遺跡を新たな起点として、富山～新潟（～北関東～東北）と、そして琵琶湖東岸部～近畿地方という2つのルートが、『北陸型』透かし彫り高杯と、まだ傍証段階だが「儀杖形木製品Ⅰ類」から描き出すことが可能となった。

これから先、北陸新幹線の小松以西、特に福井県から近畿地方へのルートに関してはまだ確定していないようであるが、様々な考古学的資料を重ね合わせる限りにおいては、琵琶湖東岸部の米原駅で東海道新幹線に接続させるのが最もふさわしいと言えるのではないだろうか。

【参考文献】

- 石川県小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』
石川県小松市教育委員会 2014 『八日市地方遺跡Ⅱ（木器編）』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011 『姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2014 『大武遺跡Ⅱ（古代～縄文時代編）』
樋上 昇 2010a 「木製農耕具と耕作の技術」『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣
樋上 昇 2010b 「儀杖の系譜」『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣
樋上 昇 2012 「農具と農業生産」『古墳時代の考古学 5』同成社
樋上 昇 2014 「交流拠点としての八日市地方遺跡」『小松式土器の時代—樹木からのアプローチ—』小松市埋蔵文化財センター
久田正弘・石川ゆずは 2005 「白江梯川遺跡の木製高杯について—資料提示と問題点提起—」『石川県埋蔵文化財情報』第14号（財）石川県埋蔵文化財センター

石川県羽咋市

吉崎・次場遺跡

(公財) 石川県埋蔵文化財センター 久田正弘

所在地

石川県羽咋市吉崎町、次場町、鶴多町

位置と立地環境

邑智地溝帯の西端に位置し、日本海沿岸に形成された砂堤列の内側、邑知潟から日本海に流れる羽咋川左岸の微高地（現在の標高約 1.2 ～ 2.4 m）に立地する。羽咋総合運動公園の北側から次場町集落の北側周辺に及ぶ範囲に位置する。遺跡は、東西 580 m、南北 350 m を測り、約 20 万 m² 程度の面積である。

調査と概要

遺跡の発見は、昭和 27 年であり、羽咋高校地歴班により第 1 次調査（昭和 31 年）が実施され、能登を代表する弥生遺跡と認識された。その後、県・市による 18 次の調査で周辺の約 1 割程度が調査されたが、遺跡の本体は現集落の下に眠っている。昭和 58 年一部が国指定史跡に指定され、平成 11 年史跡整備が完了した。

遺構

周溝を持つ建物、掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓、溝、環濠などがある。低湿地に立地するために、建物の外側に溝を掘り、その土を盛土して周堤帯を持つ建物が基本となる。環濠は、日本海に向けて流れる河川と同じ方向に掘られている。

遺物

前期末から古墳時代前期までの土器が出土しており、中期前葉～中葉（写真 1）と後期後半は膨大な量だが、中期末葉は少ない。土器は、近畿・中国地方の影響が伺え、中期後半以降は山陰地方の影響が強まる。西日本系土器は、大阪府和泉地方の壺（中期前半）、生駒西麓産の大型壺（後期前半）が搬入されている。東日本系土器は、長野県周辺の土器が中期中葉～後葉に多く出土するが、搬入土器は少なく模倣土器

が殆どである。東北地方の天王山式土器（後期前半）は、搬入土器と模倣土器が少量ある。

銅鐸形土製品と分銅形土製品と土製鋳型が注目される。銅鐸形土製品（写真 2）は銅鐸を模倣したものである。中国地方に主体がある分銅形土製品（写真 3）は、文様から山陰地方との関係が伺える。銅鐸を鋳造した土製鋳型（外型 6 点、中子 1 点）は、後期前半頃に近畿地方からの技術伝播があったようである。

大陸系磨製石斧は、角柱体の安山岩を利用した自家消費的な生産が、中期前葉から後期前葉に行われており、各地から石斧が持ち込まれている。西日本の抉入り柱状片刃石斧（玄武岩製？）・輪島市周辺の石斧・加賀地方の石斧は少量、長野県善光寺平産の緑色岩類は多量に出土している。

巻頭図版 2-6（市道調査区）は西日本系の朝鮮式磨製石剣（前期末～中期初頭）、巻頭図版 2-7 は中細型銅剣を模倣した石剣と思われる。

玉類は、勾玉と管玉を作っている。勾玉は糸魚川産ヒスイを施溝分割で成形して、半月形や定型勾玉を作る。管玉は、緑色凝灰岩製が殆どだが、鉄石英製（赤色）も微量作る。工具では、石鋸は和歌山県紀ノ川流域の石材を、石針は地元の輝石安山岩を利用する。

鉄器は、中期後半～後期前半の板状鉄斧 1 点、後期後半の袋状鉄斧の曲柄 2 点がある。青銅器は、四螭鏡（舶載鏡）の破片を転用した懸垂鏡と仿製鏡が 1 点出土している。

まとめ

当遺跡で出土した生駒西麓産土器・分銅形土製品・土製鋳型は日本海側の北限であり、西日本人々との直接的交流が伺える。その交流の産物を求めて東日本人々が訪れた遺跡である。よって、西日本と東日本を繋ぐ交易の起点として利用された拠点集落と思われる。



写真1 中期の土器



写真2 銅鐸形土製品（展開写真）

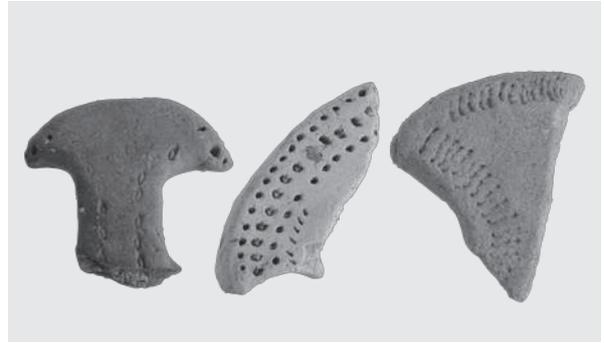


写真3 分銅形土製品



写真4 石斧製作工程品

富山県高岡市

いしづか 石塚遺跡

高岡市教育委員会文化財課 杉山 大晋

所在地

富山県高岡市石塚

位置と立地環境

高岡中心市街地の南東部に位置する。標高約11～12mを計る。旧庄川である千保川と小矢部川に挟まれた佐野台地上に立地する。

調査と概要

昭和42年5月に、石塚地区土地改良事業に伴い新設した排水路で土器片が採取された。その後、昭和43年に高岡市教育委員会によって発掘調査団が結成、富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブOB会が中心となって発掘調査が行われた。

昭和56年以降、道路建設や圃場整備事業、店舗建築等の開発が進み、それに伴う発掘調査が継続されている。

遺構

土坑や溝を中心とした遺構が各調査地区から確認され、弥生中期に大規模な集落が形成される。時期的に当遺跡は大きく2分でき、南半はⅡ～Ⅲ期、北半はⅣ期の集落に位置づけされる。その後、古墳初期に集落と墓域が形成される。

明確な住居址は南半で3棟、北半で4棟確認している。そのうち、南半の1棟は玉作の工房址と考えられる。しかし、圃場整備にて遺構面の削平がされており、住居址と認定できない土坑があり、住居址は実数より多いと考えられる。加えて方形周溝墓は6基以上確認されており、いずれも主体部や封土は削平されている。

遺物

出土遺物する弥生土器は、Ⅱ期～Ⅳ期まで確認されている。

櫛描文を特徴とする北陸独自の小松式・磯部式・専光寺式が中心である。外来系の土器は、瀬戸内地方、北近畿地方、信濃地方の土器があ

る。玉類は、ヒスイ製勾玉と緑色凝灰岩製管玉を中心としている。南半では未成品が出土する工房址が確認でき、その他の地区でも玉作関連遺物が出土していることから、当遺跡で製作されていたことが確認できる。

表1 石塚遺跡 年表

時代時期 区分	畿内 様式	八日市地方	石塚遺跡
		土器	
縄文後期		0	
縄文晩期 弥生前期	I	1	
		2	
弥生中期 前葉	—	3	石塚1期 (日本海ホーム地区SK108)
		4	
		5	
弥生中期 中葉	—	6	石塚2期 (S43調査区4号ピット 他)
		7	
		8	
弥生中期 後葉	—	9	石塚3期 (旭建設地区SK103 他)
		10	
弥生後期	—		石塚4期 (宮崎地区SI102 他)
弥生終末期	—		石塚5期 (きぼう地区SI02 他)
古墳前期	—		(新鮮市場地区SI01 他)
			(S43調査区1号ピット 他)
古墳中期			(都市計画道路地区SZ01 他)

集落

古墳

富山県高岡市

石名瀬 A 遺跡

高岡市教育委員会文化財課 杉山 大晋

所在地

富山県高岡市和田

位置と立地環境

高岡中心市街地の南東部に位置する。旧庄川である千保川と小矢部川に挟まれた佐野台地上に立地する。石塚遺跡の南に位置する。

調査と概要

昭和 40 年代に存在が確認され、当初は「寺野遺跡」と称した。昭和 57 年に近隣の圃場整備事業に伴う試掘調査が実施され、弥生中・後期の土器が見つかった。平成 6 年度に弥生中期後半から古墳時代前期までの遺物が多量に出土する河川跡が検出され、集落の存在が予想されるようになった。

その後、平成 17 年度より県道高岡環状線の建設に伴い試掘調査を実施したところ、多数の遺構・遺物が見つかった。そのため、遺跡の東西を貫くように発掘調査がなされ、弥生中期後半以降の集落と墓域が確認された。近接する石塚遺跡や下佐野遺跡とは、集落存続時期が異なることから、適宜移動していることが判明した。

遺構

遺跡北東部で弥生～古墳時代の周溝を持つ堅穴建物址が 12 棟以上確認しており、弥生中期後半～弥生後期の大規模な集落が形成される。石塚遺跡と同じく、圃場整備にて遺構面の削平がされており、住居址と認定できない土坑・ピットがあり、住居址は実数より多いと考えられる。掘立柱建物は 1 棟確認でき、布掘建物である。遺跡中央から南側でⅣ期の方形周溝墓 11 基確認しているが、対応する集落は見つかっていない。その他、土坑墓と推定されるような土坑も数基確認している。

遺物

出土遺物する弥生土器は、Ⅱ期～Ⅳ期まで確認されている。

楯描文を特徴とする北陸独自の小松式・磯部式・専光寺式が中心である。外来系の土器は、瀬戸内地方、北近畿地方、信濃地方の土器がある。玉類は、ヒスイ製勾玉と緑色凝灰岩製管玉を中心としている。南半では未成品が出土する工房址が確認でき、その他の地区でも玉作関連遺物が出土していることから、当遺跡で製作されていたことが確認できる。

表 2 石名瀬 A 遺跡 年表

時代時期 区分	畿内 様式	八日市地方	石名瀬 A 遺跡
		土器	
縄文後期		0	
縄文晩期	Ⅰ	1	
弥生前期		2	
弥生中期 前葉	—	3	
	Ⅱ	4	
		5	
弥生中期 中葉	—	6	
	Ⅲ	7	
		8	
弥生中期 後葉	—	9	(環状線 8 区方形周溝墓群) (環状線 4 区 S1007 他) (環状線 9 区土坑 他)
	Ⅳ	10	
弥生後期	—		
弥生終末期	Ⅴ		(環状線 4 区 SIS1005 他) (環状線 5・6 区 堅穴建物・掘立柱建物) (環状線 9 区土坑 他)
古墳前期	—		
古墳中期			

墓域
集落

集落



写真5 石塚遺跡 周辺遠景



写真6 石名瀬A遺跡 8区垂直全景(方形周溝墓群)

新潟県上越市

ふきあげ

吹上遺跡

上越市教育委員会 湯尾 和広

所在地

新潟県上越市大字稻荷字吹上ほか

位置と立地環境

高田平野の南西部に位置し、関川支流の青田川によって形成された扇状地の東端に立地する。北陸新幹線の越妙高駅から約 1.5 km 南西の一带に広がり、日本海側と長野方面とを結ぶルート上にある。

調査と概要

平成 12 年度から実施した道路建設に伴う発掘調査で、弥生時代中期の玉作り遺跡と判明した。遺跡は 7ha 以上に及び、弥生時代中期から古墳時代前期までの長期間存続したことがわかった。遺跡は、道路を盛土から架橋方式に変更して保存された。

平成 20 年 7 月 28 日、近接する斐太遺跡、釜蓋遺跡とともに「斐太遺跡群」として国史跡となった。なお、出土品 1320 点は新潟県有形文化財である。

遺構

遺跡は、南北に流れる 2 条の旧河道の周囲に展開する。集落成立期には、最高地点周辺に広場的な空間が設定されて土坑群が広がり、周囲に玉作り工房群が配置される。その後、方形周溝墓群が造られて次第に墓域を拡大する。墓域の外側は、居住域が数か所に分散して形成される。

遺物

出土土器の分類から集落の変遷は I～VI 期の 6 時期に分けられる。

【I 期】

ムラの成立期で、土器は 7～8 割が北陸系の小松式土器、2 割前後が信州系の栗林式土器である。また、西日本系や東海西部系など遠隔地

の土器も見られる。さらに、ヒスイ製勾玉や緑色凝灰岩製管玉の玉作りが盛行する。なお、銅鐸形や銅戈形の土製品などの特殊遺物も見られる。

【II 期】

玉作りが減少し、大型方形周溝墓群が築かれる時期にあたる。土器は、北陸系が 3 割、信州系が 6～7 割とその割合が逆転する。

【III 期】

ムラの縮小期。局所的に居住域が形成されたと考えられる。土器は北陸系一色となる。玉作りは確認されていない。

【IV～VI 期】

IV 期に方形周溝墓群が築かれ、墓域が拡大する。居住域は数か所に分散する。土器は北陸北東部系で占められる。以後、集落の様相は VI 期まで同様である。

長野県飯山市

こいずみ
小泉遺跡

飯山市教育委員会 丑山 直美

所在地

長野県飯山市大字常盤字長峰越、大字照里字南原

位置と立地環境

飯山盆地のほぼ中央を南北に延びる長峰丘陵上に位置する。遺跡は長峰丘陵が分岐する地点にあたり、丘陵の西側に広がる通称外様平の低湿地に接したなだらかな斜面に立地する。東西南はそれぞれ丘陵山地に囲まれ、北に向かって開口する地形を呈する。仔細にみると小河川に開析された丘陵上の台地がいくつか観察されるが、調査対象地区内には6か所の丘陵地が認められ、これらの丘陵上に遺跡が存在している。

調査と概要

遺跡は弥生時代中期から後期にかけての集落址である。長峰工業団地造成にともなって昭和63年、平成2年、平成3年と緊急発掘調査が行なわれた。遺跡は広大な範囲に分布し、調査面積は31500㎡に及ぶ。遺跡からは弥生時代中期及び後期の膨大な遺構・遺物が発見され、県内でも有数の弥生時代遺跡であることが判明した。

遺跡の規模の大きさから小丘陵ごとに数軒単位で居住していたものと推測される。

遺構

中心となる遺構は竪穴住居址と掘立柱建物址で、竪穴住居址は50余軒、掘立柱建物址は120余棟発見されており、住居址よりもはるかに多い掘立柱建物址の検出から、大規模な稲作経営が行なわれていたと推測される。

また、150余基の土壇墓、木棺墓群が居住域とはなれた丘陵先端部に占地しており、明確な墓域を形成した集団墓地としての性格がうかがえる。

遺物

出土遺物は弥生時代中期・後期の土器が中心である。各竪穴住居を中心としてそれぞれの時期の土器がまとまって出土した。弥生中期栗林式土器、後期箱清水式土器がみられる。また、後期住居址から紡織具と考えられる流水文・雷文が刻まれた木製品が出土している。木棺墓からは管玉・勾玉の装飾品が発見されている。

長野県中野市

やなぎさわ
柳沢遺跡

中野市立博物館 土屋 積

所在地

長野県中野市柳沢

位置と立地環境

善光寺平と通称される長野盆地を北流する千曲川は盆地北端で、地域のランドマークである高社山の西麓に至る。その高社山麓の崖錐末端、千曲河畔に位置する。千曲河畔は水面から比高5m以上の浸食崖となっている。

高社山以北を「岳北」、以南を「岳南」と呼び、気候・風土の境界である。岳北から峠を越え上越市吹上遺跡まで35km、盆地南部の長野市松原遺跡まで30km。千曲川に山が迫った柳沢遺跡付近は、岳北と岳南、善光寺平と上越平野・日本海をつなぐ河川・陸上交通の結節点と言える。

調査と概要

2006～2008年度、千曲川築堤事業に伴い、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査された。調査区域は遺跡西端の千曲川沿いで、およそ幅40m、延長500m。

2007年10月17日、青銅器埋納遺構を確認。青銅器埋納坑として、日本最東端・最北端の調査例であり、偶然の発見が多い青銅器が、同時期の集落・墓域・水田跡とともに発掘調査過程で明らかとなった。九州型銅戈と近畿型銅戈の初の共伴例となる。

2013年、すべての調査資料が長野県から中野市へ移譲され、中野市立博物館が保管・公開している。2014年、銅鐸5点・銅戈8点など計212点が重要文化財に指定された。

遺構と遺物

遺跡は栗林式（弥生時代中期後半）から吉田式（後期はじめ）・箱清水式（後期後半）まで継続し、中心は中期後半である。中期後半の周辺遺跡と比較して、大集落とは言えない。

埋納坑から銅戈7・銅鐸1、調査の掘削過程で元位置を失った銅戈1・銅鐸4。合計13個の青銅器は同一の埋納坑にあったと考えられる。銅戈は刃を立てて並べ、その横に銅鐸が鱗を立て水平に埋められた。1号銅戈は九州型、他は近畿型あるいは大阪湾型で、腐食の程度が1号と他では相当異なる。銅鐸は完全な形で埋められ、埋納時以後に壊れたとされる。外縁付鈕式4個、一つは破片で分類困難な点があり、外縁付鈕式または扁平鈕式。鈕・内面突帯は長期間の使用による磨滅が著しい。舌は出土しなかった。青銅器の型式組成・層位から、中期末から後期初頭の埋納とされ、早い段階の青銅器埋納例である。

青銅器埋納と同時期の集落・墓域・水田跡があるが、集落域の西端にあたり、堅穴住居の数は少ない。調査区域南端の水田跡は調査区域外にも広がる。

2か所に礫床木棺墓群がある。青銅器埋納坑から北40mの墓群は、径15mの浅い周溝に囲まれる。1号墓は、木棺墓の周囲を大きめの石で囲み、管玉101個を副葬する。副葬品は管玉のみで、9号墓が27個、16号墓が3個、4・6号墓が各1個、他の13基は副葬品を持たず、1号墓以外は礫床だけで周囲の礫床状施設を持たない。明確に階層差を示す中心埋葬と周辺埋葬からなる集団墓として、全国でも早い例であり、青銅器祭祀と階層分化の関連をうかがわせる。

栗林土器様式の成立には上越・北陸地域が深くかかわったとされる。柳沢青銅器の入手も同様である。その使用・埋納の過程も、継続的交流がなければ説明が難しい。上越市吹上遺跡は、柳沢の玉類の供給地と考えられ、銅戈型土製品など青銅器に関連する遺物がある。八日市地方遺跡には、シカの線刻絵画土器や銅戈柄・戈型木製品があり、柳沢遺跡でもシカ絵線刻壺がある。

ちなみに栗林式の標識遺跡は、柳沢遺跡から南7kmにある中野市内の遺跡である。

埼玉県熊谷市・行田市

池上遺跡・小敷田遺跡・古宮遺跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 吉田 稔

所在地

埼玉県熊谷市上之・池上 行田市小敷田

位置と立地環境

J R熊谷駅から東へ約4 kmに位置し、新規熊谷扇状地末端部と、東に広がる妻沼低地との境にあたり、北に星川、南に忍川が東流している。遺跡の標高は約22 mで、東西に延びる複数の細長い自然堤防上に分かれて立地している。遺跡周辺は県北部有数の穀倉地帯が広がる。

池上遺跡・小敷田遺跡は国道125号行田バイパス及び、国道17号熊谷バイパスの建設に伴って発掘調査が行われ、一遺跡群としてまとまる。古宮遺跡は、埼玉国体アクセス道路の建設に伴って発掘調査が行われ、池上遺跡の東側約200 mに位置している。

周辺遺跡は、北西1.5 kmに弥生時代中期後葉の集落跡に加え、水路、水田跡などの生産域がそろって発見された北島遺跡、西側1～2 kmの範囲には諏訪木遺跡、東日本有数の大規模集落である前中西遺跡、平戸遺跡など、弥生時代中期中葉から後期前葉にかけての遺跡が点在し、県北部の拠点集落群を形成していた。

調査の概要

池上遺跡は、弥生時代中期中葉から古墳時代前期、古代、中世にまたがる複合遺跡である。弥生時代中期の住居跡は11軒、環濠3条、土坑34基であった。環濠は確実なものは1条で、住居跡は環濠の両側にあり、東側低地にかけてまとまる。また、環濠と軸線をそろえている。土坑は住居跡の周囲に構築されているが、墓坑と断定できるものはない。遺跡の北側には星川が流下し、南側には小敷田遺跡で検出された河川跡が入り込むため、環濠はこれらを繋ぐ区画溝（直線水路）として機能した可能性もある。集落の南側に接して小敷田遺跡で調査された3

基の方形周溝墓（写真掲載）が発見された。

小敷田遺跡は、弥生時代中期中葉から古墳時代前期、古墳時代後期、古代にまたがる複合遺跡である。細長い調査区を横断する河川跡の両岸に形成された自然堤防上に弥生時代の住居跡が17軒、方形周溝墓4基、土坑120基が発見された。横断する河川跡から、弥生時代から古代にかけての木製品が多く出土した。弥生時代の遺構は、大きく2つのグループに分かれ、第1のグループは池上遺跡に続き、第2のグループは南側の低地部を隔てた自然堤防上にまとまっている。それぞれのグループに方形周溝墓が伴っている。また、第2グループには池上遺跡より新しい時期の遺構が発見された。

古宮遺跡は縄文時代晩期から中世にまたがる複合遺跡である。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、土坑16基である。遺構の分布は3箇所ある調査区のうち西側の2箇所に分布し、調査区北側を流れる星川河畔より竪穴住居跡2軒を中心とする一群と、南側の調査区に散在して発見された。

遺物

池上遺跡・小敷田遺跡・古宮遺跡では、北陸地方を中心に分布する「小松式土器」が発見された。器種は、壺と甕が大半を占める。また、本遺跡と北陸地方の中間地域である信州地方に分布する栗林式土器も発見されている。この他に、南関東地域、北関東地域、南東北地域など広範囲から持ち込まれた土器も発見された。

土器の他には、古宮遺跡で翡翠製勾玉、管玉が発見されたほか、小敷田遺跡では、管玉の他にサヌカイト製の打製石剣、磨製の石庖丁が発見された。

まとめ

池上遺跡は、当地域に導入された本格的な灌漑農耕を基盤とするいわゆるパイオニア的な集落であり、そこから小敷田遺跡、古宮遺跡などが拡散、派生してゆく。西日本由来の灌漑農耕技術の伝播を北陸「小松式」土器を使う人びとが担っていたことが思い起こされる。

〔図版出典〕

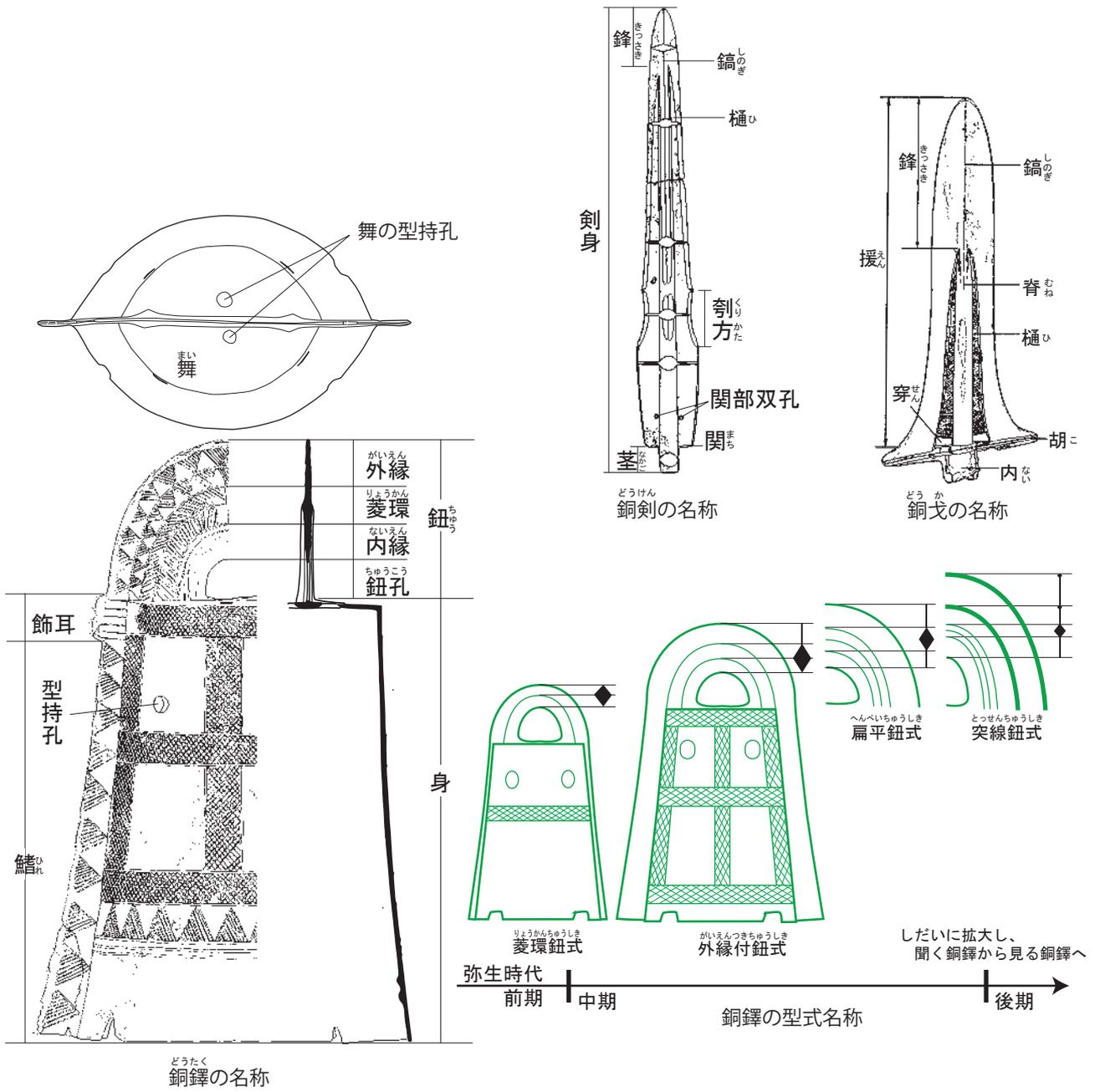
章	項	図表番号	図表名	所蔵者・提供者・撮影者・作成者
巻頭図版	巻頭 1	1	遺跡遠景	小松市埋蔵文化財センター所蔵
		2	出土品集合	小松市埋蔵文化財センター所蔵、小川忠博氏撮影
	巻頭 2	3	遺跡遠景	羽咋市教育委員会所蔵提供、久田正弘氏作成
		4	玉作工程品	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供
		5	銅鐸形土製品	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供
		6	朝鮮式磨製石剣	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供
		7	銅剣模倣石剣	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供
	巻頭 3	8	遺跡遠景	高岡市教育委員会所蔵提供
		9	出土土器集合	高岡市教育委員会所蔵、当センター撮影
		10	SX07 出土玉作工程品	高岡市教育委員会所蔵、当センター撮影
	巻頭 4	11	遺跡遠景	上越市教育委員会所蔵提供
		12	出土品集合	上越市教育委員会所蔵提供、小川忠博氏撮影
		13	勾玉製作工程品	上越市教育委員会所蔵提供、小川忠博氏撮影
		14	管玉製作工程品	上越市教育委員会所蔵提供、小川忠博氏撮影
	巻頭 5	15	遺跡遠景	飯山市教育委員会所蔵提供
		16	出土品集合	飯山市教育委員会所蔵、当センター撮影
	巻頭 6	17	柳沢遺跡と千曲川	中野市立博物館所蔵提供
		18	礫床木棺墓	中野市立博物館所蔵提供
		19	シカ絵土器	中野市立博物館所蔵提供
		20	銅鐸と銅戈	中野市立博物館所蔵提供
	巻頭 7	21	遺跡遠景	埼玉県教育委員会所蔵提供、吉田稔氏作成
		22	小敷田遺跡第 1 号方形周溝墓 出土品集合	埼玉県教育委員会所蔵提供、吉田稔氏作成
基調報告	笹澤氏資料	図 1	北陸北東部および東日本への小松文化の波及と玉の流通ルートの想定	笹澤正史氏作成
		図 2	八日市地方遺跡の小松式土器と他地域の小松式土器との比較 1	笹澤正史氏作成
		図 3	八日市地方遺跡の小松式土器と他地域の小松式土器との比較 2	笹澤正史氏作成
		図 4	北陸各地の緑色凝灰岩製管玉の作り方	笹澤正史氏作成
		図 5	新潟県における縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての建物の変遷	笹澤正史氏作成
		図 6	新潟県上越市吹上遺跡とおもな出土遺物	写真はすべて上越市教育委員会所蔵提供、構成は笹澤正史氏
		図 7	吹上遺跡におけるムラの変遷と土器系統の比率の変化	笹澤正史氏作成
		図 8	長野県に運ばれた青銅器と玉	「長野県中野市柳沢遺跡の青銅器埋納土坑」「埋納土坑の銅戈」「柳沢遺跡 1 号礫床木棺墓に副葬されていた管玉」は中野市立博物館所蔵提供、「光林寺裏山遺跡出土品」「勾玉・管玉・土器・小玉」は東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives、そのほかは笹澤正史氏作成
		図 9	北陸新幹線沿線に位置する弥生時代中期の代表的な集落遺跡と小松文化の波及ルート	笹澤正史氏作成

章	項	図表番号	図表名	所蔵者・提供者・撮影者・作成者	
基調報告	吉田氏資料	表 1	北陸地域の青銅器・青銅器模倣品	吉田広氏作成	
		図 1	藤江 B 遺跡出土中細形 BC 類銅剣と類例	吉田広氏作成	
		図 2	八日市地方遺跡出土武器形木製品	吉田広氏作成	
		図 3	八日市地方遺跡および加賀・能登地域出土青銅器模倣品	吉田広氏作成	
		図 4	吹上遺跡出土青銅器模倣品	吉田広氏作成	
		図 5	柳沢遺跡および柳沢遺跡他出土青銅器	吉田広氏作成	
		図 6	信州および周辺の銅戈模倣品	吉田広氏作成	
		図 7	中部高地の銅戈模倣	吉田広氏作成	
		馬場氏資料	第 1 図	栗林式土器の編年〔長野盆地南部・松原遺跡出土〕	馬場伸一郎氏作成
			第 1 表	栗林式の編年的位置付け	馬場伸一郎氏作成
			写真 1	栗林式段階の遺跡で確認した土器表面圧痕と種実	遠藤英子氏提供
			第 2 図	栗林式 1 式～ 2 式古段階 長野県檀田遺跡の竪穴住居遺構分布	馬場伸一郎氏作成
			第 3 図	檀田遺跡で検出された礫床木棺墓	長野市教委 2004 より引用
			第 4 図	檀田遺跡 礫床木棺墓遺構図	長野市教委 2004 より引用
			第 5 図	栗林 2 式新段階 中野市栗林遺跡第 15・16 地点遺構分布図	馬場伸一郎氏作成
			第 6 図	栗林 1 式 飯山市小泉遺跡群の遺構分布図	馬場伸一郎氏作成
			第 7 図	栗林 2 式新段階 長野市松原遺跡の遺構分布図	馬場伸一郎氏作成
			第 8 図	銅戈形・変形銅戈形・有孔石製品の系統関係と時期	馬場伸一郎氏作成
			第 9 図	長野市松原遺跡と各種石製品出土地点	馬場伸一郎氏作成
			第 10 図	栗林式段階の遺跡出土の鉄製利器	長野県埋文セ 1999・1978 より引用
		第 11 図	榎田遺跡・松原遺跡出土 変質輝緑岩製(榎田型) 磨製石斧の工程品	馬場伸一郎氏作成	
		第 12 図	変質輝緑岩製(榎田型) 磨製石斧と栗林 2 式新段階の分布	馬場伸一郎氏作成	
	特別寄稿	樋上氏資料	図 1	『北陸型』直柄平鋏・ナスビ形曲柄鋏	樋上昇氏作成
			図 2	地域型直柄平鋏の伝播過程	樋上昇氏作成
			図 3	地域型曲柄平鋏の伝播過程	樋上昇氏作成
			図 4	『北陸型』透かし彫り高杯の分布状況	樋上昇氏作成
図 5			儀仗形木製品 I 類の分布状況	樋上昇氏作成	
紙上報告	吉崎・次場遺跡	写真 1	中期の土器	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供	
		写真 2	銅鐸形土製品(展開写真)	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供	
		写真 3	分銅形土製品	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供	
		写真 4	石斧製作工程品	石川県埋蔵文化財センター所蔵提供	
	石塚遺跡・石名瀬 A 遺跡	表 1	石塚遺跡年表	高岡市教育委員会提供	
		表 2	石名瀬 A 遺跡年表	高岡市教育委員会提供	
		写真 5	石塚遺跡周辺遠景	高岡市教育委員会所蔵提供	
	写真 6	石名瀬 A 遺跡 8 区垂直全景(方形周溝墓群)	高岡市教育委員会所蔵提供		

※ 1 巻頭図版は、各遺跡報告者と当センター職員が協議のもと構成しました。

※ 2 図中に配置された実測図等の出典は、各報告者が文章内に明記している通り。

特に明記のない場合は各遺跡報告書からの引用。



付図 銅鐸・銅剣・銅戈の名称 (小松市埋蔵文化財センター作成)

フォーラム

小松発・北陸新幹線ルート of 弥生文化を探る

発行日 平成 27 年 11 月 20 日

発 行 小松市・小松市教育委員会

編 集 小松市埋蔵文化財センター

〒923-0075

石川県小松市原町ト 77-8

TEL 0761-47-5713